野津原方言集 続

13

「老　松」　　'86リスボン市長賞　F10号（53cm×46cm）

野津原方言集　№１３　《通算２３》

表紙画……版画　寺司勝次郎
題字……姫野順子

★　ご協力いただいた皆様　★

岡本政雄、寺司勝次郎、斎藤盛人、工藤町子、河村アヤ、
佐藤喜久代、赤星美津子、秦利彦、野津原商工会青年部、
筒井三ッ生、住田政利、後藤忠生、波多野テル子。

★　使わせていただいた資料　★

あの日あの時、小学館原色百科事典、六の渡しあれこれ、
野津原文化財調査こぼればなし、野津原読み語り会資料、
野津原歴史調査記録会資料、七瀬の里のいわれと伝説、
肥後街道物語資料、野津原公民館、月の唄資料。

調査スタッフ《収拾、編集、印刷、製本》
小野寿祐、佐藤源治、那須政子、赤星ヨシミ。
監修…小野寿祐子、赤星ヨシミ。カット…那須政子。
印刷、製本…小野寿祐、那須政子、赤星ヨシミ。
資料調査…支援。構成プリンター…佐藤源治。

平成２３年８月吉日

野津原方言調査会　大分市大字竹矢
会長　小野寿祐
☎　０９７⇨５８８⇨０５７２

屋根の版画家

寺司（てらし） 勝次郎（かつじろう）

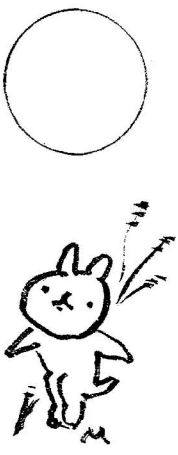
大分市三ヶ田町10
☎ (097) 543−5381

日本版画会会員。ル・サロン会員。

〔主要受賞歴〕
1977年スイス美術賞展優秀賞。
1979年フランス美術賞オンフルール展金賞。
1986年ポルトガル国際展リスボン市長賞。
1988年フランス国際親善美術展一等賞。
1990年フランス・カーニュ国際美術大賞展金賞。
1990年イギリス国際親善美術展ミドルスブロー市長賞。
1991年フランス「ル・サロン展」銀賞。
1993年イギリス・オックスフォード国際美術大賞展1位。
1993年フランス国際親善美術展1位。
1994年大分合同新聞文化賞（芸術部門）。
1998年文部大臣奨励賞受賞
海外展受賞45回。国内展受賞10回。

◆1927年大分市生まれ。南大分小、大分中、海軍航空隊勤務（甲飛13期）を経て、1948年大分経済専門学校（現大分大学経済学部）卒業。在学中に「絵画同好会」を結成。1954年郵政省の年賀状版画コンクール入賞を機に油彩より屋根瓦の木版画に専念する。
◆1966年日展に初出品初入選（67、68、74年にも入選）、また日版展、白日展でも入選・入賞を重ねるが、1976年より海外展に積極的に出品し、10数ヵ国での公募展にて45回の受賞を数える。
◆師につかず、弟子をとらず、自由な立場で独自の新境地を開き、屋根の版画家として確たる地位を築く。今後も全国主要都市での個展活動を中心に、生涯1000点の屋根の版画製作を目標に意欲を燃やしている。

大分川ん支流七瀬川んほとりゅ歩くと　川ん流れは見事に澄んじょる。そん狭ぇ川ん周りゅ緑の　木々が影ぅ映しち別天地ん環境を　一層美しゅ見せちくるる自然の世界。まるじ時代劇にでん出るごたる場所　時折跳ぬる小魚ん銀燐が　キラリ輝くと心を和ませ　そよ風は無性にも優しゅ語りかけちくるる　こよなく愛しちょる横顔にゆう似合う。平成８年１１月開催ん　豊後高田『方言弁論大会』じゃ２位ん栄冠も取得したが　『鬼瓦と版画達人の妙技』ぁ見事ん語りに会場唸らせた。人の巡り合わせとは　生まれついてん宿命かん知れんち　思うが勿体ない事でんある。



はじめに　《続編№１３号》

卯年生まれの版画家　寺司勝次郎さんの力作を　表紙画に快く使わせて　下さいました。厚くお礼を申し上げます。いつの世も女性の底力、優しい心の『ツツロク人生』　心の絆が支えあう時　故郷にはまだまだ昔の　生活用語の方言が生きているようです。多くの愛読者の支えに　続く限りこの収拾を巡り会わせた　嬉しい宿命として継続いたします。

子どもの世界には方言も使い　読み聞かせ、読み語りを載せ『宝の玉手箱』には　読者の皆様の情報を盛り込みました。江戸期の６の瀬《胡麻鶴》も　愛読者の資料が生かされて　新旧織り交ぜた話題がキラキラ。五助街道物語は第３回で　坂口⇨湛水までを　連れの旅人と馬子の五助さん　軽快な話と馬子唄が　よく似合うようです。

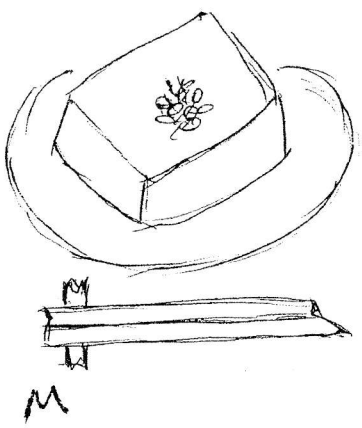
あげな話こげな話　もろもろの影の話題や　案外知らない参考話　知っておくと役立つ　受け売りなど賑やか。故郷の味⇨見直されつつあるニラが　今回はクローズ。愛読者の熱心な協力は　会員にも刺激を与えてくれました。窓から見る視野が広がるような　方言単語の説明は果てしなく広がり　どこまで行くのか古い生活用語は　まだまだ生き続けているようです。

必ずしも方言ではない言葉　差別用語　卑下した言葉　使われない用語　などもあると思いますが　方言集の性質上今回も載せてありますが　ご了承ください。ご意見など頂き参考にしながら　素人集団次回も皆様の応援で　継続の予定にしています。ご愛読ご支援よろしく　お願い申し上げます。今残さないと消え去り　失われるからです。

目次

方言子どもの世界……5
人の心通い合うもん……6
宇曾んダイコン漬……8
あんたに会えた日……9
竜の恩かえし……11
美代ちゃんの花束……14
女性の底力……17
飲む人より配る人が…18
ばあさんにゃ叶わん…20
宝の玉手箱……23
七瀬の友……24
青たたみ品評会……25
よろず漫才……26
能登かぐら……29
涅槃図……30
地蔵菩薩……31
野仏……32
口説き唄里唄……33
ちょいと一服……35
旅は道連れ……37
方言単語の広がり……41
い⇨チ　い⇨ム　そして
六の渡し場……51
五助街道物語……55
坂口石だたみ……56
湧いた岩清水……58
三助おどり……61
夢とロマン……63
水車小屋……65
諏訪の恋唄……67
あげな話こげな話……71
茶の実と茶飲み……72
そん味そん喜び……74
観音様の巡り会い……75
自然と人間の現世……77
ふるさとん味……81
ニラ料理あれこれ……82
方言単語のひろがり……91
い⇨メ　う⇨ウ　そして
終わりに……99
伝言板……100

★　発足２０周年記念付録
民話、伝承１０編…追加



子ども世界

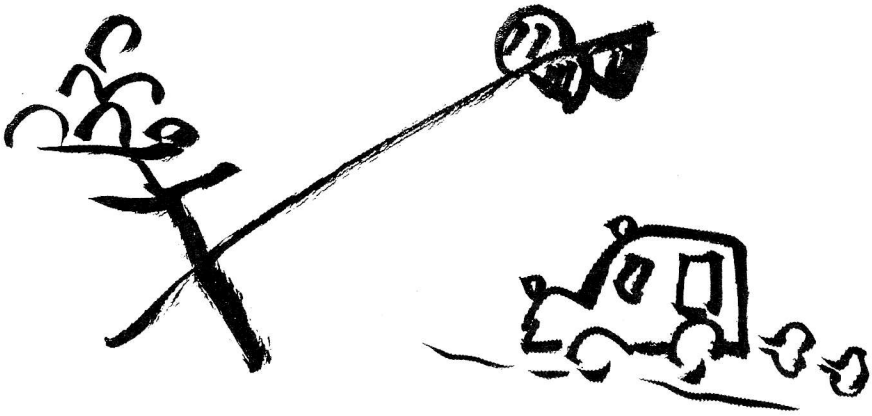
『方言子どもん世界』

毎月小学校じ　読み聞かせゃ読み語りに　使っている野津原ん民話、伝承、実話、逸話、なんかを　小学生向けに　構成したもんで　童話に似通う点もある。が　故郷ん歴史なんかをふくんだ　面白い話しを通じて　故郷んよさを知るのもいいのでは。

歴史も民話も　伝わらないままに　折角のよい話が　消えるのは勿体ないとも　思います。若いお母さんたちが　絵本や紙芝居で　読み聞かせする　それら比べると　読み語りは絵がないけれど　考えながら聞く　頭の中に描く　心で想像するなど　変わった故郷物語です。

№１３号には　５編が入っています。心の通い合う話になればと　願っています。お役に立つとよいのですが……。

『竜の恩かえし』は　語り継がれた　民話ですが本当にあったかも　又夢の中の話かも知れませんが　信じて叶った時それは『本当にあった』ことよりも　さらに嬉しく　尊いと思います。世の中には　考えられないような　事がおこるものですが　それも又夢があって　よいのでは。



子供ん世界…『人ん心は通じあうもん』

山の尾根伝いに武将を立てた　列が近づいてくる。松の根かたの地蔵の側で無邪気に　遊ぶ子供たちが驚いてかけだした。今まで見たこともない出で立ち　顔や身の怖さを感じたのか　人里離れたここではめったに　ない事であった。『大丈夫だよ　心配しなくていい』　きっとそう言ったであろう　供の者の呼びかけにアドケナイ　子供たちは走る足を止める。

そう言われると合点の行くような　態度にシャガミコンデ　怖さと不安の交差する目でじっと　見上げた。山並みを照らしていた陽はいつか　頭の上まで昇って白い　ちぎれ雲が２つ３つ。ひげ面にこぼれる白い歯　子供の前に立ち止まったその人は座ると　頭を撫でて腰から取り出した　木の実を渡すと自分も食べて見せる。『さあ食べるがいい』　優しい眼差しに安堵したように　子供たちも口に入れると　やっと笑った。

それが嬉しかったのか武将もニッコリ。里人が駆けつけてこの有様を見ると　言葉をだすのも忘れていたが　『どちらえ』と問いかける。『東に帰る途中だが　素晴らしい所なので暫し休みたい』　受け答えに安心したように里人も　小屋に案内して丁重に扱った。

４５０年頃熊襲征伐の帰りに　立ち寄った御座岳の里　周りの木木の合間に流れる　谷の美しい清水　高い頂きから眺め見渡した地形は本当に　よい場所でもあった。戦いの疲れを癒すには格好の場所　里人の人情も深く暫しの安らぎを味合うには素晴らしい所であった。九州は一つの国であったろう大陸から離れた説も。野津原の地も陥没に

より現在の地が残り　愛宕山が南面の岩で高さを保ったとか。大和武尊は東北の蝦夷征伐にも向かい　武内宿弥と共にその名声を響かせ　さらに神功皇后に従って新羅征伐にも　出向いたと言う。その折に利用した『二面のカブト』は　『大カブト』と　言って武門鎮護の為に英彦山にある真形の写しが　のち入蔵の橋本家にある事から　御座岳滞在の縁も頷ける。煙りたなびく静かな山里に　つい今しがたまで平定の戦をしていた　人とは思えぬ安らかさでこの里の　安らかさを念じていた。

出発の日が来た　惜しまれて発つ人たち　しばし共に暮らした里人の名残りにと　山の頂きに剣を納める祠を作って　思い出の地に涙かくして白衣に忍ばせ　柔らかな子供たちの手を握りしめて　東の国えと旅たって行く朝まだき。行きずりの人との情がふれあう時　そこには心と心の結び付きがあり　別離の悲しみは宿命として　お互いの健やかな事を　念じあった。※　この祠はのち宇曾社に移された。

可愛い子供たちも全く予期もしなかった　武将の姿にであったが人の心は通い合うもの。あの天人が退屈して地上に下りて来たが　かっての違う場所での可愛いい娘との出会いで　見知らぬ踊りを見せてもらったが　帰りの時になごり惜しい娘が　天人をどこまでも追いかけて見送る。

その為につまずいて足の怪我に　心配でたまらないけれど　どうにもならぬ別世界の悲しさ。何とか人間世界でとお願いしたが　叶わぬ宿命に自分の生き方を真面目に　生きる事でお互いがこの世にある。そんな事を知る事で人に迷惑かけない　それが心豊かな生き方でもあるのです。

『宇曾ん大根漬け』

修験者が峰を渡る足音と　木木をゆらす風の音は　聞き慣れた人にはよいが　慣れない人には異常に耳に入るだろう。一夜の仮寝を求めてワラジを脱いだ　旅人が夜半に目を覚ますと奥の土間で親娘が　『夜なべ仕事』を続けている。山仕事の縄をナウ手は荒れ　シワが並び冷たい夜風が隙間を　すり抜けて大根の冷たさは　一層厳しいけれど母も娘も　頬赤めて励む姿は　旅人には慈母のように受け取れる。

一膳のカユと手塩皿に盛られた　大根漬けのその色と香りそして　味がこの人たちの情を素直に　伝えてくれた。この旅人には生涯忘れる事のできない　思いだったのだろう。旅立ちの朝に包んでくれた　アワのおにぎり飯に　大根漬けの取り合わせ。丁寧に頭を下げると『気をつけて行ってください』　可愛いい口もとから弾む声で　差し出してくれた弁当包み。『おん身大切に』と　受け取ると　『うっとうたちは大丈夫　ご機嫌よう』　……見上げた宇曾の峰に　もう修験者の白衣姿が木の間がくれに　眺められる。

旅人は感謝しつつ去った　今も残る『アワガラ』を　入れて漬ける大根漬けの風習は　その昔から宇曾の里の味として　生まれ育ったもの。旅人が『トキ』を開いた時　あの母親や娘を忍びながらきっと　宇曾のひとときを思いだすのだろう。優しい人の心にふれた思い出の　一時でもあった。

天狗のようにピラリ飛ぶ松のこずえ　岩陰から咄嗟に現れる姿に　穏やかな故郷があるのも　平和があるからか。人の心の豊かさがあるならば　悪人も病気もないのかも知れない。そこに人間の真心が結びあっているから。大根漬けをかむ音が静かな森をバックに　聞こえてくるような晴れた日。

『あなたに逢えて嬉しい日』

いつんまにか山に行くと決まっち　側まできち何か話してぇごたる小鳥。『あんた元気じゃつた』　まるで小鳥に話すように呼びかくると　聞こえたんか自分と思っちいるのか　『チッ』と一声鳴くと決まっち　少し前に飛んでゆくと枝に止まる。

山が繁って人の通るのん　大変じゃき寒い日　横かる風ぅよけて　通り道だけでんち少し切り開いた時んこと。休むのにどこにしょうかち　思案しちょりゃ突然木影かる小鳥が目の前をブッツカルごつに　飛んで行き木に衝突して　慌てて羽音たてながら飛びさったんです。

『大丈夫かな』しばらく飛びさった　方向をじっと見ちったが姿は見えない。でも少し心配になったかる。飛び去った方向に歩いて行くと足もとから　急にキジが飛び立ちました。『もしかして　あのキジに食べられたんじゃ』そげな不安がよぎりました。

その日は暗ぅなりそうになったき　次の日に又その場所に行って見ました。仕事が手につかんごたるき。足もとを歩きやすいように切りながら　少し進んだ時じゃつた上の枝に止まっちょる小鳥が『チュン　チュン』　まるで何か話しかけているようです。

見上げてタマガッタ事　あの小鳥じゃつたんで。『あらあんた怪我したんじゃ　なかったんな。よかった心配したんよ』　まるで責めるような強い語調で　そう言うと『あらご免　ご免　でもよかったな　安心した』　まるで自分の子供が元気だった　その喜びを味わうような気持になりました。

それかりち言うもんな　もう毎日が楽しゅうじ　今日も『来るかな　それとん来ないんかな』　一人合点したりちょつぴり寂しかったりした山仕事。『今日は来んな』もう諦めちょつたそん時じゃつた。『チィ　チィ』遠くかる小鳥ん鳴き声がしだした。

何か心が弾みでーち持っちょつた　鎌を手元に置くと目じ迎えちゃろうと　空を見上げたそん時じゃつた。すぐ上ん枝に止まっち　何か言うんかち待っちょる。『ありゃ来たんな　お早ぅ』『チュ』『解ったんじゃなぁ』『チュ』しばらく見上げちょると　涙がじーんと流れでーた。

小鳥に気つかれないごつ　涙を拭くと『ここまでおいで』『チュ』　もう本当ち　いいたい気持ちがなんか涙になっち　そん可愛いい姿が見えんごたる。ふっと気がつくと何と目の前に下りて来て　こっちを向いちょる。ここまで顔馴染みになったんかなぁ。嬉しくなりました。

仕事はそこのけです。それには　お構いなしに小鳥はさっと飛んで行きました。『あら　もう帰るの　じゃまたあしたな　バイバイ』　見送るとなごり惜しい　泡んごたる思いがさーと消えち行くごたる。がくっと来るごたるそげな侘しさが……あっけなく過ぎさっちしもうた。

夕暮れ時になっち　今日ん小鳥とん巡り合わせに　夢と楽しさも貰ったが　続いていると情愛もこもっち　明日ん出会いがなしかもう　かる待たれちょるんも不思議でんある。欲もねえ小鳥だけに　人間の気持ちもそうさせち　しまうんじゃろうか。『チュ　チュ』　ほかのとりの鳴き声はあってん　気にも苦にもならんのも　不思議な巡り合わせでんある。

『竜の恩返し』……小３用

日照り続きん田んぼにゃ　たくさんな水がいるんに　雨が降らんもんじゃき　１月もたっちエート水ぅ回しち　入れらるるけんど　時のめにイロイチしまう。やんがち枯れるかん知れんち思うと　百姓は心配が続きよった。折角ちっと入った水がどこに染みこんだんか　夜回りぃ行くと水はちっとん見当たらんごつ　消えちょる。

『おかしいのぅ』百姓んおじさん　次ん日にもそん田に水ぅ入れちじっと　日暮れまじ見守っちょつた。ところがです……なんと山から下りて来た　大きな竜がそん水を飲みよったんで。おじさんがおるのに気が　つかんのか真剣じ飲みよる。

声も出らんごつなっち急いで　家に帰ると長老に話しました。長老もはじめんうちは『そげな』ち　信用せんじゃったけんど　あんまり真剣に話すぬ聞くと　本当じゃろうち次の晩に二人じ田に出かけました。そん時です……やっぱあん竜が残りチヨビットん水を　飲みに来たんです。

そん姿をじっと見ていた長老は　畦の側まじくると腰をおろしち　静かに囁くごつ優しゅう竜に　話しかけたんです。『子供を育てているき真剣水がほしいんじゃろうな　田んぼは何とかするき　稲は荒らさんごつしよえ　水をしっかり飲んで子供を　育てなさい』と　言うとおじいさんに向かって　言いました。

『いっとき水を飲ませちあげましょう』　稲は水が切れても何とか出来るから　もし出来ない時には村の　皆んなに頼んで助けてもらいましょう。

長老ん話を聞いているうちに　おじさんも気持ちが解ったのです。目を泣き腫らすような長老　それに答えち稲より今は竜の　子思う親の気持ちを大事にしよう。と心にきめたんじゃろう。長老も自分の事のように嬉しく　二人はしっかり手を握りしめちょつた。

そんうち竜も下りち来んごつなった　おじさんも時折ん水をチットヅツ　あっちこっち回しち何とか稲も枯れんじ　田はチョイト見た目にゃ　水不足は解らんじゃつた。がこんまま天気が続きゃとてん　持ちこたえ切れんじゃろうち　半分は諦めもしちょつた。あん竜んこつぅ思や『まぁいいか』ち　おじさんも男らしい所ぅ　見せちょつた。

５日ほずした頃に長老が　おじさんの家にヒヨカット来たんです。『今日雨が降らんごたら今年ん　稲はもう諦めちくんなぁ　そん代わり村んしたちに頼んじ　食ぶる米は何とかするき　こん通りじゃき』　ち話しましたら　おじさんも『手をあげちょくれ　あん約束は私も承知じした事じ　半分な私の責任です。心配せんじょくれ　こんぶんなら米も食うだけぁ何とか　取れそうじゃき』　明るく笑って見せるそんおじさんの顔にも　長老とおなじ竜を助けた　そげな誇りがチョコットあつたようじゃつた。

『いいじゃねぇな　干ばつじ燃やせるぐれん年も昔しゃあったち聞いたが今年しゃまぁ　いいうちち思うわな』　顔の笑みがとても爽やかじ　二人ん心も晴れ晴れしちょつた。

と　そん時じゃつた　西ん山が暗がっち突然稲光り。待っちょつた大粒ん雨が降りでーたじゃねぇな。二人は小躍りしち目にゃ涙浮かべち　『うんうん』頷いちょる。まるで男と男ん情愛ん勝負した　そん挙句ん勝ち名乗りんような　喜びが。

二人ん喜ぶ姿は雨に濡れ風に　裾まで吹きさらしよったがそん　長老ん耳元じ何か聞こえるごたる。『ありゃ俺や耳が悪ぅなったんかの』　いやたしかに何か囁く声　じっと耳を澄まし目を閉じました。やっぱ耳元じ何か聞こゆる。そうじゃあん竜ん声んごたる。

『あの時のほんのお礼です』　当たりを見回したが誰もおらんじ雨だけが降りよる。まさに恵みん雨でんある。やっぱあん竜が話しちょる声　あん時のお礼を言いよるんじゃろぅ。そしちお礼に雨を降らせてくれたんか　『昔かる竜は雨を降らする』ち聞くき。

それから早速田のクロに祠を建てて　竜に感謝する竜神を祭り『有り難うございました』と　お礼を述べました。竜もきっと無事に子供が生まれたんじゃろう。まるで目の前にそん姿が見ゆるごたる　長老と　おじさんの嬉しい雨じゃつた。枯れそうじゃつた稲も不思議と　元気取り戻しちイツモヨリ　ガイト取りたち言う。

夢に出る竜神は不思議と目を覚ますと　さっと消えるけんど『水がほしい』ち　思うと決まっち雨が降るち言う。お陰じ米もゆう出来ち健康じ　働く事じ経済もゆうなった。長生きする笑顔かる近所んしたちも　あやかりてぇち働くごつなっち　皆んなが楽しい日々の暮らしになったそうな。

細くとも長くと言う故事に　習った『うどん』を供えるそげな風習も出来ち祭りん　接待にゃうどんが出るとか。豊作、健康、金運、延命、長寿、など受くるような暮らしに。それもあん優しい気持ちが　竜ん心までん動かした　ご褒美でんあろう。助け合う事の大切さはいつん世にも　役立つ心ん宝物なんじゃろう。心ん宝物は金じゃ買えんが。

美代ちゃんの花束

学校から帰った美代ちゃんは　近所に遊びに出かけました。１年になったばかりですから　大きい子供たちはまだ　帰っていないのでどこに行くともなしでした。角の家の座敷の戸が開いていて　中から『おばあさん』が　こっちをみていました。日ごろは元気よく畑仕事しているのにと　近寄って『おばあさん　病気なの』と　声をかけました。

『あら　美代ちゃん　もう学校すんだの』『うん　今帰ったの』きちんとそう言うと　縁側まで行きました。『お帰り　今日は勉強は　なに習ったの』『今日は　お歌と絵本の　お勉強よ』『そう』　おばあさんはいかにも嬉しそうに　そう言うと何か話したいよう。『お花がいっぱい咲いているねぇ』『咲いてるよ　おばあさんずっと病気なの』『うーん　だいぶになるんよ　でも今日は気分がいいの　それに美代ちゃんに逢ったからかな』

そう言うとニッコリ笑いました。きっと毎日寂しい想いで　いるのでしょう。『お花を取ってきてあげるね』　『そう　ありがとういいの』『うん　いいよ』　急いで走って畑の側まで行くと　畦に咲いてる蓮華の花を　可愛いい手で上手に摘みました。蜜蜂が蜜を集めにいっぱい飛んでいました。

ピンクと白が混じった美しい蓮華の花　大事に摘み取ると束ねて走って　おばあさんの寝ている縁側に　持ってきました。『はい美しい蓮華の花があったよ』『あらーいいの　私にくれるの　本当にありがとう』　おばあさんはうれし泣きに　涙を拭いていました。何日も寝ているときっと　外の事が見たい知りたい　それを花を摘んで来てくれた　美代ちゃんの優しい心くばりが　たまらなく嬉しかったのです。久しぶりに天気もよくて　風も爽やかなのですが　それにも増して美代ちゃんの　優しさは心に染みるようです。

美代ちゃんの　おばあさんは少し前に亡くなっているので美代ちゃんにしてみると　きっと自分の　おばあちゃんを描いて　心の中に影絵として　抱いているのかも知れません。病気で長い間寝ていると心も　弱くなるものです。ましてや昼間は一人ぼっちなら尚更でしょう。

『ねぇ　おばあさん　私　おばあさんの子供になって　あげようか』『あら　あら　そんな事言うと叱られるよ』『いいんよ　うちも　おばぁちゃんはもう　いないし』　その言葉がどれほど嬉しかったか。蓮華の花といい　優しい美代ちゃんの心くばりは　このおばあさんの　心の中に喜びの宝を　抱くような嬉しさになりました。『ありがとうね　嬉しいよ』

無邪気な少女の言葉は　通りいっぺんの　はしかのようにあっても年寄りには　何よりの妙薬のような役割も　果たしてくれるものです。『その代わり早く元気になってよ』　『はいはい　早く元気にならないと　美代ちゃんに嫌われるね』　顔見合わせた二人は　思わず笑い出しました。

何日が過ぎた夕暮れでした。『美代ちゃん学校から帰った』角のおばあさんでした。お母さんが飛び出して　『あの子また何か悪いことしたのでは』『いえいえ　この前　こんな事があって　とあの日の蓮華の花束の話がでました。『まぁあの子がそんな事を』『あの時のお礼に　これ…を』

差し出した小さな包みと可愛いい　バラの花束を『帰ったらあげてな』と渡しました。『そんな事言っていたけど　まあまあすみません』　おかあさんも　嬉しかったのでしょう娘のそんな優しさを。よく育ってくれたと。おばあさんの元気な姿を見送りながら　帰ってくるのが特別待ち遠しい　お母さん。

●●● 方言説明 ●●●

６Ｐ　シャガミコンデ…座るようにかがみこんで。

７Ｐ　今しがた…ついさきほどまで。天人…天の上に住む人。

８Ｐ　ワラジ…昔の履物　藁で作った草履。ワラジを脱いた…宿をしてもらった。手塩皿…ちいさな小皿。うっとぅたちは…私たちは。アワガラ…粟の取り殻。トキ…昼の弁当。ビラリ…身軽に飛ぶ。

９Ｐ　ごたる…ようです。あんた…あなた。通い道だけでんち通る所だけでも。つかんごたる…気持ちが落ち着かず。タマガッタ…吃驚した。じゃつたんで…でしたのよ。

１０Ｐ　それかりち…それからはと。データ…出した。そこのけじ…気にせずに。なしか…なでか。かる…今から。巡り合わでん…出会った縁か。

１１Ｐ　田んぼにゃ…田んぼには。いるんに…入れるのに。たっち…過ぎて。時のめに…すぐには。イロイチ…干あがって。やんがち…間もなくして。おるのに…いるのに。そげな…そんな。やっぱあん…やはりあの。チョビット…ほんのすこし。じゃろうに…そうと思うが。するき…するので。ごつしよえ…ようにしなさいよ。

１２Ｐ　チットヅツ…少しづづ。チョイト見た目にゃ…急に見た時には。とてん…とても。ヒョカット…急に。くんなあ…ください。手をあげちょくれ…手を加勢して。こん分なら…この分ですと。いいじゃねぇな…よいのじゃないですか。燃やせるぐれぇ…すぐ燃えそうなまでに。

読み聞かせ　読み語りなんかに使う中かる　選んだもんですが民話、歴史ん伝承、近代逸話なんかも　いれちゃります。心のふれあい　命や物の大切さなんか　人間が一番大切にせにゃならんのじゃ　ないじゃろうか。ちしみじみ思います。

『女性の底力』　こげな言葉を聞くと『しかとしもねぇ』ち　五助さんが怒りよったが　いつか聞いた話にゃ　火事が近所じあった　男したちゃ一人もおらん。あんまり達者じねえ若嫁ごが　ここが一番慌てちゃ悪いち　向こう鉢巻きゅ絞めち座敷に入ると　まず『位牌』を風呂敷に包んだ。

慌てち飛んじ帰った　ぢいさんがオロオロしよる。義父さん『あぶねぇき　もう外に出らにゃ』　押しやるごつ外に出しこんだ『塩』をカマゲごと　ヒッカカエち運び出ぇた。

いやんばいに　早ぅ消防も来たき　鎮火したもんじゃき　嫁も気合いが抜けち　そきーへニャへニャ座りくうだ。

晩にみんなが帰っち来ち　『こうこうじゃつたんど』　じいさんの話に無事じゃつたけんど゛若嫁ん働き方は　家内んしかるそりゃもう　殊勲じゃつたらしい。婿じょうどま　涙流しち『日頃ぁチット　ヨロケちおもいよったが　としちもう底力があるのぅ』　『位牌を出した事、塩も出した』そん心意気は在所んしにも　いつんなかめーか　知らせち　見かけによらん女性ん底力に　お褒めしきり……

人は見かけにゃよらんもん　ここ一番にどんくれん度胸　博学　無駄んねぇ動きそこじ人間の価値観も　現れそうでんあるんと。そん時ん状況次第にもよるが。火事ぁオジイナァフント。泥棒はひとかるいじゃが火事は　根こそぎ　フカボッテンもぅどんこんならんき。

飲む人より配る人の健康

『お早ぅございまい』　今朝も弾む声じ玄関がガラット開くと　笑顔こぼるるごたる姿勢が　元気ぅ運んじくるるのん　巡り合わせん人生双六。気軽な応答に心じ感謝あってん　真意はどうかとん思わるるもん。じゃが本当ん健康たぁやっぱ自信がありゃこす。

『大変じゃなあ　じいちゃんサカシイナ』　古い友人じゃき　ついいらぬ話しに巻き込みかねん。『はい　お蔭さまじ今日もどっか行くとか』　控えめに話すそん裏側には　元気じ家ん仕事しちくれちょる　何よりん証言でんある。『若い時かるゆう働きよったきなぁ』『そうですか』思わんクス笑いは　知っていてん知らんふりする　中々心にきー返答でんある。

いつか聞いた事があるが　『褒むる訳じゃねぇがケックャ評判がいいんで』　手放しじ喜ぶ顔を思い切り　叩きたかったごつ他人事たぁ思えん　人ん優しい側面が垣間見らるる思い。家庭たぁこげーありてーもんじゃが　どうかすりゃ逢うとすぐ家内んしん　悪口三昧に聞くのんハガイイ思いになっちしまぅ。

『おじさんも元気じ何より』『おおきに』　上手にもそげ言わるりゃ今日は朝かる　縁起がゆうなっちきた。子供連れち来た日　げた箱ん上ん人形に目が移り　欲しそうな眼差しじゃつたき　『よかったらあげようか』『いいんですよ』『お母さんは言うてんなえ』　品のいいのを３つ手に　握らせると輝くような瞳じ　『おおきに』　なんと躾をしてある家庭が　映しだされたような。＝＝あの子供さんも　もう大学生になったち　こん前聞いたもんじゃ。

いつじゃつたか配達に寄った時　若い娘さんが風邪をこじらせち　奥かる咳が聞こゆる。顔なじみじゃあき声ぅかくると　縁側ん障子が　あいち『ありがとう』ち　あん弾む声ん時たぁ裏腹に泣きたいような。『大丈夫なの』『はい』声がもの悲しい心情ぉ　表している。

『早く元気なっちテニスせにゃなぁ』『おおきに』　方言が部屋を伝わっち玄関先まじ来た。顔こそ見れんけんど側まじ来たい　そん気持ちが痛ぇほず解る。病気しち健康んありがたさも解るたとえ　今ん自分が　どげえ辛い事があってん『健康なりゃこすそれも出来る』　病気の人をおいて行くのも辛いが　これも宿命ん世の巡り合わせ。

野菜をいっぱいいただいた　家でも作っているので本当は遠慮を　でも折角の親切を無にしては　相手の気持ちに傷ぅ付くる事にもなる。『折角作ったのにいいの』『いっぱいできたき食べて　余りゃ誰にでもあげて　野菜も喜ぶがえ』それを聞くとほっとする。『いただきます』

野菜のねぇ家じゃちある　そこにゃ思いがけん貴重品に。『いっぱいもらったに　食べてくれない』　心が通い合うツツロク人生。野菜が喜くじ右から左に　移ることもあるのが人生ん縮図。人ん心ん行き渡りん　優しい情愛でんあろう。配る事が大きな絆を作り　そん絆に結び合う人たちん　巡りあいが人ん豊かな心ぅ　さらに広げち今日も　笑顔が波ごつ広がっちいく。

『お早うございます　早うないかな』　大声で笑うあどけない気持ち　初めて出会えば『お早う』でも　通用する人間の挨拶は回りの人たちを　楽しく嬉しくもしてくれるもん。今日も飲む人より元気な　こんしが笑顔と一緒に配っちくるる　幸せ。

『ばあさんにゃ　かなわん』

朝ん早ぇ病院の待合室じ話が　はずぅじょる。『どげー言うてん　ばあさんがおるき　こげ早ぅかる来らるる』『ふんとのや』『ばあさんが　郵便局き行くち言や　早ぅかる起けち食うごつしち　片ずけち洗たくもんぬ干しち　ちっと白粉ぃどまつけちかる　もうふんと』

『若ぇときゃ　ドギリマエーチ使いよったが　えぇと解ったんか』『そりゃまぁのや　若ぇ時ぁ　そげまじ苦にもならんじゃつたが　今どま　ばあさん様様じゃわい』『悟りか開けたもんじゃのぅ』『そうど　お大師様んおかげじゃ』　そう言ゃ昨年な四国参りもしたち　みやげぅ貰うたけんど　そん時ぁそげまじ　言うよらんじゃつたにの』

こんじいさん　根は悪ぅわねえけんど　口汚のうじ聞いちょるともう　ナサケノウナルごつ　言葉使いが悪い。それでんばあさんが　風邪じ寝くうじ4，5日起けたたんじゃつた。もんじゃき　日頃ぁタヘラク言うてん　やっぱコタエタんじゃろう　シュントなっちょつた。

とにかく何んか見つくろうち　食いよったんじゃが　『何か食えるるか』『いんげ　よかろう』　そりゃ遠慮でんねぇけんど　何もしきらんんが解っちょるき　さするなぁムゲネェかるでんあろう。女性ん底力にゃ自分は食わんでん　何日でん持ちこたえらるるが　男となりゃトット参る。

生まれた時かる子孫ぬ残す　そげな宿命も背負っちょるんじゃろうが　持久力は抜群でんあるき　ちっとやそっとじゃへコタレモセン。喧嘩しち意地ぅ張っち　食う世話がストップした夫婦が　先に口に何か入るるんは　やっぱ男ち言う。

『近ごらぁ元気がいいんかの』『まぁそこそこじゃの　今日も畑ん草ぅどうでん　取っちしまぅち言うき　無理すんなやお前が寝つくと困るど』　『なんやそげんこつ言うたんか』『いんにゃ　言う訳にゃいかんき　言いて一ぬぐっとこらえち』『なんか　そこじお前がん優しい所ぅ　見すりゃよかったに』『ちゃありゃ　おかしいがや』『おかしい年か』

男たぁまぁこげんことかん知れん。照れ臭ぇんもあろうがそこぁ夫婦じゃき　思うたこたぁちゃんと言ゃ　『おおきにだんだんち　元気なるんじゃがのぅ』『ほんなこんだ言うち見るわい』『こんだや　お前んこんだはいつか　解らんど』　待合室が賑やかムードになっちょる。

年ぅ重ぬるとだんだん相手ぅ　いたわる気持ちも大きゅなるもん。こん世じめくり合うた夫婦　楽しい時ぁホゲモ喧嘩もいいけんど　病気ん時にゃ苦しい時にゃ　助け合う支えあうんが夫婦。目は口ほず物ぅ言うちゅうが　心が通いあやぁ心ん休まりも育つもん。

小銭ぅ数えよるき何か買うんかち聞くと　『ばあさん雀ん玉子が好きじゃき』『や買うち帰るんか』『悪いかや』『いんぎゃ　それこす何よりんみやげど』　入れ歯した　ばあさんが噛むぬ想像しち側じ見つむる　じいさんがん顔が浮かぶ。『大事しちゃれや』『おおきに　ふんな先ぃイヌルド』。

後ろ姿ぅ見送っちあん　ばあさんの男勝りん働き手でん　年にゃ勝てんけんど底力は　たいしたもんじゃちしみじみ思うた。あれじいい夫婦でんあろう　一人りゃ口やかましいけんど　心ぁ優しゅうじホラケェ。ばあさんな上品な所ぁあるが芯な　どうしてどうしてツワモンでんある。まさに女性ん底力じゃろう。

◎◎◎　方言説明　◎◎◎

１８Ｐ　ごたる…そのようです。人生双六…人間の絆巡りあいで過ごす関わり。じゃが…ですが。サカシイナ…元気ですか。ゆう…よく。心にきー…羨ましいほど嬉しい。ケックシャ…結構。叩きたがったごつ…叩きたいくらいに。こげー…こんなに。ハガイイ…悔しい。おおきに…ありがとう。

１９Ｐ　いつじやったか…いつでしたか。あいち…飽く。けんど…けれども。どげぇ…どんなに。食べて…食べたくても。こんし…この人も。

２０Ｐ　どげー…どんなに。ふんと…ほんとに。どま…なども。ドギリマワス…荒く叱りつける。そげまじ…そんなにまで。そうど…そうですよ。起けたたんじゃつた…起きれなかった。もんじゃき…ものですから。タヘラク…自慢。やっぱ…やはり。コタエタ…身に染みた。食えるるか…食べれますか。さすんな…させなさんな。ムゲネェ…かわいそう。トット…まったく。ヘコタレモ…どうにもならぬ者も。

２１Ｐ　どうでん…どんなにでも。そげん…そのような。いんにゃ…いいえ。おおきにだんだん…本当にありがとう。こんだや…このつぎには。ホゲモ…無茶苦茶でも。雀ん玉子…雀の卵のようなピーナツ入り菓子。イヌルド…帰るよ。ホラケー…淡白で役立たず。ツワモン…中々どうして切れ者。

『玉手箱』には　どんな宝物が入っているのでしょう。野津原には古い歴史と　新しい文化が競合して　ふさわしい生活母体が形成されています。

そんな風情の中に　仄かに香る花一輪はまさに『玉手箱』のようです。知らないままに忘れ去られる……そっとしたほうがよかったかも知れない。でも輝くようなその話は　皆さんにも知ってほしかった　のです。

七瀬の友⇨冊子ですが…
青たたみ品評会に……
よろず漫才……
能登かぐら
涅槃図
地蔵菩薩
野仏
口説き唄、里唄……

今回は以上８編を　特集しました。皆様のもしかしたらご存じであったかも。初めての巡り合わせなら　これからも思い出の『玉手箱』として　語りついで下さいませ。

心の文化は物や金では買えない　まさに宝物なのです。このほかにもまだ　沢山埋もれていると思います。ご存じの話題など　お知らせいただければ　何よりの幸せです。

２号じ中止ん『七瀬の友』

西洋紙に活字じ印刷されちょつた　『七瀬の友』　そん本が出来たんが　明治４０年《１９０７》　４月に発行されたんも２号じ中止になった。おしなぎーなんちゃねぇ　そん１号にゃ当時ん諏訪村と　野津原村が合併しち　大分郡じ１番広い村になっち　人口も６０００人ち　記録されちょる。

農会長は佐藤軍八、助役にゃ小野応倉、ん名前があっち『七瀬橋』ち題した詩も載っちょつた。そんほか通信、医学青年会、ん余興なんかもあっち　当時ん社会ん一面やら　人情も見られちょるんが解る。続刊されちょつたら　ケックシャ面白い民衆雑誌になったんじゃ　あるめーか。

『七瀬ん橋』も　おそらく木製ん橋じゃつたんか　やんがちしち諏訪村ん東玄関じゃつた　竹の内ん法泉寺橋が　石積みじ大正になっち完成しちょるき　まものう頑丈な橋に変わるこちなるじゃろう。江戸時代にゃ水が多い時にゃ徒渡《カチワタり》ち言う。裾をまくりあげちジャブジャブ　水ん中を渡りよったんじゃが。

話が横たくりへねちご免な。活字んついでに野津原村ん頃ん　広報紙ん話にへモドロウ　画期的な企画でんある。

『野津原村報』

野津原村唯一の広報用ん村報ち言うてん　西洋紙Ｂ４の一枚表裏版。昭和２７年５月１日《１９５２》初版発行ん　紙面ぬチョイト眺めち見た。２７年度当初予算１０７４万円。改正森林法ん説明、講和条約祈念植林６万本。供出完納に対する安部忠治村長のお礼、戦没者の合同慰霊碑が　原村と野津原に出来る。本福宗にトラック道路完成、５月の農業なんかも。

古跡を訪ねて⇨塚野御所。２８年１月１日よりサイレン時報知らせ《甲斐肇寄贈》などあり　当代村長⇨安部忠治、議長⇨末松禅勇。県議には一の瀬隆富などの名前。そん村報も昭和３４年２月かる　町政施行により『町報』にさらに『町政だより』『広報のつはる』『広報ななせ』などに衣替え。

この間女性も含めち担当も　１０人あまりが博学英知を湧かしち　時事行政をタフに盛り込み　時にゃミス野津原、連続ひとこま記事、季節ん花暦、なんかもあったり　予算の関係じ隔月発行やら　減頁、色刷り、なんか涙ぐましい　頑張りん中じ約５２年間　誰一ん広報紙としち　平成１６年１２月号をもっち　めでたくＥＮＤ。

そん村報ん１年前かる　発行しよった『野津原公民館報』も　当時ん東部小学校ん講堂ん片隅じ　第１号をガリ判刷りん発行。Ｂ４の１ページ判を原稿が集まれば出す　そんな苦難の中かる７月１５日発行ん１２号　会報ん性格やら投稿規定、６月ん主要行事案内、郡社教委員会総会、農業委員選挙、住民文芸なんかもあった。

『青タタミ表品評会入賞』

昭和３年《１９２８》に　大分県のタタミ表品評会が大分じあった。そん頃ぁ野津原でん　おおごつ七島い草ん植え付けがあっち　夏ん収入源ん大けな役割りゅう　しよった。じゃが暑い盛りん取り入れにゃ　そりゃもうおおごとでんあったが　苦労多いぬ耐え忍ぶんも　こりゃ農家ん宿命でんあったもんじゃ。そん苦労ゆう見ちょるき　何とか野津原ん青タタミん評判ぬ　あげちゃりたかったんと。縄ない工場を持っちょつた　斎藤盛人は品評会に出すごつ

取り組んだ。工場にある織機を利用した仕上がりは　そん年ん天気もよかったんか　手入れがゆうじ見事４位入賞。野津原タタミ表が脚光ぅあぶるこちなった。早起きしち刈っち帰るなり針金引っ張った台じ　ビューンビューンち　独特ん音ぅ響かせち割く。三角軸が半分にうまいごつ割る　技術もいったが熟練すりゃ　『目をつぴーちょつてん出来る』ち　タヘラク言うくれ旨いもんじゃつた　百姓んしたち。けんど『貧乏草』とんいい　暑さ天気とん戦いでんあった。

縄ない工場に鮮やかんタタミ表が　目にまばいいごつ光ったんも　斎藤ん気持ちが『あげー苦労しよんにムゲネーなぁ』ち　思う心がここまじさせたんかん知れん。タタミ表になっち問屋かる　タタミ屋にそれが盆前どま　畳替えするしが多いのん　暑さん中じ青い畳ん香り　肌さわりどん一つ取ってん夏ん風物詩。

そん頃になるとゆうゴザ買いがくる。百姓しん家じ織りあげたぬ　問屋に出す前に買い取りにくる。通り傍ん座敷じ『いっとき寝ござ打ちするか』　聞こゆるでんねぇ声じこん家ん　隠居がごろり横になつた。聞き耳立てち聞いた仲買ん若いしが　すぐさまそん家ん門口たった。『あんゴザ分けちくれんな』『……』　たまがった隠居キヨトンとしち　外ぅ見たらゴザ買いがたっちょる。

『ゴザあるんならチット分けちくれめーか』　隠居はさっき自分が言うた『寝ゴザ打ち』んこつ　思いでーち大笑いになった。『あんな実はこれこれで』　そりゅう聞いた若いしも苦笑い。でん近所じ織りよる家まじ　つれのうちくれそこじ話もまとまった。とんだ寝ゴザ違いじゃつたが　若いしも知恵がちーたち　喜びよったごたる。

『寝ゴザうち』…ゆっくり寝てくつろぐ意味。夏の昼寝ち言うと花ゴザを敷いち　一眠りする事ぅ風情ゆう　こんように話しち楽しむ。その使い慣れた言葉と　ゴザ買いの人ん仕事熱心さが引き付けた　場面展開じ若い人ん日ごろん　精進の賜物が仕事に結びちーた　とん言えれる。

『よろず漫才』

和田章彦が好きじ『よろず漫才』を　舞い演じち６０年あまりなったが　舞いながらに合わせち　語る言葉や囃子んリズムはもう　あととりが少のうなっち来た。若い頃に近所ん年寄りに教わったんがはじまり　それかるち言うもんな　祭り、棟上げ、なんかん祝い事にゃ決まっち　声がかかり嬉しゅなっち　仕事たそっちのけじ　出ち行ったもんじゃつた。

お囃子、合いの手、そんリズムに合わせち　語る言葉にや故郷ん物語やら　面白おかしな物語なんかも入り　祝いの舞いにゃ縁起のいい　内容が繰り出さるるもんじゃき人気がゆうじ忙しい時もあったごたる。新しい衣装ん中にゃ『こいのぼり』ぅ　ぐあいゆう裁っち動きに合わせた鯉が泳ぐ様はメデタイ場面にゃ　ゆう調和しちょうた。

語りにゃ方言も入っちょるき　方言集にも取り入れち前に発行したが　そん時や『読んだら物好きが習いてぇ』ち　来ちくるりゃいいが……そげな期待もあったんじゃが突然逝去ん名残り惜しい話。でん笑顔じ舞い仄かに心ぅ豊かにしちくれた　あん鯉のぼりん衣装は　もう見られんがそん話は残り伝わるもん。

◇　方言説明　◇

２４Ｐ　ちょつた…そのようてした。おしなぎーなんちゃねぇ…惜しくて勿体ないような。けっくしゃ…結構よく。なったんじゃ…なったのです。やんがち…やがての。しちよるき…していますから。こちーなるじゃろう…たぶんそんな事になるてしょう。まくりあげち…下か上に巻き上げて。もんじゃき…ものですから。横たくりへねち…横に曲がってしまって。ヘモドロウカチ…引き返して帰ろうかと。チョロット…ほんの少しの。

２５Ｐ　なんかも…なども。ガリ判刷り…謄写判印刷で。タタミ表…ゴザ、七島い草で作る畳の上張。おおごつ…大変。じゃが…ですが。そりゃあもう…それはそれは。おおごとでん…大変であっても。あげちゃりたかったんと…できるだけ上にあげたかった気持ち。

２６Ｐ　つびーちょつてん…つぶしていても、つむっていても。タヘラク…自慢して。したち…人たち、百姓の皆さんたち。しよんに…しているのに。ここまじさせた…ここまでさせたのも。多いのん…多いのも。ゆう…よく。いっとき寝ゴザうち…ひととき昼寝する、休憩する横になって。あん…あの。くれんな…ください。くれめーか…くださいませんか。つれのぅちくれ…案内に連れて行ってくれ。ちーた…着いた。

２７Ｐ　とん…とも。それかるち…それからは、そっちのけじ…すべてほたらかしで。もんじゃき…ものですから。ごたる…そのようです。そげな…そんな。

『能登神楽』

野津原に京都かる神官、神楽師と共に寛永２年《１６２５》に　入って来た能登神楽は京の　雅優雅さを保った舞い　大神なんか８つの舞いを奉納しよった。大神にゃ神楽歌があっち口うつしん伝承されよったが　若いしん不足やら世話するしん関係じ　絶えてしもぅた。

神楽ん一部は数年前に復活しち　若い人たちが舞いよるが九州あたりん勇壮さたぁ異なるもんじ　最近になっち４人舞いが舞われた。大和かる入っち４００年あまり　そんリズムに先人たちゃどげな思いじ　聞いちょつたじゃろうか。真髄には遠ぅ及ばんにしてん　舞う奉納する気持ちは高貴。それが内蔵しちょるとすれば　素晴らしい事と思わるる。

それじのうでん難しい神楽ん中でん　格別な仕種舞い振りん妙なる　動きと所作に目を着けて行くと　遥か遠い昔日の雅の文化も　感じられるような思いにもなる。時代が代わり人ん心に描く夢と　現実ん世界にゃやっぱぁ　動かせん流れもありそぅな　そげな気も拭い切れんごたる。

形は現在風になってん心は　大和ん雅ん情愛が込めらるりゃそこにゃ　野津原らしい京ん能登神楽としち　認められるんじゃあるめーか。肌は京都で着物は野津原　現在社会ん片隅じ目に写る　江戸文化が仄かに香る　夜更けん鎮守の森。『神楽囃子に更け行く夜は　濡れて見たいよ鈴ヶ滝』　馬子歌が聞こえちくるごたるわな。

こん神楽は入蔵ん祭りん時ぃ　舞わるるが優雅ん舞いにゃやっぱ　いい知れん高貴さが隠されち　ほっとさせらるるごたる　一時でんあるが見る機会も　少ないんがおしまるる。

『涅槃図』

寛延２年《１７４９》に書き移したち言う　涅槃図が毎年釈迦命日ん旧２月１５日に　地区ん人たちによっち祀られちょる。もともとは　かってん万寿寺出張所としち　栄え多くん檀信徒ん仏参もあった　ごたるんじゃが時世ん流れん中じ　二転三転しち遂に廃寺となった。

それじ庵に移される憂き目になったが　庵住ん暮らし向きに左右されちか　目ぼしい仏具もいつしか　だんだん姿消しち生活ん手段が　仏と裏腹な運命をたどっちしもぅた。あげくには住まいも拒まれち　とうとう無住ん庵になっちしもぅた。厳しい過去もあった。

朽ちた廃屋を見るに見兼ねた　地区ん人たちぁそこに　お堂を建てて釈迦無尼仏を　本尊として祖師の位牌も共に安置　安住の地として地区民が　加護守りを続けちょるが。そん時代ん遺物でんあった　涅槃図は世話役ん家じ保管しち　大事に保護されちょる。

それ以来地区ん人たちによっち　毎年１回の涅槃会となり　当番の準備じお供え　お参りん人たちん　持ち寄りお接待なんかもあり　当日は般若心経を唱えち　昔日ん繁栄を忍び現在を　回顧する日にもなった。遥か十万億土ん世界から　きっと喜びの声も聞かれそうにも。

施す事で報いと言う夢も　現実の世界にないにしてもいつか　幸せの寸味にでもなるとすれば　涅槃図の加護によるものと　幸せを満喫出来るのでは。雨露も凌げるお堂ん今の幸せは　巡り会わせた仏との絆の　印かもしれんち思うが。

『六地蔵、八地蔵、十王地蔵』

地区民を病気や不幸から　守る為ぃ辻やら村ん入り口にあっち　行き来する人たちが拝む。六地蔵たぁ　天界、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄、ん六道《奈落》があっち　人間の現世ん生き方が彼世じ　再現さるるち言わるる。そりゅう救ぅちくるるんが　地蔵菩薩《お地蔵様》じあるち言う。人と仏とん巡り合わせん絆じゃろう。

古くかる村ん辻やら主な道にゃ　てーげ建てられち病気が入っちくるんも　貧乏神が来るんも拒否した。六面に刻まれた仏像は地蔵尊　色彩されたもんやら　八面像にゃ上に六道と下に天上、地下も含むんもあっち　いずれにしてん現世ん人間ぬ　あらゆる災いかる守る　願い思いが込められち　建てられたものでんある。

この世ょ去ると彼世まじ　導いちくるるんが　地蔵菩薩じあるき現世じ　仏像を祀り行き来に手を合わせ　頭を垂れちご加護ぉ願うたんじゃろう。地区内にはこげな仏像が各所にあるが　そん中にゃ『功徳を多くん人に与えち　皆んなじ仏道を進むために』ち　書かれた総回向もある。

特に江戸期間のもんが多いが　形式やら形なんかも時ん社会風習　なんかが伺える趣ん形。場所によっちゃ風化もされた像もあり　時代ん流れやら周辺の人たちん　思いが一つん仏像を通じち　垣間見らるる思いもする。近代化の波にふと都合で移動した　庭園に衣替えしたなんか　昔日ん人ん心が人間の勝手に　動くこたぁ気の毒にも思う。

道知るべん役割も果たしたが　何も語らぬだけに一層心痛む思いもする像　せめて般若心経を唱えて合掌。

『南無地蔵大菩薩』

奥産道路かるちっと入った片草に　高明院の塔ち書かれた『地蔵大菩薩』が立っちょる。元文５年《１７４０》の作じ　野仏としち大衆ん悩みを救うた。そん手にゃしゃんと宝珠を持っちょらるる。熱心にお参りしちょつた女性が　灯台を供え８８ヶ巡りん人ん　御札を供えちょつた。

そん女性も若ぅして去ったが　御利益ぅ頂いちもしかすりゃ　余分に生きていたんかん知れん。仏像ん横面に書かれた文字に　仏を念じまとめあげた心ん　世に尽くす気持ちゃきっと大事と諭しちいるんかん知れん。多くん人ん救いを請う姿に　己れに雨露を受けながら　衆生を救うために苦難の道を辿った　地蔵菩薩にここじゃ特に　南無地蔵菩薩ち刻んじある。

『多く見る野仏』

災難から身を守りそん願い叶ぅち　祀らるる野仏にゃ自分だけじゃのうじ　多くん人たちにも祈ってほしい　そげな気持ちも隠されちょる。子供ん無事を念ずる　赤い前垂れにゃ幼い子供ん成長を　赤い頭巾にゃ頭のよい考えを　自分にでけんじゃつたもんぬ　念ずる人間の煩悩もある。

雨にさらされて立つ路傍　風が無性に吹きつける辻。その姿はわが身をとして衆生を守る　高貴な菩薩のありのままん姿。人は高貴な僧にたむくる衣の代わりに　赤い首たれなどで気持ちを表し　頭巾で感謝した赤裸々ん　思いを表した心の表現でんありそう。じっとそん行いを見つめながら　現世での心の施しの積重ねを　諭してくるる辻説法でんある。

△△　『口説き唄　里ん唄』

昔かるん若いしが時にふれ　踊ったりする口説き唄やら里唄　３０年ほず前に民謡研究家ん　加藤正人が大分県内を収拾した事があった。野津原にも１０日ほず足ぅ運び貴重な唄を収録したが　今となっちゃ惜しい時間でんある。録音機も幼稚じゃつたが　肩に食いこむぐれ重たかったぬ　ひょかっと回想しち『ひとはずみじゃつた』ち思う。

小野肇、赤星利夫、小野春子、吉野房子、佐藤トメ、そんほか現在も後継者ん　育成しよる人たちが参加。ゆうまぁひとはずみ収録したもん。

自転車節、田植え唄、籾すり唄、ヤトヤンソレサ、なかでんこん『ホーチョヌベヌベ、』は　作曲もする加藤が採譜して　編曲したあと指導する、踊りん復活、そしち小学生にまじ教えち　バック演奏曲まじ作りあげちしもうた。

『ホーチョヌベヌベ　今夜の夜食　早く延ばなきゃ　夜が明くる　ソレエヤソレエヤ　ヤトヤンソレサ』

小野肇、小野春子ん伝承に　佐藤トメん踊りん伝承が　唄にかぶつち　小学生んバックコーラスが　入ったこん唄はこんあと何回も　発表ん機会にも巡り会うた。加藤ん意欲湧かしたんがこん調査じ　四辻峠にたった時連想したんが　肥後街道ん馬子唄じゃつた。

『アオよ勇めよ宿場はそこじゃ　あれが街道の石だたみハ　七瀬のせせらぎサラサラサラサラ　ホイホイホイ』
民謡発掘調査ん記念にでけた　故郷新民謡『七瀬馬子唄』まさに　天の巡り会わせん宿命もう３０年も昔んこと。

◎◎◎　方言の説明　◎◎◎

２９Ｐ　しよった…していた。しもぅた…しまった。あたりん…周囲の。どげな…どうですか。ちょつたじゃろうか…聞いていたのだろうか。それじのうでん…それでなくても。やっぱ…やはり。あるめーか…そうじゃないでしょうか。

３０Ｐ　ごたるんじゃが…そう思うのですが。続けちょるが…続けていますが。

３１Ｐ　じゃるち…そのように聞いている。てーげ…たいがいに。社会風習…土地の習慣や伝承。道しるべ　辻や分岐した場所に簡単に解るように　書いた道路標識。

３２Ｐ　しゃんと…しっかりと。ちょらるる…にぎっている。まとめあげた心…悟りが開けた。のうじ…なくて。出来んしゃつたもんぬ…出来ないものを。首たれ…首に巻くマフラーの役目。

３３Ｐ　口説き…古くからある手拍子に合わせて唄う唄。ひょかっと…急に思い出して。ひとはずみじゃつた…一瞬のうちん出来事。ゆうまぁ…よくもまあ。なんでんこん…なんでもこれは。

古くから大切にせねばと　思いながらついつい時代の波に押し流される　そんな故郷の宝物を　そっと風に当て心を慰める時　先人の苦労が忍ばれるもの。だから故郷はいつも苦言も言わずに　後に続く人たちを見守ってくれているのでしょう。施しは報いとなって帰る　古き良き言葉であり必ずいつか　巡り帰るものなのです。

100
M

ちょいと一服たナンナ……五助さんがん決まった口上。憎めんしゃべり口が　今日もドッカジ話ん花を咲かせよるごたる。

山肌に何とも言えぬ　響くような馬子唄に聞き惚れち　仕事ん手を休めた娘。あれも年頃じゃき　なんか胸んときめきも　感じらるるんか　ぽっと顔赤らめちそれが又　テンシュムショ愛らしいき　不思議なもんじゃ……

頓知がいいき　憎めんしゃべり口五助さんの姿ぅ見ると　話が聞きてぇんか足が止まり　手がもうつかんごたる。ふり向いち何か言いたげな素振りに　もう２，３人が集まる。

ふんともう　仕事が出来んじ困るち　腹ぅ立つるしもオランゴタル。『ナニエ　ドゲシタエ』　ただそれだけん事ぅ言う　聞くだけじ何かほのぼのするき　不思議でんある。

朝顔洗うたんかえ　いんにゃゆうべ洗うたきもうヨカロウ。こげなふうじゃき　使いおーけあろうなえ。まぁ物も考えようじゃがのゃ。ヘヨ俺あ生まれた時　洗うちもろうたきそげー洗うと減るき　洗わんのじゃと　これも理屈が成り立つ。

しとしと雨が降るぬ『ナガセ』ち　言うたら大声じ笑うもんじゃき　五助さんもチッタむかちぃた。けんどゆう考えち見りゃソンハズ　所じ品変わるち言うくれ　じゃき言葉が違うな無理もねぇち思う。いちいち腹ぅたてよるんもんなら　横になる暇ものぅなる。

関東かる北やら東やらは『ニューバイ』ち言うが　富山へんどま『サズイ』ち　九州ん南部西部やら四国なんか『ナカシ』『ナガセ』ち　言うなぁやっぱ西ん方が　多いごたる。沖縄んしゃ『ナガメ』ち言うんと。晴ちょつたに急に降りでーた『ナガセじゃきのゃ』『ふんともう誰が決めたんかやぁ』『まぁそげー言わんと　茶どま飲みゃいいで』

そうこうしよったら止んじ　晴れ間が出たち思うたら虹がカケチョル。『ほらみなお利口じゃき　ご褒美ん虹アッパイじゃろう』『あぁこそばいい　もふんと』大声じ笑うもんじゃき　『さいでんの元気ゃどげなったんな』『やあれか　ありゃまぁアイん狂言じゃ』

『こん前ん七夕様にゃ大けな笹竹ぅカムゲチ帰りよったなぁ』『うん隣ん娘がシャツチ俺が切った竹がいいんと』『こりゃまた好かれたもんじゃなぁ』『男前はヤエコチャネェガノゥ』『ソリャマァソッチ置いちょいち』『なしや』『置かんと邪魔ぇなるがえ　それじ朝露取ったんかえ』『取ったど　お前に取られんごつ　鶏より先コソット起けチ　里芋ん葉をイサブッタラもう　ヘコまじ濡らしちのぅふんと』『ちゃありゃ　あんまり朝かるソコラソンゲ濡らすと　大事になりゃせんな』　棚ん上に織ったぬ神様に供えたき　タナバタち言うんと。7月7日ん夕方ん祭りじゃき　タンバタち言う話もある。タナバタソーメンち言う話も聞くがのぅ。怒り顔はいつん間にか夷顔に。

旅は道連れ世は情け

五助さんが今日も府内かる　二の瀬渡しまじ戻っち来た。川ん水か冷てぇきブルブル　顔ぅ洗うと腰ん手拭いを引きぬいじ　撫で回しちキヨロキヨロ見回ぇーた。毎日ん繰り返しゅ見ちよる　通やんが鍬をつっぱりこりゆぅ　せせら笑うごっ眺めち『今日も元気帰ったんか』ち　ひょいと安心したような声じ　『もう帰ったんかえ』

『よだきかった』けんどのや　自分かて戻らにゃ宿賃がばからしいき。そげー言いたげな格好じ側ぇ　馬をつなぐと畦ぃ腰ぅおりいた。『よだきーたなんかえ』　言われち返事困らんが五助さんのいいところ。『ヨダケシかる訛った語源と』『へーそれじ』『それもこん　ヨタキーを使うなぁ大分、宮崎、鹿児島、福岡　そしち広島、鳥取、岡山、兵庫、が使う　主な共有県のごたる』

あぶね鍬ん柄が折るるんじゃねえかち　づっこけかけた。『そげんことかえ　ワッソドウんじょうじゃ　ねえーんじゃな。よそんしも使いよるんかえ　もぅフント』『ソゲー言いなんなムゲネーガエ。いい加減にせにゃなぁ』『いい加減ちゃどんくれーかえ』『まぁ丁度いいようにじゃな』

今日はでーふん歩いたじゃろう』『たいした事ぁねぇ　馬が歩くきついち行かにゃ　仕方ねえまじん事じ』『府内まじゃどんくれあるんな』『じゃなぁ大体４里ち言うが』『尻え……』『いんにゃそん尻じゃねぇ　すぐ下屋敷にさがる』『こりゃぁ済まんなえ』『４里…１里が３６丁じゃき』『ふんとややこしいなぁ　４里やら３６丁やら』『それでんこれが計算の基本じゃき　じゃねぇと先ぃ進まんきな』『そうなそりゃまぁシリマセンジ』『洒落じゃなぁ』

『それじ折角じゃき　もちっと解るごつ教えなぁ』『やぁお前仕事たぁ済んだんか』『済まんぶんな明日ち言う手をかけん日がまぁあるき』　五助さんもそこまじ　言わるりゃ教えん訳にゃいかんごつなった。

１丁…約１１２メートル。１里は約３６丁。それじ計算すりゃ１里が約４キロメートルになる。大分⇨野津原が約３里じゃき　１２キロと言うこちーなる。現在尺貫法によっち今はメートル法を使用。大分県庁から国道４４２号線を　西に走った野津原の恵良区　法護寺山門口に水準点があり　この地点が３里１２キロメートルん　地点である。

昼飯ぅ峠ん飲食店じ食うたら　子供ん丼ん人気は１番な『カツ丼』、２番な『親子丼』　そしち３番は『牛丼』じゃそうな。案外大人ん考えと違うかん　それだけ子供ん好みも　変わっちきたんじゃろうのぅ。『へーふんとゆう調べたもんじゃなぁ』『こりゃ内緒ど　聞いた話ん受け売りじゃきの』

『ちった涼しゅなっちきたが』『そうそう　季節にんそん移り変わりゅう表す言葉があるんど』『じどげな言葉があるんかえ』　『春めく』『夏めく』　これからぁ『秋めく』じゃろう。そしち『冬めく』もあるんど。そん時どきん言葉をうまく表した　優しいなぁ何ちゅうてん　人ん心まじ和ませちもくるる。

『もうぼちぼちやめちゃどげーか　明日ちゅう手をかけん日があるんじゃろ』『そうでイヌネトするか』『鍬だきゃゆう洗うち戻れや　鍬は使われちダッタよりも　土んちーたまま　ナオサルルンガ　ひじいち言うきの』『ソウジャツタナこん前聞いたぬ　覚えちょるで』『頭いいのぅ』

薬草どま取っちょきなりー

夜中ぇ何べんもセンチンに　飛うじ行きよる。『お前かたどげしたんか　やーりセンチンに行きよったごたるが』『カカが腹くだしゅしち』『せんぷりゅ飲ますりゃよかろうに』『それが　お前どこかナオシクウジ』『薬りゃ病気ん時ぃ使うもんど』　ピラピラ飛ぅじ行くな　なんとんムゲネコサレ。

昔ん家はセンチンな外じ　そうすりゃ藁すだれハグッチ入る　まぁ風通しゃいいが　冬どま吹き上げちくる風にそこらじゅうが冷えまくる。小便なそん点入口そべある。お客が来た時すぐ間にあうごつん　心くばりとん言うが女　ごしゃチョイトやつぱ都合悪い。銭持ちんしん家じゃ座敷ん横かる　板張り廊下つたいん『上チョウズ場』があるけんど　これも真っ暗じゃもんじ　鼻ぅつままれてん解らんごたる。あぶね板敷きかるコロゲ落てたしもある。

『よいあったどセンプリが』『もうゆうなったき　ふんとドキなおしちょつたんな』『長持ちん上にあった』『そげん所ぃおくとネズミが使うで』『しょわねえど　ネズミぁ足が早ぇきセンチンにゃ　飛うじゆくわい』　こりゅ聞いちょつたネズミが『チュチュチュ』　飛びはねたごたる『みよ　喜くうじあばれよる』

センプリやらゲンノショウコやら　すぐ役立つもんな取っち影干ししちょつたが　一時使わんごつなりゃ忘れちこりゃどこんしも一緒じゃろうが。そりしてんセンチンに走るぬ見たかったもんじゃ。日ごろ早ぇきいちべ早かった事じゃろう。早ぅゆーなっちフガイイ事じゃ。

□□□　方言説明　□□□

３６Ｐ　ムカチーチ…腹がたち激怒。じゃあき…ですから。そうこうしよったら…そうしている間にも。アッパイ…美しくきれいな。こそばいいもふんと…触られてむずむずする心持ち。さいでん…さっき。アイの狂言…寸劇。カムゲチ…持ち上げて。シャツチ…無理に。ヤエコチャネェ…大変で辛く。イサブッタラ…揺らして。ヘコ…ふんどし。

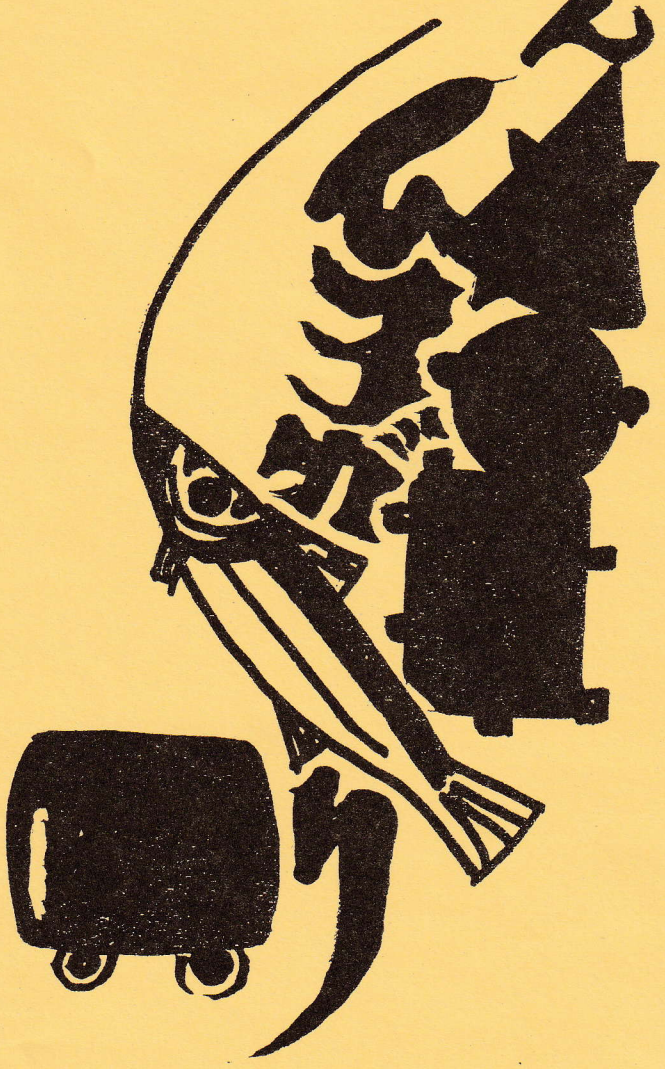
３７Ｐ　ブルブル…身震い。つっぱり…杖の代わりに。よだき…大儀な。ワッソドウ…私たちは。ムゲネェ…かわいそうな。府内まじ…現在の大分まで。

３８Ｐ　手をかけん…まだ使ってない日、時間。水準点…測量などの基本となる地点。じ、どげな…それでどうですか。ぼちぼち…そろそろ。イヌネト…帰って休む。

３９Ｐ　センチン…便所。カカガ…奥さんが。嫁ごが。ナオシクウジ…しまいこんで、奥深く入れてあり。ハグッチ…はぐり開いて。カミチョウズバ…部屋続きの便所、現在風なトイレ。ふがいい…都合よくて。

ちょういと一服しよると　次ん話が『おかわりどげな』ち　影かる言いよるき又よくぅ張るが　こん続きぁ又後じ聞くこちしゅうえ。先が急くしもおるじゃろうき。そげなふうじチヨコット笑うた　笑うなぁいい事
じゃき　しゃんと笑うち顎はずさんごつ。
笑う頭にゃ福来たるち言うで　今日も笑い
を忘れんごつしちょくれな。

信號旗



方言ちゅうなぁ数　かぎりねぇあるもんじ　そん中でんゆう使うのんと　滅手使わんのやらもう　分くるになんかオオゴトになる。けんとじアルキ助かり　便利がこげーいいいのん　役立つもんじゃ。使い方じ反対ん意味にもなるき　油断も隙もありゃせん。

いいで…よいですよ、構わない、いりません、どうしょう

こげなふうに　意味も多いが　内容もそん後先ん　言葉じ変わっちもくる。

よいてす…ＯＫなのか　承知したのか　無用ですか　どうでもなのか……

慌てて『はい』ちゅうち帰ると　相手は賛成か反対なのか『いらんち言うたじゃねぇな』になる。が反対ち思うと『よいですよ』ち　返事したこと。になる事もあるき困るこちなっちしまう。

イチ…一番の一なのか　位置についての…イチなのか。
　　そん人ん社会的立場もあろう。
イツ…いつの事、どの時の、ほんの少しの間のイツか。
イテ…ここにいてください、いてつく…寒さの表現。早口、
　　の痛い、じんわり痛む、など。

まぁとにかく広がると　数かぎりがねぇけんど　そりゅう旨いこと縮めち話す　これも方言の独特な世界でんある。長い生活用語しとしち　使われ省略され　凝縮してんそん底にある　人間の暖かさ　情愛はちっとん　のうならんき不思議でんある。まぁ早い話が言葉ん　話芸かん知れんな。

※※※　方言のひろがり　№３　※※※

古くからん生活用語じゃつた　方言が使われながら時代は移り　変わって行く世の流れん中じ　表現は変わったとしてんそん　心は昔と変わらんなぁ　優しい人ん心がそれ以上にデージする　思いやりん情愛があるからじゃろう。荒むてぇちゆう聞く語尾にしてん　顔ん表情に出る誠ん発声は　そりゅう物語っちょる。

い　イチノクレ……日暮れちすぐん頃、日暮れ間もない。
イチコロ…あっと思う間に、あっさり負ける、瞬間に。
イヂュハル……意地つぱり、負けず嫌い、自己主義者。
イチクリャイイ…行くのがよい、行きさえすれば安心。
イヂバリャキオツキ…意地張りにゃ用心を、油断大敵。
イチドキャムリ……いっぺんには無理、分割して。、
イチアキ……俵が一回使ってある、おさがりに使う。
イヂクリオウチ……じゃれあう、戯れ遊ぶ、仲良しの。
イチンダマ……一里行く間で食べられる、大きな飴玉。
イチリダマ……長く食べられる飴玉、大きな飴玉。

イチミチ……行ってみたら、行って確認を、行くのが。
イツケヒモ…子守の時に使う紐、子どもを背負う用具。
イッチョマエ……一人前の、大人の仲間入り、大きく。
イッタラサズヌゲ…済めばすぐ脱ぐ、済めば早く抜く。
イッター……射精した、絶頂に達した、究極の喜び。
イッチミヨ…行って見たら、確認して見る、行くこと。
イツネェホッテン…いつでもあるのじゃない、適期が。
イツノゥナッテン…いつの間にか無くなる、突然消え。
イッシュウ……一升、一蹴、一生、酒瓶の標準形。
イッコナサン……とても行けない、行く間に会わぬ。
イッチョルキ……行っていますから、先に行くから。

い…イットビュー…一斗俵、一斗入り袋、一斗分の働きしか。
イッパチン…一人前の、人並みん働きぶり、普通並みの。
イップクリュウ…腹立て性格、すぐ怒り癖、相容れない。
イッポカテ……片一方の、片手落ち、不公平な、変則的。
イツムナナ…五つ六つ七つ、５６７，語呂合わせがよい。
イツカルデン……いつからでも、都合のよい時に。
イッチョルネキ……行っている側に、挨拶の側にいて。
イッカクル……上から急にかける、頭からかけて。
イッタリキタリ……行きつ戻りつ、往復が激しく、往復。
イツデンチャ……いつでもよいので、都合のよい時に。

イッパイユウジ……一風呂貸して、お風呂に入らせて。
イツマジマタスル……大概には、待ち惚け、失礼な応対。
イツユウテン…いつ言っても、いつ結っても、自由発言。
イッキニャ……いっぺんには、急にしても、早急は無理。
イックリカエーチ……急に傾けて、急に出してしまう。
イッコン……少しも、一つも、一度も、いっぺんも。
イツデンサキデン……自由に、今でも後でも自由に。
イッチョンモ……少しも、一度も、一回も、全くの事。
イッチョケ…行っておけば、行って見たら、行くがよい。
イツモンゴツ……いつものように、常日ごろのように。

イットキンコツ…間もない頃に、やがての事、ややして。
イッチョモ……少しも、まったく、珍しいくらい、疎通。
イツンナカメカ…いつの間にやら、突然に、あっと思う。
イッカヤス……急にあけて出す、こぼして広げる。
イツイッカ…これこれしかしかで、指定日に、決めたら。
イッカデン…何日でも、都合のよいように、自由にして。
イッスンズリャ……少しずつ動く、渋滞して、のろのろ。
イッケウチ……親戚親類、身内の間柄、肉親の関わり。
イッセノセ……かけ声の動き、気合いを入れて一気に。

イッソンコチ…思いきって、どうせそうなら、決めてしまう。
イットキャ……しばらくは、模様見ては、当分は。
イツナンドキ……急に変化があるかも、いつ起こるかも。
イテーカンシレン……痛いかもしれない、少しは染みるかも。
イデンハテ……水路の周りに、水路の側、水入れ口の側。
イデングルリ……水路の周りを、水路の周辺を、水路関係の。
イデツクロイ……水路の補修、水路の修理、水路の補強。
イデギリ……水路の周辺草刈り、水路の側の環境整備。
イデカル……水路から、水路からの恩恵、水路からの水資源。
イデタリ……ゆがいて、ゆでる、熱湯でゆがいて食べる。

イデドマ…水路何かはきちんと整備、水路の周りをきれいに。
イテード…痛いのです、痛いから、痛む辛さ、痛いのに耐え。
イテカリャ……痛いのなら、痛いようなら、痛み耐えられぬ。
イデランヌ……ゆがけないので、ゆがいたが無理なよう。
イテンナラ……必要なければ、いらないのなら、無用なら。
イテゴタリャ……痛いようなら、かまんできないなら。
イデサラユ……水路の掃除、水路の整備作業、水路を点検。
イデチ……水路の、水路関係のあれこれ、水路とはの話。
イテツクバル…返事に困って、難しい問題出されて、質問に。
イデチョケ……ゆがいておけば、ゆがけば保存も効く。

イトージョランカ……傷んでいないか、腐敗していないか。
イトネーカ……痛くはないの痛みはどうです、大丈夫なの。
イトマグイ……暇の挨拶をして、いとまになごり惜しく。
イトカロウ…痛いことだろうが、痛手をうけたけれど、我慢。
イトージョル……いたんでいるよう、腐敗しているよう。
イトノーナッタ……痛くなくなった、痛みが取れた、治った。
イトバリュ…糸のついた針で、準備がよい、針取られんよう。
イドロキレ……野ばらの木を切れば、あぶないから切ったが。
イドンソコカユ……井戸の底掃除、井戸の水替え作業。

い　イドカリュウト……井戸が枯れても、井戸の水汲ませて。
イドラ…野バラ、野山ゃ川原などに自生するバラ科の花。
イトデン…痛くても、腐敗しているのでは、痛みを我慢。
イトワネェ……痛くはないから、我慢できます。
イナンゴタリャ…帰えらないなら、帰らないと言うなら。
イナコミシー……田舎を見たいけれど、故郷を見せて。
イナニャアガレ……帰らないなら上がったら。
イナカンコウスイ……下肥の香り、肥ためにある下肥。
イナスリャ……帰らせるなら、帰らせてはどう。
イナワロ…稲の藁、稲刈り後に出来た藁を、藁の呼び名。

イナンチュウカ……帰らないと言うの、帰りたくないの。
イナシュウヤ……帰らせたら、無理に帰らせないと。
イナケイク……田舎に行きたい、故郷は懐かしい場所。
イナケデン……田舎にでも、山村の片田舎、素朴な故郷。
イナカエ…農村ですか、片田舎でも住めば都、農村地帯。
イナカアルキ…里帰り、故郷に帰省する。若嫁の里帰り。
イナンジコス……帰らなくてよかった、帰らずに済んだ。
イナシイ……帰らせなさい、帰さないと心配する。
イニヨリャ……帰って行くよう、帰りよれば安心じゃき。
イニヨルンカ……帰って行くようだから、帰りゃ安心。

イニガキ…帰りの際に、帰り寄っておくれ、帰りの時に。
イニタガル…帰りたがる、帰りたいの、帰る事にするの。
イニメート…帰らなくても、帰らないなら、帰らぬよう。
イニタカリャ…帰りたいようなら、帰ればいいじゃない。
イニドモスルワ……帰るのだろうよ、帰ってもいいから。
イニトウデン……帰りたいだろうが、帰りたくてもまだ。
イニテーンナラ……帰りたいのなら、帰るならよいから。
イニカカッタ……帰りかかったけれど、帰りたい様子で。
イニツカエチ…食べすぎたか胃にもたれ、満腹になって。

65

い　イニノニ…帰ってすぐに、帰りつかんうちに、今帰った。
イニシナ……帰って間がなく、帰ったばかりなのに。
イニワキ…帰って間がないけれど、帰ったばかりですが。
イヌルソベ……帰る側から、帰ると言うのにまだ側に。
イヌルカ…帰りますか、帰ってもよいけれど、又いつか。
イヌルコチ……帰ることにしたので、帰りますから。
イヌリャコス…帰るなればこそ、帰っておれば、又の日。
イヌルゴタリャ……帰るのなら、帰るようでしたら。
イヌンナラ…帰るようなら、又ゆっくり出かけてくれば。
イヌメート……帰りまいと思うが、帰るのを見合わせて。

イヌンノカ……帰るのですか、帰らなくてもよいのでは。
イヌイチョル……貫いてしまった、刺さって貫いている。
イヌルケンド…帰ることにしたけれど、又出直してくる。
イヌルキ……帰りますから、帰って又出直します、帰る。
イネン…帰れないから、帰っても誰もいなくて、帰らぬ。
イネチャイワン……帰れとは言わないが、帰らなくても。
イネレンカ……帰れないのか、帰るのが無理なのだろう。
イネレメー……帰れないのだろう、帰るのが無理かも。
イネカリャ……稲を刈りますか、稲刈りをいつします。
イネジノウ……稲の取り入れはいつに、稲刈りはいつに。

イネチ…帰れと言うけれど、帰りなさいと言うても無理。
イネヤ……帰りなさいよ、そろそろ帰ったがよいのでは。
イネカムゲ……稲を担いで運ぶ、稲束を運んで。
イネコズミ……稲を束ねて積み上げる、稲の積み上げで。
イノドチスンナ…帰り支度なんかせずに、帰るのは早い。
イノチキャヒジ……生活は大変だが、貧乏暇なしで働く。
イノートホタッチョケ…帰るなら取り合あうな、自由に。
イノクスリュクリ…胃の痛み止め薬ないかな、胃の薬を。
イノコモチュ……亥の日につく餅、亥の日に配る餅。

63

い　イノクト……上に向いて、仰向くと、上をそり見上げて。
イノセクニャ…胃が痛む、胃痛を訴える、胃が痛む時には。
イノードチ……帰るように、帰り支度を、帰るのでしょう。
イノートシルカ……帰るのなら知らない、帰っても自由に。
イノキオミキュ……井戸に御神酒を、水神様に御神酒を。
イノーヤ……帰りましょう、帰りますよ、帰るから。
イノコン…井戸の、井戸に、井戸の周りに、井戸の掃除を。
イノコヅチ……亥の子餅行事に地面く叩く藁ぼて。
イバッテン……威張っていても、威張る気持ちも、気勢を。
イバンナシレチョル……威張っても知れている、うぬぼれ。

イバルネキジ……威張ってる側で、威張る人の周りで。
イバレン……威張れない、威張る気力もない、萎縮して。
イバッチョル…威張ってる、一人よがりの、価値はとうか。
イバリサゲーチ……鼻天狗になって、人がそう思うかが。
イバリクサッチ……憎らしい威張りかた、人の信頼度は。
イバロウドチ……威張りましょうと、言葉にだすようでは。
イビリタガル……人をののしる性格、悪態曝して卑下する。
イビンサキ……指の先、指先の、指さす方向に、指先の美。
イビセセリ……水口を争い取り合う、いない間に水を盗む。
イビルナイイガ…人を卑下するのはようが、人の振り見て。

イビジョウネガ……指が達者で使い上手、指の力が勝って。
イビンジョウ……指ばかりで、水口が多くて、指が揃えば。
イビリデーチ……嫌がらせで追い出す、皮肉に耐えかねて。
イビクチャ……水口は作物の源、水口計量は神聖なもの。
イビッタチュウ……皮肉並べて追い出した、耐え切れずに。
イビカルコゥ……水口など水の流れの要、水口の手叩き水。
イビリャコス…憎しみ言葉に耐えられない、我慢にも限界。
イビュシミィ…水口の調整が収穫にも響く、水あれば豊作。
イビシイ……身震いするような行動、嫌味のする言葉使い。
イビショコネェ……嫌いでぞっとするような態度、行動。

★　イバル…同じ威張りでん　可愛いいイバリ、威圧するごたるイバリ、そん威張りによっち　言いたいことも言えんような被害者も　時にゃ出る事もある。意見も黙殺さるるような結果にも。威張りん内容にもよろうが　認知さるるような『いばり』は　そげー威張らんのが常識。

かっては物持ち、財産持ちは言葉使いじ　相手は威圧にも感じ『言わぬが特』ん　時代もあったごたる。威張る心にゃ１人よがり、見せつけたい、知って貰いたいなんかそん意味も違うじゃろう。が威張る　いわゆる『おほめ』内容じありゃー　人がちゃんと褒めちくるるもん。

どけな物持ち　才長けてん人が言わんごたる　『威張』りゃあんまり価値もねえごたるが。鼻天狗になってん　自分じゃ鬼ん首取ったごたってん　人が見りゃごみ屑ならそりゃもう『威張り』ゃ　犬ん遠ぼえにしか　聞こえんもんでんある。

本当ん『威張り』ん真価たぁ　万人が認めちそりゅう尚遠慮する　そげな奥ゆかしさこすが　威張るる内容じゃなかろうか。勲章でん辞退する国会議員もおる　公費じ仕事したき当然じ考えようじゃ　生活させちもろうた　お礼をしてーとか……こげなしこす誠ん公僕じゃろう。

子供が『威張っちょる』　横顔見りゃぁふんと　あどけねぇええらしい。純粋ん心ぅさらけてーた『威張り』　これこす『いっぺんしち見たかった』　演習かん知れん。人ん欲は心底の欲と　トワズん欲があるが　トワズ言えるんわ心が豊かなんじゃろう。

イビショコネェ話しなっちご免な　ほんな又続いち『方言単語』んひろがり行くで。

い　イビリマクッチ…苛めて仲間はずれにする、ひどく苛める。
イビキュー……いびきを、ひどいいびきに悩む、いびき癖。
イビシイ……見るのに嫌な思いがする、気持ちが悪くて。
イビグチ……田んぼの水取り入れ口、水の入る水路の口。
イビニセンヌ……水口に栓をする、水の入るのを止める。
イビラ…畑に出来る球根のついた雑草、飢饉の時の非常食。
イブッチミヨ……いぶして見ては、邪魔者を仲間はずれに。
イブシボリ……小便をする動作、男性性器をたとえた。
イブリデータ……仲間はずれにしてしまう、追い出した。
イブユウミヨ……男性性器をよく見たら、念入りに調べる。

ブブコスデージニ…男性性器こそ大切に、大切な宝物でも。
イブシチョカニ…いぶして役立たせる、くん製にして保存。
イブッタンカ……苛めたのか、仲間はずれにしたのか。
イボンサキ……男性性器の先、皮膚に出来たイボの先に。
イボシボリ……小便をする動作、時間稼ぎの都合よい言葉。
イボガミサマ…皮膚のイボによく効く神様、念ずれば効果。
イボカルキチ……犬の遠吠え、自慢のイボは大きいけれど。
イボンワキ…イボの横に何か怪しげな、皮膚にあれこれと。
イボデン……皮膚のイボでも油断がならない、健康管理を。
イボシ……飯の残りを陽干しにして保存食、食料を大事に。

イマキュトッタ…腰巻を取った時に、腰巻を取られたのか。
イマデン…今でも、あれからずっと現在、少しも変わらず。
イマユウキ……今言いますから、やっと言えられ時が来た。
イマヨリャ……今よりも、現在より尚しあわせになりたい。
イマドキノヤ……今頃では珍しい事、場面が変わって。
イマナリデン……今のままでも、やはりよく似合う姿。
イママジン…今までの、過去の事は忘れては、今を大事に。
イマドマモウ……今ではもう忘れて、変わる流れに従う。
イマイワニャ……今言わないと機会を失う、時を大切に。

い　イマキンワキカル……腰巻の脇から、時にゃ見えたりも。
イママデンゴツ……今までのように、相変わらずよろしく。
イマゴリナッチ…今頃になっちなんでまた、急に言われて。
イマキャカゼヨケ……腰巻は防寒にも、隠すのにも役目を。
イマンウチー……今のうちにかたづけ、いないうちに。
イマンワキー……今の仲間に、留守の間に、時間を有効に。
イマジャキコス……いまだからこそ、黙っていたけれど。
イマカルデン……今からでも、早いほうがよいのでは。
イマシカタ…たった今、ついさっきの事、間に合わないか。
イマキ…腰巻、いもじ、湯もじとも言う、女性の防寒役目。

イミリャ……増える事は、多くなって、数が多くなると。
イミラカシャイイ……増やせばよい、多くしてほしい。
イミャーネェ……たいした事でもない、些細な事で。
イミッタカン……増えたかも、多くなったのでは、沢山に。
イミッテンノヤ……増えても困るが、多くがよいでもない。
イミルナイイガ……増えるのはようが、後の始末は大丈夫。
イミッタラヤル……増えたらあげるから、沢山ではたら。
イミリャコス……増えれはこそ、多くなった時には。
イミルナコマルド……増えても困るが、多かればよいでも。
イミッチョル……増えているが、困ることも、兼ね合いが。

イミラケーチ……増やしたのはよいが、考えなしで困る。
イムークウタカ……芋たべましたか、芋食べて見ては。
イムヤイチョケ……芋を焼いてください、焼き芋作って。
イムーコウタ……芋を買ってきたので、芋買ったものの。
イムウエタンナ……芋植えましたか、芋植えしないですか。
イムマジクウカ……芋まで食べますか、芋も代用食になる。
イムクレナラ……芋くらいならどうでもよい、芋ならよい。
イムーエ……芋ですか、芋ならよいでしょう、芋なら遠慮。
イムクエ……芋食べなさい、芋食べたら、芋でも食べて。

六の瀬渡し場

六の瀬渡し…肥後街道《豊後街道》ん一の瀬渡しかる数えち６番目　鶴崎かるん上りじゃ光吉に次ぐ２番目ん渡しになる場所。ここまじ来りゃもう目の前が肥後領　胡麻鶴。行列も瀬渡りん前に小林寺じ　お茶ん接待を受くる習わし。茶室まじ駕籠かる降りると　歩いち旅ん中でん一際心ん休まる場所。

鎌倉時代ん創建じゃつた寺ん山門ぬ　潜っち石段をちっと登ると出迎えんしに　笑顔がこぼるる和みんひととき。万寿寺系ん禅寺じゃが人ん巡りあいは　宗派は超越しち心んもてなし京ん茶受けも　楽しみん一つじゃつたよう。庭園に飛ぶ小鳥や虫ん声に　暫しん時間が過ぎ去っち行く。

今も当時ん面影が忍ばるる　寺域には京ん風雅も感じられち　素朴な『七瀬しぐれ』の妙なる味。人を導き人をもてなす心情がそん一つ　一つに写し出さるるごたる。戦中青紙招集礼状によっち　野津原村かる４人が小倉の軍需工場に　集められた。大分郡かる１４人とか　城野ん宿舎じ厳しい生活と工場の労働。静かに語る回想には　仏も神もどうしていたんかち　疑問になったち話す。

話がしとうじたまらん　こっちも聞きとうじたまらん。ぐるぐるっと懐かしい話し　かてなぁなち言うと胡麻豆腐が　運ばれちきた　じゃここじゃ名物ん精進料理もある。

第一次世界大戦中ん大正５年《１９１６》　当時徳島に収容されちょつたドイツ捕虜　そんしたちん音楽活動を描いた　映画『バルトの楽園』が　話題になったけんど　そんしたちん心んよすがとした　散策を楽しむ様が　こん頃近くん民家かる発見されたことがあった。大正初期ん貴重な資料。

ここん前河村住職《故人》ん　伴侶アヤさんかたん倉庫じ孫が発見したもん。こん寺にゃ昭和初期にゃ　歌人北原白秋も訪れち歌を詠んだ場所。近くは女優ん香川京子さんの　父方の墓地もある事で墓参　思い出のアルバムに納まっちょる。語る《仲間に入るの意味にも通じる》アヤさんも　『内にゃ歌人やら女優は来たぬ知っちょるが　ドイツ人捕虜まじ』ち　人ん巡り合わせにタマガッチシモウタち　話が弾んじしもうた。

写真に写っちょんなぁ　開戦した年ん１４年１１月に　捕虜になっち中国青島《チンタオ》かる　大分市内ん収容所に送られたドイツ人のごたる。そん写真にゃ境内じくつろいじおるそげな様子が撮影されち　『大正５年３月９日ドイツ捕虜散歩の時』と　言う添え書きがある。

『じゃちゃ誰がいつどげな理由じ　お寺に寄付したんかが解らんけんどやっぱ遠くかる　送られち来たこげな人たちん気持ちゅ考ゆる時ちっとでん　で一じしちゃりてぇ情が湧いちせめて　思い出に撮っちょいちやろうち　思うたんじゃあるめえか。人ん親なり人ん子じある　お互いが大事しあう心ん現れじゃろう。

将校級１３人なそん頃ん　大分市中央町ん日本赤十字社大分支部に　準士官以下は第一尋常高等小学校《金池小》に　収容されたち言う。大戦初期は捕虜は国際法に基づく人道的な扱いをうけち　散策も許されたんじゃねぇかち思う。

そん頃ん記録によりゃ　『ドイツ人捕虜』…第一次世界大戦《１９１４⇨１８年》じ　日本な日英同盟に基づいちドイツに　宣戦布告。ドイツのアジア拠点である　中国ん青島を攻撃した。約４６８０人のドイツ人捕虜は　日本に送られ全国１６ケ所に　収容されちょる。

『ゴマトウフどげーな　おいしいじゃろう』　自慢げに話すだけさすがに美味しい。『遠慮がねぇき　うまいじゃろうち言うんで』　そん気持ちゆう解るわな。手ほめたぁなかなか出来んもんじゃが　勧めらるるそん気持ちにゃ夢とロマンもつまっちょる　そげな感触も伺えたごたる。

分校に通いよった頃七瀬川ん水も　今んごたねぇ多かったけんど　学校かる帰ると夏は裸じ　ゆう泳いだもんじゃった。色白ん上品なこん人がち　疑うごたる度胸があったなんか。でん子供は童心じ天心爛漫　じゃき三つ子ん魂は百まじちゆう言う。知恵がつくんもこん頃じゃろう。

茶室は今は使われよらんが　肥後ん殿様ん休憩ん時どまそりゃ　大事じゃつたんじゃろうに。『そげんこたぁなかったんと　とてん皆んなを大事にしち　そりー贅沢はあんまりせんじゃつたごたるで』『ほぅあんた見たごたるな』『障子穴をあけち見たんで』　二人が噴き出して笑ぅもんじゃき　何事かち草取りんしが背伸びしよった。

『こん七瀬川しぐれ　なかなか上品な味じゃこと』『そげぇ思う　誰かに教えちょかにゃち思いよる』『ウチガ習おぅか』『えぇあんたが　そりゃ無理じゃろうな』　こう言わると尚習いてぇごたるが　『企業秘密』ち　あっさり断わられちしもぅた。オシナギッタケンド。『やっぱ楽しみヨバルルホウガ　いいごたるなぁ』。

『野津原音頭』ち昔かるあった唄　盆にゃみんな浴衣着ち踊ったもんじゃが。『こん唄はなぁ木の上音頭ちゆうんで』　自分じ詩を書いただけあっち　丸暗記しちょるんもさすが。昔ん高等女学校生徒は違うな　そりぃ青紙招集礼状　役場かる吏丁がもって来ち　『おめでとうございます』　親は複雑じゃったろうな。

参勤交代ん行列は『お茶ん接待』を　受けた後はコイサは野津原お陣屋泊まり。まだ陽は高ぅでん自由気ままは許されん。『お発ち』ん一声じ行列は　六の瀬を渡って次は肥後領地に入り　胡麻鶴に上がる。川沿いに自分かたに帰ったごたる　ゆったり気分になると　行列ん供どもも少し気もゆるりとなった。

天気がいいき５の瀬じ御堂に渡る　ちっと進むとこんだまた瀬渡りん繰り返しになる。駕籠に揺らるる殿様も時にゃ　歩くこともあったんじゃあるめぇか。心配ねぇような場所どま呑気に歩く　自然の息吹きに触れながら　ちょっとワヤクスルンモ　乙なもんじゃろうに叶わぬ辛さ。それも又人間の宿命でんあろう。

二の瀬三の瀬無事瀬を渡り　めぐす不動に笠を脱ぐ……七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラ　ホイホイホイ。

アン娘年ごろ姉さんかぶり　いつか覚えた馬子唄を……七瀬のせせらぎ　小鮎がスイスイ　ホイホイホイ。

二の瀬を無事に渡れば今ん『往還田』　帯を引き延ばしたごたる江戸期ん遺跡。ここにも人生の喜怒哀楽が　滲み消え流れ去ってゆく時代の変転。じゃき生きちょらんかん知れんなぁ。生きちょりゃちった苦労もあるものじゃ。

五助街道物語り

五助さんが街道に笑顔じ　あんげこんげスリャなしか　近所も明るなっち楽しゅうもある。肥後に帰るしが連れのうち　いよいよ上り坂んヒジイのん　ここがオシマイんごたる坂口。ぐわゆう石ぅ敷きつめた道　上がっちすぐを左ぃ行きゃ　鶴山、赤岩、戸黒、に出る。

右さね曲がっち１丁ほずじ　緑陰に入るが途中かる右手に上ると坊ヶ辻に行き着く。眼下に諏訪郷ん中心が　絵に書いたごつ文化ん香りゅ漂わせちょる。大昔海面が高かった頃は　舟がここまじ町かる品物ぅ運び　ここかるは農林産物を　積み出しよったんじゃろう。それじ小舟ちつけた　舟平もあるき当時が　頷ける理屈にもなる。

神楽見に来たちヨバンデン来る　祭り客にゃ時にゃ神楽見てぇぬ　足止めになっち　苦虫ぅかみ締めた　若い嫁ごもあったそうな。

♪御輿回せばいつしか夜も　更けて二人の大田川。馬子唄にもあるごつ若い時ぁ　それじよかったんが　嫁ごちなりゃそげな調子にゃいかんち　愚痴ん一つも言いとぅなる。そげな思いが唄に出ち　♪神楽見てぇが足止めされち　呼ばんじ来るんが祭り客。　鼻唄じ気を晴らすそん気持ち　ゆう解る。

久住山系の東ん端ち言う大田　じゃき末寺ん地福寺ん和尚は物事ぅデージしよった。参勤交代ん駕籠かき使役が回っち来た。それじのうでんイチモツあったき　前を担いじ横道まじ来たら　眺めがいいき供侍が気をきかせち　休息ちなった。心得たと先棒担いだままクルリ　駕籠ん半分がホキノハナに出る　そげな格好になった。ニタリ笑うと『眺めがいいわな』　大きな声に……

日頃往生とか無理が通ると　道理がひっこむとかあるが……

何事かちヒョイト駕籠ん戸を開けた。と　こりゃまぁオオゴトジャ　傾いた駕籠ん下見たらなんと　遥か下は高い断崖ん上に横たくり　駕籠は涼しそうな顔しち　差し出されちょったじゃねぇかえ。『駕籠かき』ち言いて一ぬじっと　堪えた殿様身震いするごたる心境。

それに気づいた供の侍が　とにかく静かに下ろさんと　それこす何が起こるか落ち着かんじ　駕籠かきんそべえ駆け寄ると　『そん駕籠早ぅ静かに』と　もう身振り手振りん忙しい事。駕籠かきん一華和尚も危ネェ目にゃ合わせんけんど　ちょいと荒肝とるとやおら静かに駕籠ぅ　そこに下ろした。

『あぁもうタマガッチシモウタ』　震えるような声をえーと堪えち　『これ供はおらんか』『ええーこれに』『今なぁ何事じゃったんか』『実は駕籠カキが殿に見物して……』『ちっと身震いするごたったがのぅ』『これはこれは申しわけもない事で』『いやよいよい　よいど余興にしてはちと派手じゃが　なんか訳でもあったんかのぅ』

殿様も尋常じゃない　供侍もあわやの事で　冷汗三昧の体で平伏してしまった。殿様は側に呼んで確かめたところ　実はこれこれしかしかと　心の中ん面を申し上げた。一華和尚もコゲーに下手に出られると　真面目ん顔になっち申しあげた。高い場所だけに涼しい風は　惜しげものう吹いちょつた。

『領民じゃきみんなする事ぁ　せんとなぇ　でん得意な事やら苦手もあるじゃろうき　旨い具合に適材適所に配置するんが　能率もあがるし皆んなもいいんじゃねぇ』。そん発言なまさに的が確かでんあったき　殿様もゆう解ったごたる。早速こんこつ役人に話しち　こん次かるわ楽しい仕事になるごつ　するんがお互いにいいと言う　考えに決まったごたる。

府内帰りん馬子唄聞けば　針を持つ手が又止まる…夕暮れ時になりゃなんか　胸さわぎがするんも若いきか。櫨山まじ上っちくりゃもう　こげーひじい坂もこれからぁのうなる。茶店ん赤ぇ旗がもう年季も入っちょるが店んばあさんな　若ぇしに負けんごつ心ぁ豊かじ　誰にでん話しゅ合わせち時にゃ　悩みごとも聞いちくるる。

朝草切りん帰り道じ山ユリぅ　店に飾っちおくれよち　目じ合図する。そん後かる牛ぅ追いながら帰るんが　どうやら気に入り同志んごたる。こん前どま草切りしよらんき　どき行ったんかち思うたが。背の高ぇ草が時時揺れよる。『ははぁ』みんなも納得　そげな夢もあっちがこん秋にゃ　どうでん歩くそうな。

草が高ぅじ姿が見えん　積荷ぁ出来たかアン二人……

行列は普通ん店にゃ寄らんじ　ここからはデーらに近え道。それも鉄平石ぅ敷きつめたごつ　丈夫な道が暫く続いち南に向けた　カーブを出たり入ったりする。松ん根元にゃ石清水が流れち来ち　すくぅち飲むんが手頃ん場所が　いくつもあっち喉潤すにゃ格好ん場所。

眺めがゆうじ風もゆう当たっち　一休みスルンモいいもんじ　五助さんもちっと早ぅ帰った日にゃ　ゆうここじ一寝入りするもんじゃき　馬も心得たもんじ先に影に入った。『今日は連れがあるき悪いど』　五助さんも馬に先手打たるりゃ困る　それに今日は道連れもあるき。

連れのうた旅んしも思わぬ　場面に何べんも出会う人ん生き方に　連れ添ってよかった人生双六ぅ　楽しゅう体験しちょる肥後街道　3回目の道中物語でんある。

いよいよ湛水に向けち眺望んいい　街道をデーラにもなつたき　馬も楽になったんか足取りが早ぇ。五助さんここらじあんたん　『馬子唄が似合うんじゃがなぁ』『あんたもでぇぶんオダテが上手になったな』『そりぃ乗るんもいいもんじゃで』　二人ん語らいはこん景色にゃ誠ち　絵になる。

『肥後か府内か一の瀬渡りゃ　お国訛りが懐かしい』……『馬子じゃ嫌かと返りの言葉　待てば背向けて首を振る』…

爽やかな風に乗っち歩く二人　そりぃ馬んヒズメん音がうまい具合に調和する。貝殻岳にもう陽がでーぶ照ると人ん行き来も多ぅなったごたる。時折五助さんが顔見知りんしに逢うと　馬も嬉しいんじゃろう嘶くき　相手も喜ぶ肥後街道の横道《ヨコドウ》。

南に大野、上詰方面。北は庄内挟間、今畑かる。こきー集まる街道にゃ　こん先かる右にゃ練迫、直入。左は久住竹田、熊本に続くが　こん道もはじめはデーブン　南側を通りよったけんど　江戸期になる前に岡領殿様　先ぅ見越した『おばね道』ぅ作った。

坊ヶ辻にゃ諏訪かる登る幹線　土取り、矢の原かる来た肥後街道。南ん戸黒かる、北に芝原三国境、庄内なんかもここに集まる　幹道ん分岐点でんあった。こげん周辺の道が集まりおうち　肥後街道ん華やかな道中は　夢にロマンぬダブラセち　今日も明日も行き来するんじゃろう。

『山が高うじやるせぬ思い　歩きゃ３里ん道じゃのに』『あん娘年頃姉さんかぶり　いつか覚えた馬子唄を』……水ん音がひときわ高ぅなっち　家並みが見えでーた。『あっこが　湛水で　だりゃせんな』『しょわねぇで』

『あん音は何事じゃろうか』『あれな知らんじゃつたんじゃな』『……』『工藤三助さんが苦労しち水路を作った　そん水がちっとカサに出ち　こん上ん水路を流れよるんで』『じゃーそげんことな　ほんなそれまじゃ水がなかったんじゃな』『そうで　畑どころじそりゃー苦労しよった』

野津原郷ん水不足ん解決に　身をなげうっち取り組んだ　そん功績は大きいき水路んすぐ下に　そん記念碑も立てられちょる。水路工事に苦労した『浮動岩』ん話しゃ　有名でんあっち里んしが作った　『工藤三助物語り浪曲』まじ出来たんと。敬老会じ年寄りしが聞くと　ラッキョウんごたる涙ぅ流ぇち　語りよったそんしも　泣きじゃくっち会場は　いっときぁ話が進まんじゃつたち言う。

そんおかげじ野津原はじめ　谷村、挟間、横瀬まじも水が流れちょる。今じゃもうそげな苦労も　ちっとずつ忘れかけちょんな　悲しい事じゃけんど時ん流れ　歴史ん解釈によっちゃ世の中　あんげこんげするき　困ったコンニャクでんある。『ふんとなぇ　どきでんある話しじゃが』『やっぱ先人が苦労したんは　後に続くしたちがシヤント　守っちあげんとなえ。ここんしたちゃ毎年　お祭りしよるち言うが。

『ここが湛水で家並みん中は　石たたみが敷きつめちゃるんで』『ふんとなぇ　やっぱここじゃ道中ん殿様と　土地ん領民が言葉交わしもあったじゃろうな』　軒先マジカン駕籠にひょいとすりゃ　『これおあがり』ち　時のご馳走ん差し入れぐれは』『冗談じゃねぇで　そげんこたぁもう　大ごとになるき　やめちょかにゃ』　五助さんムキになっち怒ったき　連れのうた旅んしもタマガッチシモウタ。

3つん水路を作った三助さんの苦労は　こん碑にきちんと刻まれちょる。

『三助おどり』

山が高ぅち　待たるる水が
木の葉揺らしち　里につく
三助まつりの　涙に濡れち
里に帰った　娘《コ》も濡れる。

岩をくぐっち　ここまじ来たと
顔を覗かす　いじらしさ
三助まつりに　揃うた揃うた
稲の出穂まじ　よう揃うた。

ヒサゴ、オオタツ、カギオノ井手が
みのり豊かに　手をかした
三助まつりは　嬉しい秋の
ヤグラ太鼓に　丸い月。

長湯はやたち　谷めぐらせち
苦労承知の　淵もある
三助まつりが　あん日に馳せち
水は止まらん　横瀬まじ。

馬も汗が滲むごついい天気　『ちょいと一服するかな』『馬はいいんな』『しょわねぇ　影べれつないじょきゃ　水どまぬーじ待つわな』　五助さんもわざっと　旅ん心に気を使わせんごつ　言うたもんぬ荷物背にしたままん　休憩はヒドカロウが辛抱しよや　ち心ん中じゃゆうたじゃろう。

中へんに高札場があっち　みんなに知らする事が書いち張っちゃる。すぐ脇んひつこんだ所ぃ　茶店があったき五助さんが入った。

『ばあさん　アンコロあんの』『今餡ぬつけよるきな』『ソッココつけちょきゃいいき』『ソゲンわけーいくめ』『いいとん　そんかわり安ゥナルジャロゥ』『アゲンコトンジョゆう　もう困ったコンニャクじゃなぁ』『ありゃ俺がんお得意を取ると　こまんなぁ』

やり取りが賑やけーもんじゃき　お客が入っち来たもんじゃき　『ほんな　ぼちぼち出るかな　帰りよるきそん時な』『気をつけち行きよえ　馬はおいちょくんな』『いんげっとな　馬が行かにゃ商売にならんがえ　オロイイ事んじょう言う。

客ん入れ替わりがある　店んばあさんも五助さんが　寄っち大声じ笑うとつい通りかかったしも　入っちくるき福ん神ち喜ぶ。連れのうたしもそげん　人間ツツロク人生を何べんも見ち　教えらるる事ん多い旅連れじゃった。石たたみ道が切ると　いよいよ今市まじ１丁ほず。諏訪とはここじお別れになる。

『旅は道連れ世は情け』ち　諺にもあるけんど　まさに連れたぁいいもんでんある。それが気揃う事じ尚更　効果も出ちくるもんでんある。五助さんの人柄といい　相手の人たちん人をデージする　気構えなんかは同じ土地じ　苦労潜り抜けたもん同志なら　尚よきー強いもんもあるごたる。又馬は賢い動物じ言葉こす　話サンデン人より知恵も感覚もすぐれちょるごたる。

すれ違う人たちん心優しい　ふれあいん中じ人間の生き方ん　縮図を見ちょるごたる時間が　コチコチ時を刻みそん中を五助さんと馬と歩く　生涯でん格別な思いで日記になりそうでんあった。

夢とロマンも通った道

工藤三助ん記念碑を見上げちょつた　人たちぁ誰れじゃったんじゃろうか。１８６４年２月に江戸かる　長崎ぃ行く途中じ野津原に泊まっちょるが　静かな農村じ春んごたる　暖い日じゃつたち日記にゃある。勝海舟た当時ん海軍軍艦奉行　怪しげな世相に急きょ政府が　出張命令を出しちコソット　坂本竜馬が同伴しちょる。

長崎じ砲撃するかん知れん　相手国んしと談合しち急場を　救う苦肉ん策じゃが何とか切り抜け　すぐ引き返す時も野津原に泊まった。何さま歩く道中それこす　大事じゃったじゃろうが　まぁそんくれん覚悟じ来たき　それなりん度胸は座っちょた。あん頃ん武士なりゃ気骨もあっち国ん為なら命惜しまんそげな　義勇ん心根があったき　そん役目も見事果たしたち言う。

道幅１間は生活道路でんあったが　行列が通る日どまもぅ　美しゅう掃わきあげ雑巾な　かけんじゃつたろうがそんくれぇ石たたみゃ美しかった。茶店ん箱にゃ当時はやりん『ショウガ糖菓子』　『ふきんつくだ煮』『アンコロ餅』もあった。

高札場にゃ役所からん知らせ　禁令、法令　なんかが張っちゃつち前を通るしゃ　敬礼しち通るんが礼儀じゃつた。野津原、久住、かる用事連絡が来るたんび　張り替えちょつたが　人ん悩みごとも話しゅう聞いち　くれよったそうな。まぁ交番みたような場所かな。

ここぁ家数も３０戸ぐれーじゃき　みんな仲よぅ平和な里じゃつたち言う。こくう出ると諏訪村とん　お別れ今市ぃ入っち行く。

△△△　方言説明　△△△

５９Ｐ　デーラ…平坦な場所。あんたん…あなたの。背向けち首をふる…口に出せない嬉しさを背向けてＯＫのサイン。ヨコドウ、坊ヶ辻…地域場所の呼び名。デーブン…だいぶん、沢山。おばね道…高い場所の背を通る道。だりゃ…疲れたら。

６０Ｐ　カサ…上手の方《肥後領地の場合は熊本の方がカサになる》。じゃー…ですから。浮動岩…浮動尊を祀った難渋工事の岩。ラッキョウのごたる…大きな涙の表現。横瀬まじ…大分市の横瀬。あんげこんげ…あちらこちらと。コンニャク…弾みにもなるゴロ合わせの言葉。どきでん…どこにでも。シャント…しっかりと。マジカン…近くの。

６１Ｐ　影べら…影のほう。ぬーじ…飲んで。高札場…掲示板のある場所。

６２Ｐ　アンコロ…一口ダンゴに餡みこをつけて串にさしてある。ソゲン…そんな。いんげとな…いやですよ。オロイイ…よくばり、悪心。ツツロク人生…行きつ戻りつして支えあう社会。諏訪…江戸期の大字より広い集落。話さんでん…話さなくても。

６３Ｐ　怪しげな…戦運急を告げるような。日どま…そんな日などは。ショウガ糖…ショウガを入れて黒砂糖で固めた菓子。敬礼…この場合はお辞儀して。くれよった…もらっていた。今市ぃ…岡領地に入るので。

『灰汁汁が木綿の垢落とし』

風呂炊きの灰が思わぬ洗剤にもなる　灰を水で薄めち桶に漉して取る。これに暫くつけておくと　汚れを分解しちくるる。

漉した灰汁じるぁ茶褐色ん　澄んだ水じ木綿の汚れは片昼つけちょきゃ　あたぁ揉み洗いじ汚れが浮き落つる。品のいい　ばあさんが執心した灰汁じる洗たく　気骨もあっちか仕上がりもいい。釣瓶井戸かる手桶じ運ぶ水が　盥に移されちそん中ぇ洗たくもん　2，3べん水かゆりゃ　もう真新しいごつシャキツトなった。

水ぅ湛ゆる夢とロマン　そげな意味が真剣込められちつけたんか　こくぅ湛水ち呼ぶのん解る。水路がなかった頃にゃ出水、湧水、天水、が頼りじゃつた。雨が溜まったらどんくれ大事にしたか　有りすげてん困る水じゃが　ねぇとなりゃもうニツチモサッチモ　いかれんのも水じゃきチットデン　水貯むる気持ちゃ痛ぇほず解る。

『吉ちゃんサカシイな』

大けな声じ　オラブなぁ馬子ん五助さん　いつも湛水まじ帰るちくると芝尾かるん声。そりゅまた耳も近えんか　聞くと観音様ん方かる返事ん声。竹ん中んエバぅかきわけ　『こん忙しいに』　本当は待っちょつたんじゃろうに　小言ぅ自分に言い聞かするごつ言うと　ニタッと笑う。

『ちょいと来んな』ち　言うこたぁ解っちょるき　『すぐ行くで』『待っちょるで』　もうそれだけじ充分気持ちゃ通じちょるきキセル出すと　一服火をつけた。明日も天気か貝殻岳にゃよ夕日が赤ぇ。仕事着にチータごみぅバタバタ払い落とすと髭面ぅちっと　あらぅち野良着ん裾じ　押し拭いちビラビラ飛ぅじ行く。何はのうでん話しゅする　それだけじ落ち着くんも　心が通じ合うきか男が男に好きになる。

『おとろし早かったなぁ』『そうでチットデン早ぅ会いてぇもんじゃき』『すまんなぁ　おおきに　これ竹田ん饅頭』『竹田ぇ行っちょつたんか』『こげんこたぁ…』『チャントせんとクルワルルき』『またトワズ言う』『出かかった時ぃ思いでーち　忘れんごつせにゃち』『そげんこつぅや』

忙しい時ぁすぐにでん飛んじ来ち　加勢しちくるるに遠慮する。嫌ち言わん性格も好かるるき　ねんじゅ家にゃおらんケンド　不思議と五助さんがオラブ時にゃ　家ん近所じ何かかんかしよるき　オラブと耳に入るのん不思議。観音堂ん杜も巡り合わせ人生なら　そんご加護があるのも事実んごたる。

『何ぅハリコミよったんか』『大した事ぁねぇ　暇潰しん山掃除しよった』『また竹の子がガイト出るの』『やるでお前かたんバアサン好きじゃつたなぇ』『好きぐれか鋤にモゥゴかけたごつ食う』『いいじゃねぇか食うなぁ達者ん証拠　腹ひとつ食うなぁサカシイきじゃこと』

辻ぃシャガミクウジ話す二人ん話ぃ　近所んしが寄っち来ち　そん輪に入ったもんじゃき　馬が『帰いる』ち嘶いた。『解ったわかったフント油断も隙もねぇ　ちゃんと番をしち油売らんごつバアサンが　仕込んじょるきのぅ』『じゃけんどいい頃あいじゃろうで　日が暮るるきヨダツガよかろう。

貝殻岳にあった陽がもうのうなった。風がコンコロモチいいが　もうすぐ寒ぅなるき貧乏人にゃ　困ったコンニャクじゃのう。『さぁいぬるかのぅ』馬も弾みがちーち　一声嘶くと五助さんも自慢の馬子唄を……竹田帰りの馬子唄聞けば針を持つ手がまたとまる……馬も心得たもんじ一声嘶いた合いの手で。吉ちゃんも名残り惜しいな　解っちょるが敢えて『早ぅ帰らにゃ吸い物が冷ゆるど』　『ふんな』

七瀬馬子唄かる　◎　誰がつけたか優しく呼んで
湛水とは目も潤む
ハ　七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラ　ホイホイホイ。

◎　あん娘年ごろ姉さんかぶり
いつか覚えた　馬子唄を
ハ　七瀬のせせらぎ　紅葉がチラホラ　ホイホイホイ。

湛水ん茶店じヨバレタ　『あんころもち』じ　ちった腹がおけたもんじゃき　五助さんどま眠となったんか　ウトウト調子じ通り抜けよる。『しょわないんかえ』『『え　あんたあ　こりゃ済まんじゃつたな　とっと忘れちょつた』『あらまぁ』　あきれ顔じ旅ん道連れんしも　不安になったけんど馬はしゃんとしちょる。そん時ハズレん　おばんが……

『五助さん帰り荷を頼みてーが』『どこまじな』『芹まじじゃがいいな』『急くんかえ』『いんにゃ急かん　明日でんあさってでんいいき』『ほうな　ほんな帰り寄るわな　今日は久住まじじゃき　早ゥ帰っちくるき』『そうじゃ馬に頼んじょこうな』『又　おろいいこつゆう』

目の前にゃもう今市ん家が見えでーた。これかる久住まじゃだいたいデーラ道じゃき　馬もサッササッサち早う歩く。『諏訪も別れで　あん諏訪ん唄　ほらいいよったぬ唄いよ』『まぁ覚えょつたんな　ふんと油断も隙もなりゃせん』

★　諏訪の恋い歌　★

諏訪の出水の　せせらぎは
渡る瀬もある　淵もある
苦労承知の　私です
流す涙も　いつしか尽きて
肌を侘しく　夢も消えそな　七瀬川

そんな貴方に　いつからか
つのる思いが　切なくて
心燃やした　私です
寒くないかと　抱かれた肩に
花も咲きたい　欲が未練の　七瀬川

まこと捧げて　揺らす髪
越えた飛び橋　これからは
絆結んだ　私です
離さないよと　背中に書いた
さざめ信じて　巡る月日の　七瀬川

『五助さん　胴巻忘れちょるで』『え一俺がんな』『じゃこと　ほけーにゃだれも寄らんじゃつたき』『俺がんなこきい……ありゃねぇ』『ふんともう　久住じイランのな』『久住じゃ　銭もらうだけじゃき』　話しゅう聞いちょつた旅ん道連れ　『まぁほんと　呑気ちゆうか　おひとよち言うか　皆んないい人たちい　囲まれち幸せな馬子じゃなぁち感心しちしもぅた。

忘れたしも間違えたしも　わざわざ追いかけちくるる人もやっぱ　五助さんが好きじ好きじ　憎めんじ腹もたてんじ支えち守っちょるんじゃち　なんか別世界におるような　心ほのぼの豊かん気持ちに　なっちしもぅた。朝かる塩ぅ背中ぇイイツケラレチ　重いかったじゃろうに　ゆうまぁ文句も言わん馬も　影じゃクスクス笑いよるんか。『馬笑わんで』『いんにゃ笑うんで』　はたしてどちらがフントカな。

『笑うぐれーか　え一聞きてーえ　ほんな話そうかな　話す…離すに。組に入る…カタルち言う』　ちよっと後じな。

ここかる南にあたる上詰じゃ　１４５２年代にゃ刀剣ぬ作る場所があった。今かる９万年も昔ぃ阿蘇ん噴火　爆発じ流れ出た溶岩がこんあたりまじ　流れ着いて固まった歴史ん結果じゃち　思うごたる川底ん岩盤な　七瀬川や支流ん裏谷川や大田川に見らるる。

菊池軍が一の瀬じ大洪水による　敗退《１４８９》もそん原因の一つに　これがあるんかん知れん。そげか川、谷ぅ眺め山ん連なりに目を楽しませち　街道はあんまり起伏もねぇ道中。今時ならすぐ観光地ん目玉にでん　なりそうな場所が犯されんままあるなぁ　やっぱ地元んしたちん郷土愛が強かったんかん　そげな思いが胸に響くごたる。

工藤三助さんがん生涯は『不可能を可能にした男』とん言えそうじゃ。小柄じ頭がちっと大けな髭んねぇし。聡明精悍　数理ん能力は長けちょつた。故郷ん百姓が水に悩むぬ　見ちょれんじ川ん傍じ考えぅ　巡らせち奮起自力による測量　調査に没頭しち水路開発に終身　捧げた執念は宝物として現在も生かされちょる。

加藤清正がなしこげな田舎を　天草と変えち所望したかは　自分の故郷に近い思いもあったが　将来江戸との交流があると閃いた　そん夢をいち早く実現する意欲が　そうさせたのでんあろう。熊本かる鶴崎まじ３１里ん　中途が久住あたりになるき肥後と　豊後ん真ん中あたりん宿は両方が見渡せる場所でんあり　どっち歩いてんクンダリ。サァも一息じ今市久住ち歩くと　塩もぐあいゆう乾いちくれたきか　馬ん足取りも軽ぅなった。

諏訪ん名残りに包んじくれた　お茶ん香りが身に染みるハ　七瀬のせせらぎ　紅葉がチラホラ　ホイホイホイ。

●●●　方言説明　●●●

６５Ｐ　釣瓶…井戸水を汲む道具で水ばけつと　反対側に重りがついて反動で吊り上げる。天水…自然の雨や出水がたまっている水。ニッチモサッチモ…どうにもならない。チットデン…少しでも。エバ…蜘蛛の張った網の糸。こげん…こんな。チータ…ついた。

６６Ｐ　やんがち…やがて。こげん…こんな。チャント…きちんと。出かかった…出リそうになった。クルワルル…叱られる。そげんこつぅや…そんな事をですか。

６７Ｐ　あんころもち…餡こをつけた餅の串刺し。おけた…腹一杯に。ハズレん…端つこの。とっと…ほんとにもう。おろいいこつ…いじわるな言いぐさ。デーラ…たいらな。

６８Ｐ　イラン…不要で。馬も笑う…嬉しそうに上向いて口をあけ。

６９Ｐ　そげな…そんな。したしん…人たちの。こげな…こんな。クンダリ…下り里になる。ぐあゆう乾く…都合よく適当に乾いて。

清正ははじめ天草を貰える予定を　あえて豊後のうち久住野津原　鶴崎を希望した。間隔的には飛び地になるが山間へき地だけに通行が容易で得策でもあったよう。この自国領地を通る事で経費の削減と　自国領の発展にも大きな役割りを果たした。熊本⇨江戸間を約３３日で行き　帰路は中山道経由で３５日だったよう。また瀬戸内は舟便利用《自前の》経費や疲労の配分なども。領地の周辺が他国領だけにプライドもあって　脚光浴びるそんな恩恵的な発展にも　恵まれていたが　改易と共に細川領地となつた。

玉利のあずかり話ジャケット物語

『茶の実と…茶飲み』

仕事休みの一服に　香りもふくよかな茶は　心身の癒しにもなり清涼感は　爽やかな脳の刺激にも効果がありそう。

昔ん年貢にさえ『茶の実』は　一役買うぐれの大けな産物でんあった。馬子ん五助さんがん話しにも　ゆう出ちくるが年貢に『茶の実』を　出すんと錯覚起こした　代官も器量んよさと英知に　苦笑いしち『よかろう』ち　受け入れた。それによっち住民とん思いやりが　高ぅ評価されちそん後は施政がとてん順調じゃつたそうな。

人ん心ん暖かさが心を動かす　それによっち『お返し』ん感情も咲き　実ったことにも結びちーたもん。

もともと『くすり』としち　平安時代《８００》に中国かる入ったち言うが　最澄が種子を持ち戻った説も。９月から１１月にかけち開花するが　そん頃ん１０月にゃ種もチーチョル　不思議な姿に高貴ささえ描ける。栽培が多ぅなっちかるは　輸出品としてん格付けも高く　評価もされたごたる。

種を植える時に影を植えこむと　……と用心するんがいいち言いよった。アジアじの栽培がほとんどじゃつたが　こんところ世界の各地でん　品種や用途ごとに拡大しち　見らるるんも嬉しい予感もするけんど。昔かる人間の生活にゃもう欠かせんごたる飲み物ん　一つにまでなっちょる。

杉ん茂みん間に枝振りん　オカシュ延びた茶の木が　それも杉を切っち陽がさすと　株が張っち杉ん太るまじゃ　茶摘みじ生活も潤う。そん古文にゃ『大田ん銘茶』としち記録されちょつち語るのん　励みになっちょつたんじゃろう。

古老は大田地区一帯で茶の　栽培がされよった事ん　物語りち言う。中国から帰って植えたとすれば　仏教ルートも早ぅから伝わったんじゃあるまいか。生産しつつ杉が延びち用材じ切ったら突然　茶の木が元気ゆう延びる。杉ん下刈り期間は茶が頑張り　やがて又交替しち杉が背伸びする。

複合経営ん先端を行きよったと　見惚れた人がおったとすりゃ　自分方に戻るとトキノメニ　真似したかん知れんごたる作戦。杉が太ったもんじゃき　陽がコモレビになったら茶はイットキヨコウ。次ん機会まじ寝んねするかなぁ。今も岩陰どま茶がドコンココン　植えられちょるんがそん頃ん名残りか先人の知恵ん痕跡じゃろう。

茶の株がそんまま残った　寿命は５０年ぐれらしいき　種がそこに落ちたあと　杉ん滴を受けながら　自分たちん出番を楽しみに待っちょったんじゃろう。陽あたりがゆうじ水分があっち　乾燥んいい場所　霜も少のうじ霧があるんがいいとか。先人の住み着いたカラクリも　解るごたるなぁ。

先人に可愛いがられたお礼に　そん人たちを励ましよった茶。交替に何年かごとに葉を伸ばす　杉と旨くコンビネーションする　茶の底力にも脱帽するごたる。大きな岩もあり藪もソッココじゃが　旨く地の利を生かす繊細さは　並な人たちん策略じゃなかろうなぇ。

法師とヤカラん真剣勝負

法師ん姿と見ちかシノビ足じ　つけちょる影２つ。盗賊か月の明かりにそん影が　チラホラと法師ん後を追う。と法師が立ち止まった『私に何の用事なのか』　返事ものうじ双方

から襲いかかった。こんタダズマイじゃ人を困らせ盗みん輩を人は盗賊と呼び大変迷惑しよった。どこに居ても嫌われ行き場もねぇき　暮らしも不安定じ山中に　こもっち暮らす訳じゃつたんじゃろう。散々な目におうちヤンガチ反省したんか　自戒したんか法師ん論しによっち　自分たちん行状ん無駄さも思い当たり　人に再び迷惑かけんごつしたそうな。

そん証に周りん高い崖を切り落とし　素晴らしい高台を創り法師をそこに　住まいしてもらい崖下ん周り一帯は一族で守ったち言う。地区ん人たちと力も合わせ　見違えるごたる里づくりをしたそうな。遊牧民でんあったんか心入れ替えた見事な立ち直りゃ　山に木を中断にゃ茶を平坦な場にゃ畑作物も植えち　花咲き鳥鳴き香りのいい風は　どこからはこばれ　沢の音色も格別じゃつた。茶の香りも季節にゃきっと　ドッカカルあることじゃろう。

※★　ツララんよびかた　★※

大分かる竹田に向けち　挟間庄内湯布院ぐれと　大野ん北半分ぐれまじゃ　熊本境まじ『ツララ』ち　言う。
それかるダイタイ北ん分の　久住かる国東ぅ結ぶ線ぬ中心に⇨『モウガンコ』ち言う。
又　南ん臼杵　大野南ん半分アタリカル　南は『ヨーラク』ち　言うごたる。ヨーラクたぁ仏具ん一種ん呼び名。

ツララも滝に光っち出来たんかる　木戸口ん樋に出来たチンメーノ、軒先ブラサガッタ　のまじいろいろあるなぇ。

□□□　そん味そん喜び　□□□

はじめちん味　若い娘にしちみりゃ好きな　男とん祭り見物じ食べた『アンコロ』ん美味しさ　丸くて黒くて口にえーと入るぐれん　大きさ太さ固さ。はじめち食ぶる娘にしちみりゃ　好奇心と痴情ん想い。好きな人かる口に入れられち　目を閉じりゃ人間の成長期に　知っちょるごたってん　案外知らんことん多いいんも不思議。それもちっと年上んしかる食べさせち　もらう満喫ん喜び　やっぱ生きちょる人生ん　しあわせん始まりかん知れん。

『どげーうまかろうがえ』『うん　はじめち食べたきか何か　気持ちまじ上わずっち　モヤモヤするごたるに』夜更けん暗がりに聞こゆる　神楽太鼓ん音が軽やかんリズムに　乗せられたごつ娘ん喜びん時は　容赦のう流れち味が口の中を　交互に流れているんが脳裏に　夢まじ描いちょる。『まだ食べるかえ』『いいえもうよかろう　食べすぐると……』　口濁した乙女心は恥じらいもあったんか。

『田舎ん食いもんにしちゃウマカッタじゃろ』『とてん美味しかった』　笑顔がこぼれち恥もねぇような　横顔ん肌に涼しい風が心地好い。『見かけによらんウメーチゆう言うき』『ふんと……』純真なんじゃろう　ちっと早生なら変な憶測が脳を刺激するが。それがねぇきなんかサバサバしちょる。

もち米ダンゴに餡をつけた　じゃきアンコロち言うが誰がつけたんか愛らしい呼び名。ゆう祭りにゃ店じ売るき出会うが　丹精こめち作った食い物にゃ　どげー言うてん人ん心が愛情が　込められてんおるもんじゃき　舌に喉に心に残っちヒョイト祭りん　あん夜が想い出さるる。

◎◎◎　観音像と巡り合わせの人たち　◎◎◎

地域ん寄り合い場所でんあった　観音堂にゃご観音菩薩はじめ　回りに４仏も祀られちょる。地域が古くからあっただけに　木造づくりもかなり古い彫り物。地域集会場所が出来て庵になっちょるが　人ん訪れが少のぅなってん仏は仏としてん役割もあるもん。

旅んみすぼらしい僧が暗ぅなった　坂道をここまじ辿りちーた。あいにく百姓したちゃまだ　仕事かるは戻らないんか灯はない。通り合わせた小さな娘が　躾がよいんか僧を見ると頭ぅさげた。『旅の途中ですか』『ここまで来たのでこの庵に一夜お願いしよぅと』『せめてお茶でん』と急ぎ足で帰った娘。本当ならわが家に招いち　と乙女心に思うとは裏腹に　とてん『お接待』も出来るような　状態じゃねぇ暮らし。

急いで沸かしたんじゃろ　黒すすけた鉄瓶と急須　湯飲み茶碗ぬ盆に乗せて来た。『お茶でも召し上がって』　手を合わせると『勿体ないけど頂戴します』と　湯飲み茶碗を押しいただいて口に運んだ。『ご家族はまだで』『はい山の中じ炭ぅ焼いち今日は出しよるもんじ　少し遅ぅなるんじ』『そうですか無理な造作をかけました』『いいんです　だれにでも　お接待するごつ言われちょるき』

言葉すくなにそれだけ言うと　帰りたい気持ちと帰れない気持ちが　交差して娘の動きゅ止めてしもぅた。『少しお待ちください　何か食べ物を』　想いでえたんか急いで家に引き返すと　蒸した今朝んトイモん残りゅ　盆に乗せち来た。『これくれぇしか　お接待が出来んけど』　恐縮した娘。日暮れは早くあたりは　すっかり暗くなった。

奇特なお接待に僧は流れんばかりん　涙をえーと堪えち『何よりん接待です　一人で頂くとあんたの分が　無くなるでしょうから　一つだけ頂きます』『いいんですよ　親が帰ればなにか途中で食べ物　持って帰るじゃろうき』宛もない帰りの食べ物ん話　なんと優しい娘なのじゃろぅか。『ありがとう　これでもう十分です。と深深と頭を板張りにすりつけた。

しばらく話しているうちに　どうやら親たちも帰ったような足音。外にでた娘がぽっかり明るいのに　振り返ると堂の中が灯でんついている　そげな明るさを感じたんでした。『不思議』と思ったもんの　気のせいか足音の近づくのを　待っちょつた。

親が気がチイタようじ　『あら迎えに来たんな』『うんあんな旅の　お坊さんがここに泊まっちょるき　お茶を今持っちきたん』　『そりゃ　おりこうじゃつたな』『他にゃ何もねぇき今朝ん　トイモももって来た』『そうじゃつたん　ほんなこれ食べてもらおうか』『それなに』『炭をウウセに来たしがくれたんで　イナリスシ』『りゃーほんなあげたら　丁度よかったなぁ』

親子交えたささやかな夕食になった。旅の僧も身に染みいるほず感激したち　喜んじくれたき親たちも真剣嬉しいごたる。僧は座り直すと『私は早朝出立つしますが　お礼は出来ませんがお聞かせ願えれば　お聞きしておきたいのですが』　父親もじっと考えました　そしち『せめて水があったら　でも無理な話なんです』

旅の僧はかき消すようにいなくなったが　木戸口にチョロチョロ水の音。まさかのまさか切望の水が流れちょる。

『オトッタン木戸口水が　がいと流れよる』『なにやヤンナ寝とぼけたんじゃねぇか』　父親も目をこすりこすり出たら　ふんと昨日よりゃガイト流れよる。

それかりち言うもんにゃ水が　ゆう湧きでるごたるもんじ田んぼも　ちっとんずつ増えち来たち言う。あん旅ん坊さんもヒョイトスリャ　生仏じゃつたんじゃなかろうか。娘が心込めち接待するそん　優しい行い施しがこんだ　欲しい水ん報いになっち帰っち来たんかん知れん。今も特別ん年以外は水不足も　あんまりねえそうな。観音様と回る仏様がここにお接待ん　おウツリュくれたんかん知れん。

★　自然と人間の世の中

虫の声　花の美しさ　人間の心は楽しく　嬉しく揺れ動くのに　人をいじめる　こなす　はだくるんはなしじゃろう。みんな人間野一番　身近いとこりーおる　自分と同じ人間じゃーに。

昔かる唄にゃ祭り、魚、野菜、場所、川、山、雨、花、なんかがゆう出る。それだけ人間は周りんもんに　感謝し共に生きち行く心ん絆ぅ強めおぅた。じゃき物もでーじにしたもんじゃ。じゃが時にゃヤルセネェ　情けねぇ　切ねぇそん心ぅ唄に盛り込んだんも多い。

- ガンガン鳴くな今俺にゃ　ガンどころか利子もねぇ。
- 金持ちゃオデコが光りだし　貧乏人な頭が光りだす。
- そげー言うてん何もねぇど　よけりゃダンゴ汁でん食うちいけ。

哀愁もあるごたる　こげな唄も人生いつまでん　貧乏人じゃねぇ。富豪者でんいつまでん続くた限らんきな。

『ヒトギ餅』…火を遠くに払う願い込め　集まった皆んなじそりゅう念ずる。まいた餅は幸せと一緒に皆んなじ貰う《ひらう》。叫びあい押し合いへしあい　なりふり構わん気持ちゃ心が　一つになった証でんある。笑い声、喜びん声は　こん家ん栄ゆる心寄せおうた　宝ん種まきでんある。

『柱松』…盆の送り火ん１６日　先祖を見送っち名残り惜しむ灯。それぞれん家じすりゃ　貧富ん差もあるじゃろう。皆んなじ持ち寄りん『送り火』は　どげーかのぅ　ある時こげな話が出たもんじゃき　盆後ん一時ん場所づくりにもなった。小麦ガロ持ちよっち　竹ん割った芯に巻きつけたラッパに　鋸屑入れち辻ん広場に立てた。

自分かたんツボサキかる見るる　『肥松』に火をつけち若えしが　投げあぐるとドウカシタハズミ　シヤ入った。火が燃え移ると火の粉が散っち　ちっと涼しゅなった夜更けん辻　先祖に贈る真心ん送り火。それも地域ん皆んなん心くばりじ　いつまでん想いで多い余韻残しち。

あんしも　あん人も皆んな楽しゅ　しゃべりしながら見る故郷ん『柱松』は　どんくれー嬉しい事か。人ん真心こそ何にも勝る盆の供養でんあろう。豪華に飾るんもいいが　心が通い合う行事は素朴でん　有難い心込められた　盆の贈りものじゃろう。いつまでん火の粉が散る　辻ん柱松。

蓮んウテナじ話が弾んじょろう　話があるちゅう事ぁ心が潤うもん。過去を振り返り未来に希望　願いを込めち語るのん　意義かあるんじゃあるめーか。現世じ話せんじゃつたそりゅう楽しみながら話す　そこにゃ又夢ありロマンあり。盆なりゃこすん話題でんあろう。

⇨⇨⇨　方言説明　⇦⇦⇦

７２Ｐ　どしてん…どうしても。見つくろうち…うまい具合に調整して。そこじゃ…それなのです。ひかっと…突然思い付き。いんにゃ…否そうではなく。

７３Ｐ　ケックシャ…結構予想以上に。くれめーか…くださいませんか。ライシン…来年の。ツララ…凍った水が棒情になって下がる。

７４Ｐ　アンコロ…小さなダンゴに餡をつけ串指ししたもの。たべさせち…たべさせてもらい。どげー…どうです。ウマカッタ…美味しかった。早生…早熟な人。

７５Ｐ　仏ん役割…人の道を論す役目。お接待…報いを求めず施す。炭を焼いち…炭焼きの仕事。トイモ…甘藷芋。

７６Ｐ　チータ…着いた。イナリスシ…油揚げに包みこんだ食べもの。木戸口…屋敷入り口の手洗い場。

７７Ｐ　オトッタン…父親。ヤンナ…お前は。ガイト…沢山。ヒヨィトスリャ…もしかして。廻る…いっしょに。こなす…いじめる。はだくる…仲間はずれにする。じゃき…ですから。デーじ…大事に。ガンガン…うるさく。ガン…元で。オデコひかり…前頭が輝く。頭光り…苦労で頭髪が抜ける。

７８Ｐ　ヒトギ餅…新築建て前の祝い餅。どげーか…どうですか。小麦ガラ…小麦の収穫した後の麦から。ツボサキ…農家の庭先。シャ…突然予想外に。あんしも…あの人も。

五助さんが馬子仕事んなんめ　見たり聞いたり感じたりした話が　なかなか面白いち若いしがセツク。嫌ち言わんもんじゃき　話ん種ぅ捜す事もあるごたる。でん人間がおる以上は話しゃあるもん　そしちいつも心が通い合うき　夢も生まるる。

『松根油が国策に使われた』

五助さんが眠ったんと同じごつ　旅ん連れ添いも一眠りした時じゃつた。世の中まるじ飛び回るごつ　新しい時代に誘われちょつた。諏訪ん中心に城跡が苔むしち　古い松並木が鬱蒼とあったもんじゃき　マッタケが人ん心ぅ慰めよった。古い戦場かるこんだ新しい戦争に　物不足ぅ補う松根油を絞り出すち学生が勉強は二の次朝早ぅかる　山に上っち昨日仕掛けた　油受けに溜まった松ヤニゥ集めち回る。

松油ん取れんごたる老木は切り倒し　そん根を堀取っち運びでーち　釜じ蒸すと油が取れた。これが飛行機燃料ん補助役になりよった。老人子供や女たちは空腹ぅ　堪えあいながら集合したあとは　手わけしちこん山にも入っち来た。繁美城跡にゃわりかたゆう取れたき　皆んなん狙いは一緒じゃつた。

恥じらう年頃ん娘たちじさえ　モンペ姿と防空頭巾じ身固め怪我せんごつ　集めち回るが山ん中ん暑さ　すり傷かき傷にも苦労する。工場かる煙りが上がる　油ん匂いがそこらそんげに漂う異様さじゃつた。そしち戦争は負けち平和は甦った。今もあん城跡にゃ戦国時代の　亡くなった多くん魂が　なし人間は争い犠牲者が出るんかを　厳しく戒めちょるごたるが。

馬かる起こされち目が覚めた　五助さんと旅ん道つれんしも同じ　夢ぅ見たちタマガッチシモウタ。引き付けられた優しい心に　考えさせられたち言う。こげんこと何かもあるもんじゃち　顔見あわせち『あんまり欲張りすげたんじゃろう』　後悔もしたもんの　歴史にちょこっと出会うたんも　『いい土産話が出来た』ち。『でーぶん方言も上手になったなぁ』『五助さんのおかげで　またいつか連れのうち歩こうえな』『じゃなぁ元気しちょりよえ』　と　馬が『わしもおるで』ち言わんばかり嘶いちょる。

『味』　食べ物にゃ命ん元が　込められちょる。『いただきます』は　その物ん命をいただくこちなる。じゃき頂きますち自然に出るのも　そげな感謝ん気持ちがありゃこすん　言葉かん知れない。日本人の菜食は体質にオウチョルき　昔かるそれじ育ち生き長らえた。海ん物、土ん中ん物、田畑に出来る物、三昧揃ったきこす知らんナンメ　血となり肉になっちょる。

昔ん生活にゃ卵、牛乳、バナナなんか　チョツケマッケにゃ　食べられんじゃつた。病気しちエート食べたそげな　体験のしも多かろう。今は栄養んバランス　用材が入っちくる食生活ん改善じ　様変わりもしちきた。『オサイガネェニ』『ほんなイリコに醤油でんかけち　オサイにしなぁ』　こげなふうにいとも簡単に　話が出来たもんじゃ。

いりこだしん味噌汁　ノビルんはいった練り味噌　山芋んカゴがはいった炊き込み　キュウリにワカメン入った酢の物もう　これだけでん間に合う。ミョウガ、フキ、キジンソウ、サンショウ、ミツバ、食い延ばししよった時代にゃ　キラス見ると『飯泥棒』ち　ゆう言いよったもんじゃ。

米ちゃ文化１２年《１８１５》江戸大火　そん時一升が☞３９銭じゃつた。弘化２年《１８４５》米騒動があったがそん頃は５０銭。明治４２年《１９０９》に米検査制度になり４円。大正８年に戦争米騒動じ１０円６０銭。昭和４５年に減反奨励となり《１９７０》８２１８円じゃつた。米をあんまり粗末にすりゃ　悪いち思うが何ちゅうてん　命ん元ち思うがなえ。※　きじんそう⇨ユキノシタ。５０銭⇨一円の半分じ　昭和初期頃は　宇曾山参りに子どもは５銭もらゃいいほう。帰りん土産を買うに　あれこれみながらビラビラと。

横道《ヨコドウ》まじ来ると　もう庭先まじ帰ったんも同じこと。道傍ん柔らけぇ草に口ぅサイデータ　馬を見ると『お前もヒモジイカ』　五助さんも一服しゅうかち腰ぅ下ろした。影が出来ち岩ん割れ目かる　湧水もチヨロリと出よるき　側に垂れ下がっちょるカンカラん　葉を一枚ひきムシルとクルット曲げち　水受けた。

つるっとした時じゃつたヒョイト　夢に出ち来たエエラシイ娘ん姿。『私ニラ娘よ　びづかったじゃろうき　帰ったらニラ雑炊食ぶると元気か出るよ』　貧乏馬子じゃきそりゃゆう食うが　夢じそれも愛らしい娘に言わるりゃ　それもいいぐれか。こいさもそりするか。

味噌じたてん冷や飯ん残りぅサゼクウジ　たぎりでぇたらニラを刻んで入れ　ちょいと蓋しち火を止むりゃ出来あがり。長ぅ煮ると味が落つるきサット　熱いぬフーフー口ぅヤケハトせんごつな。元は中国かる来たがユリ科ん仲間。どきでん出来るし切りゃすぐ　もう明日ん朝にゃ伸ぶき一年が中あるんで。切ったあと灰をやっちょきぁゆう効く。精力剤にでんなるし五助さんのごつ　ダッタ時ぁ効果がすぐ解るんで。

『ニラ雑炊』はあり合わせん　具材かありゃ手っ取り早う出来る。そりモチキチ消化もいいと来ちょる。『他にもあるなら教えて』　五助さんな寝言いいよる。ニラ娘もそん声が優しいもんじやき　『いいで知っちょるんを全部教ゆうかな』『おおきに』　夢ん中じ五助さんなニラ娘とどうやら話があうごたる。馬ぁショワネェンカのぅふんと。しょわねぇごたる　慣れた道じホラケ落つる心配はねえじゃろう。そり一腹がオケタンか影べらじ　居眠りぅしよる。こりゃまぁひとめんのぅ。

『ニラ雑炊』　手っとり早い食事にゃ　あり合わせん食材じ作るるこんニラ雑炊。だしゃやっぱイリコが適役　作ろうち思うた時にゃ前もっち　イリコを水に入れちょきゃ結構だしが取るる。ニラは一番ドベに入ればんで　野菜は早めに入れち煮ると野菜独特ん　味が滲み出ちくるるき　柔らしゅなったら冷や飯《炊飯器ん飯でんいい》ぅ　これに入るる。

始めかる米も炊くんなら　炊いた後じすぐ前言うたごつしち炊く。これじ五助さんじゃねえけんど　ドベにニラを切りパラパラ撒き入れたら　ちょいと蓋しち火を止めて。茶碗ぬ並べよりゃもう蒸れち　一丁あがりになる。つぐ時にゃかき混ぜんと『俺なぁニラが少ねぇ』ち　文句が出るかんな。

『ニラん油炒め』　根元ん固ぇところが歯ごたえがある。油じチョコット炒めち　醤油さしてんいいが　味噌和えにしたんも乙な味がする。好き好みがあるき好きな方法じ　炒め過ぐるとヘニァーとなるき　こりゃちょういと品が悪いわな　やっぱ歯ごたえんあるんが　あん先まじ効くんじゃねぇ。

にやっと笑ろうた五助さんぬ見た　近所ん娘がジロット見よる。『どしたんか』『いんげ　何でんねぇ……』　何か言いたげな言葉尻ぅ濁したんも　年頃じゃのうちゃんと解ったんかん知れん。タシカ始めは薬じゃつたそうなが　強壮材とん言われたごたるき　理屈もゆう解るし第一すぐ　育つなんかとてんもう並みん野菜じゃねぇ。

『ニラ和え』　柔らしい葉の分を茹でち　豆腐にまめすとニラ和えに姿ぅ変ゆる。味噌味が引き立て役じ　ゴマん煎ったぬ潰しちマブスと　上品な都料理になっちくるる。ゴマん香りがフクヨカナ　それに青と白ん取り合わせが　にくい色じ目も楽しませちくれち　今日は何の祝いかえ。

街道筋じ昼寝しちょるんぬ見ち　通りがかりん顔なじみんしが声ぅかけた。『五助さん馬おらんで』　たまがった拍子起き上がった五助さん　『何えどげしたえ』　あたりゅ見まえーち草んヤシボ食いしよる　馬もおかしいんか頭ぅあぐると　大けな欠伸びゅした。

『悪いやっちゃのう　お前か』『お前じゃねえで　馬はどげしたんな』『馬や　馬はそきおるじゃねえか』『どきえ』あんまり言うもんじゃき　自分にゃ馬が　おるんが解るけんど　ひょいとすりゃ目が悪ぅなったんかち　当たりぅ見回ぇた。『解りゃいいんじゃ』『おろいいやつじゃのぅ　ふんとお前こす何しか』

腰をおろすと五助さんがん顔を　じっと見つめち『いい夢見よったんじゃろう　ヨダレ垂れ流しち　ふんと蠅がムシリヨッタデ』『又トワズんかお言う』　馬も腹がおけたんか『いぬるで』ち言いたげな顔。『いんにゃいい娘に出会うちの』『へーどこんしじゃつたんな』『それがお前タマガンナや　ニラ娘ち言うんじゃ』『へーニラ娘え』

『そりゃーええらしい娘じのぅ　ニラん話がやっぱニラ娘らしゅう　詳しい話しゅしちくれたんど』『ふーん　五助さんが色気ぅ出すき　化かされたじゃねぇ』『いんにゃそげんもんじゃなかったど』　真面目に話す五助さんに　とうとう釣りこまれち話が長ぅなっちしもうた。

『それじ色白じゃろうな』『そうとん色白ん面長ん笑顔がそりゃーええらしい　はきはきした話上手じ　やっぱ話しゃ聞くもんじゃのぅ』　『何の話しゅしたんかえ』『それがのニラん料理ん仕方じ』『ありゃ五助さんに苦手じゃなぁ』『そりゃぁ言うなちゃ』『ご免ご免』　二人は大笑い。

五助さんも相手がよかったきか　何かニラが好きいなったごたる。中国かる入ったち言う食材は　まこち元気ん元になるもんが多い。修行に行った高僧たちん　精進料理になっちよったんぬ　もち戻ったんが多いがそれも　自分の国んこつ思う情愛ん現れかん知れん。

ニラ娘はどこかる来たんか　夢ん中じゃき解らんじゃつたが　五助さんの心に溶けこんだのん　何か因縁があるんかん知れん。『それじ話しゃそんくれな』『いんぎゃ　ニラを使うた食い物ぁまぁいろいろあっち』『ふんなそん中かる』せき立つるき帰らにゃち　馬も急き立つるんを又　腰ぅ据えたもんじゃき馬ん前かきが始まった。

『ニラ火焼き』　こりゃぁ簡単じゃきの　ちょこっと話そうかのう。小麦粉をチット塩入れち水じこぬる　耳たぶぐれん柔らこしたに　ニラんこま切りしたぬ混ぜ合わせち　団子にしち手の平じ餅ん形に丸むる。黄色に青ん彩りがなんとんいえん。鍋にちょこっと油ひくと　ぺたり並べちコンガリに焼けたら　裏返しちキツネ色が出来あがり。こね込む時ちっと黒砂糖入れちょきゃ　焼くる途中じ溶けち風味んいい　餅火焼きが一丁上がりになっちくる。

『卵とじ』　どこでん誰でん作れるる逸品。吸い物　汁物卵ん黄色と青いニラ　隠し味んミツバ　素朴な味は咄嗟ん客にでん　すぐ間に合う田舎料理の代表格。そこんしの心が込められちょるき。それに卵がありゃニラはつぼさき　いつでの伸びよるき便利コン上なしじゃ。切った後は灰をふりかけちょきゃ　次ん朝にゃもう背伸びしちょる。

『どげーかニラん食いかたチッタ解ったか』『ゆう解ったきぼちぼち帰るかなぁ』『そうじゃつた　帰らにゃのや』『もうふんと』

『ニラん酢味噌和え』　サット茹でたニラを　酢味噌で和えちゴマをふりかける。味噌味が独特んニラん持ち味ぅ　醸しでえちくるる。

『ニラ醤油』　生ニラを醤油につけくうじ　夏場ん冷てぇ茹でたウドンの　『だし汁』に使うと　さっぱりした喉ごしがウドンの　妙味を引き立てち　ニラん真髄を発揮しちくるる。口当たりん味は好みじ　薄むるなぁ勿論の事じゃが。

ニラはユリ科ん多年草。中国が原産地じゃが　江戸期間にゃもう入っちょつたち言う。葉菜としち作られ　強壮剤としてん重宝がられちょつた。葉を刈るとすぐのぶき　畑ん端っこでん場所はあんまりいらん。年中青葉があっち切ったあとは　灰どもかけちょきゃ　すぐ時のめに太る。

独特ん香りがあるけんど　それが又ゆう効くごたる匂いじ別名　『チンタツグサ』とん言う。硫化アリルじ消化にいい。火を通し過ぐると味が落つるき　料理ん時にゃシマイに入れち　仕上ぐるんがいいんじゃねぇ。『わしゃヤエーンガいいき』『そうな　ふんな早うかる入れてんいいんで』　花も六片白色ん小花ぉつけちょるき　ホーラええらしいんで。

日頃おとなしかった近所ん　男ん子が近頃おとろしゅ　元気がいいもんじゃき　娘どま持っちょる親たち心配。五助さんもそりゅ聞いち気になるき　早起きしちヒョカット見ると　そん男ん子が草きり行きよる。『若いに感心』ち思ぅち　何の気なし見よったら隣ん畑んニラぅ　切りよるじゃねぇな。『ははぁ毎朝こりゅう食いよるんか』　元気のいいんが読めたど。そこんしゃそげんこたぁ知らんじ　味噌汁ん具にニラぅ取り来た。時のめに太ったき若いしが　切ったな解らんままじゃつたごたる。『そりしてんまぁ……』そげー早ぅ太るんと。

※　方言説明

８２Ｐ　庭先まじ…家の周辺すぐ側まで。サイデーチ…差しだして。カンカラ…弦性の植物の葉。ひきむしる…無理やりに取る。つるっと…ほんの少し寝むり。ヒョイト…ひょつと。ひじかったじゃろうき…疲れたでしょうから。そりゅう…それを。こいさも…今晩も。サゼクウジ…まとめて入れて。ヤケハト…火傷して。どきでん…どこにでも。ダッタ…疲れた。モチキチ…持参して。ショワネェンカ…大丈夫なのか。ふんと…本当に。ホラケおつる…誤って落ちる。

８３Ｐ　ドベ…最後。じゃねぇけんど…では無いですが。ヘニャツト…しなびる。どしたんか…どうしたの。いんげ…いいえ。

８４Ｐ　おらんで…居ませんよ。ヤシボ食い…行儀の悪い食べかた。おろいい…いじわる。ムシリヨッタ…たかっていた。トワズ…冗談。いぬるで…帰ります。タマガンナヤ…驚かないように。いんにゃ…いいえ。

８５Ｐ　そんくれな…それくらい。いんぎゃ…いいえ。そこんしの…そこの家の。

８６Ｐ　時のめ…あっと思う間。チンタツグサ…男性性器か勃起するたとえ。ヒョカット…急に。よめた…解った。

古い生活用語であった方言は　言わば言葉の代わりをした心の表現でもあり底には人間の　情愛が加味されてもいる。心が豊かでもあった時代は　物には恵まれなくてもそれを　カバーするだけの優しさが培われてもいた。聞いているとまるで喧嘩じゃないか　と心配するような言葉のやりとり。でも相手に近づきたい思惑もあるので　自然荒々しい言葉になるが　裏を返すと自分の存在を見せる　人生の摂理かも知れません。

『フツ餅』『フツ団子』

春先かる新しい芽をでーたフツ　早かりゃ春ん彼岸にゃもうつき餅ぃ　入れられちょる。青さもあるけんど　あん独特ん香りがもうたまらん。摘んだ若葉を美しゅう洗い　サット茹がくとアクが取るる。フツ餅タァ『ヨモギ餅』ん事。フツは漢方薬でんあるち言わるる。

ゆう子供が飛びまわっち　ワヤクしよると怪我ぅする。『どぅ見せちみよ　擦りむいたんか　よしフツ揉んじつけちょきゃじき治る』　そこらそんげん美しいフツ　ヒキムシッチ揉むと青グロい汁が出る。傷口ぅ水じ洗うとそん場所に　塗つくる。殺菌作用があっち消毒も出来た。

こげん薬にんなるフツじゃき　餅にしち食うてんそりゃウメェ。ソリーいつまでん固ぅならんき　重宝でんある。臼じつく時蒸したモチゴミぅ移す前に　臼の中ぇ入れち杵じつくと繊維ん　こんめー軸が切れち餅ぃすんなり　馴染みくうじくるる。『ほら出来たど　仏様にゃ誰があぐるんか』　『うっとうで』『俺ど』センショ張りよる。供えた者が先貰い出すきでんある。手塩皿は乗せたフツ餅ん香り　座じゅうに漂うち仏壇に運ばるると　『さぁいいど手を洗うたか』『ゆうべ洗ったき』。

フツ団子は米の粉を蒸しちつくったもん。団子生地にフツぅこねくうじ　団子に作ったもんぬセイロじ蒸す。座布団にカンカラん葉、トーキビん葉を敷く。座りがいいし見た目にんいいが　こげな敷きもんにも殺菌効果がある。昔かるん生活ん知恵じゃろうが　フツん匂いといい敷もんの　香りといい欠かせん食い物の風物詩じゃろう。

フツにゃこんほかにも　体を暖め、止血作用やらタンニン成分が　炎症を静める　湿疹にも効果があるち言う。

落としダンゴ汁…『蕎麦粉』

落としダンゴち言ゃ　手つとり早ぅじ栄養も　消化もゆうじ時間のねぇ時ぁ何よりん　食べもんじゃき重宝がられち見た目にゃ『貧乏人』ち　言わるりゃせんかち　見栄ぅ張るしもおるが　そげんこたぁねぇ。生活ん知恵かん知れん。ち思うがまぁとにかく　いっぺん食べち見ちゃどげーな。

蕎麦ん粉をこぬる時ぁ　水ぅチットンズツ入れんと　柔らしゅなり過ぐるごたる。やや固めんごたるが　コネよると丁度いいあんべーになるき　世の中ゆうしたもん。いりこダシが煮たったら　杓子じ適当ん大きさに　すくい取ると一口大に　取るるきソンママ煮え湯に　手ヤオウ入るる。慌てまくって投げこむごつ　入るるとチャポンち　タギリ湯んオウツリが　跳ね返るかん知れんき　気をつけにゃオオゴツ　作りたつるこちなる。ゆうヤケハトしよるわな。

あり合わせん野菜でんいいし　ゴボウどま入るんなら　早目に入れちょき　煮ゆるしゴボウんだしもでち　そりゃまたひと味うめえんが　出来あがる。丁寧に混ぜち浮かんだら蕎麦粉は煮えちょる。あんまり当たりさがすと　蕎麦粉はチットホラケーキ　ばらばらにでんなりゃ　品が悪いき上品にしてな。

独特ん香りがあるき　香りん強いミツバ、セリ、ニラどま好き好きがあるけんど　両方が味ぅ引き立てあう　まこち妙なる旨味が出来上がるで。粘りん少ねえぬ物足らのなら　中に小麦粉を入れたり　山芋ぅ前もっち　擦りくぅじょくとふうゆう粘りも　加勢した味に仕上がる。蕎麦にうっち喉越しゅ　楽しむ人が多いが　ダンゴにしち煮込んだぬ　食べるんも又オツなもんじゃが。

落としダンゴ…『小麦粉』

手っとり早えんが小麦粉んダンゴ　『だんご汁』たぁ違うけんど　腹に入っちしまゃ同じ事。でんそれまでん見た目に写る　視覚、そしち野菜とん　コンビネーションが　何とん言えん取り合わせでんある。昔かる百姓ん夕飯ちまじ　言うのが通例じゃつたが　どうしてどうして　食材は選ばんは調理も気ままに出来る　そげんこつぅ思い合すりゃ　誠ちゆう考えた代用食。それに消化がいい　簡単に出来る。

戦中は米がのうじ農家でん　これじゃつたもんじゃ。がそれでんヒシヌル人間も　病気なったしも　おらんじゃつた。戦地に出た兵隊でん　麦飯、ダンゴ汁、んイノチキん　した者ぁ脚気にもならんし　何でん食うてん病気もせんじゃつた。いかに日本人に合うかが　証されちょるる

作り方は　蕎麦粉よりゃ　ちった柔らかでん　粘りがあるき心配ねぇ。入れかたも難かしゅねぇ　ほたりこんで次々に煮込む。野菜も文句は一つも言わん　おりこうじ味も万人に好まれ　だんごを伸ばしたんが　入ると　ダンゴ汁になり。そんダンゴを伸ばして茹でて　水洗いせんじ乾かし　きな粉つけたら『やせうま』。

だんごを餅にしち蒸すと『蒸し餅』　伸ばして広げ適当な幅太さに切ると『うどん』にもなる。ただ『やせうま』　にしてん『うどん』　にしてん塩加減、寝せた時間なんかじちっとノビグアイが　違ぅちくるかん知れん。『だんご』を伸ばしち小豆と煮ると　『ぜんざい』『しる粉』も出来る。

小麦粉といい　蕎麦粉といい　使い方じ妙味ん食べ方にもなる　麺の世界にゃ昔かるん　生活ん知恵が隠されちょる。

野津原方言單語

ひろがり

※※※　方言のちらばり　※※※

古くからん生活用語でんあった　方言な時代ん移り変わりじそん数も　ガイトゥになった。そん中でん各地とん共通するんもあっち何か　親近感も持たるる。

肥後領でんあり関西、江戸に最短距離でんあったきか　京や浪花ん言葉と類似するんも　多いもんじゃき参勤交代やら商いんしたちが持ち込み　交流したんかん知れない。

★　関西京なんかとん共通言葉

コシイ……欲張り、ずる賢い。オーキニ……ありがとう。
ズリー……要領者、ずる賢い。キバル……頑張る、精出す。
タボウ……節約、緊縮。ハタカル…開く、ひろげる。
チンメー……小さい、こまかい。ホメク……むし暑い、湿気。
ナエル……体調不良に。ヨダキー……大義で、嫌気。
アゴタン……口うるさい。オツクリ……刺身の食材。
オチョクル……たわむれる。ヒネル……つねる。
オトンボ……終わりの子ども。オトコシ……男性の呼び名。
テカケ…正常外思い通じる異性。ドダイ……予想以上の。
インデ……帰って。イヌル……帰ります。
ウツツガッツ……やっとの境遇。ガナ……これだけ、価値観。
エブ……荷札、荷物の目印。チギル……手で取る収穫。
トット……なんともはや。ニジクル…ぬりつけるよう。
ネンシャ……几帳面な。

方言がとりもつ縁じ　思わぬ出来事もあるもんじ　故郷ん手型とんいわれちょる。それだけ離れち解る　故郷んよさでんあるごたる。ほんな方言を拾って　『い』のメかるな。

い　イメーナッチ……今になってから。あんなに約束したのに。
イメジャキユウガ……今だから言うけれど、本当の事は。
イメナッタキ……こんな事になったので、解っていたのに。
イモジンセンタク……腰巻の洗たくを、女性下着の洗濯。
イモデンクイナ…今でもよいから食べて、遠慮なく食べて。
イモマジウルンカ……芋まで売らねばならない、そこまで。
イモタァアルクカ……妹は結婚するようで、おめでとう。
イモジヤキグルシ……着付けないと女性の下着、慣れれば。
イモンツルキリ…甘藷の蔓先をきって収穫準備、秋の季節。
イモジャハグッチ…腰巻をはぐって失礼、魅力があるのか。

イヤデン…嫌いでも、嫌いと言うけれど真実は、意味慎重。
イヤジャロガ……嫌いではないの、苦手なら遠慮なく。
イヤイイカブル…言うとつい口滑らせて、失言が多い性格。
イヤチャイワン……嫌とは言わないけれど、断りも難儀。
イヤガルケンド…嫌と言うけれども本当は、不思議な異性。
イヤタイワン……嫌いとは言わないけれど、好きでもない。
イヤトンイウン…嫌いとは言わない、でも好きでもないが。
イヤナリャイイド……嫌いならよいから、無理に好きには。
イヤイヤジャケンド……気乗りしないのに、無理な親切は。
イヤタスキジャ……嫌とは好きの証拠。わざと嫌いと言う。

イヤユウタジ……言えばうっかり誤解も招く、発言注意も。
イヤイイソブル……言えば言い損なう、唇寒しの心境に。
イヤイヤユウクシ……嫌とよく言うけれど真実は裏腹に。
イユゥタテルル…家をたてれる頑張り屋、努力が報いられ。
イユタナワスルンナ……空手形、言った事は忘れないよう。
イユミタカリャ…家を見たいなら、家見はいつでも気楽に。
イヨイヨニナリャ……思い切りは覚悟、いつでも準備ＯＫ。
イヨリャコス……言えば実行する、言うたら責任も持って。
イヨイヨントキニャ…その場になれば心配なく、決断には。

58

い　イヨセンクル…言うたとおもったらすぐ来る、言えば来る。
イヨルソバカル……言っている側から発言、すぐ口を出す。
イヨッタケンド……言っていたけれど、聞いた事はあるが。
イヨルネキジ…言っている側ですぐ、話を取って発言する。
イラオーカ…あたって見ようか、触って見たらどう、確認。
イラレンコタネエ…入られない事はない、居られない事は。
イランチャイワン…いらないとは言わない、無用でもない。
イランモンガイル……無用でも役立つ時がある、予想外に。
イランジヨケレ…無用でよかったが、入らなくてよかった。
イラブケーチ……騙して、ごまかして、悪知恵で損を。

イラガササッタ……魚のうろこが刺さる、ウロコの被害に。
イランモンニャ……無用の物には、必要ない者には早めに。
イラオドチ……あたりまわして、感触を確かめて見る。
イラ……魚のうろこ、そのような状態に皮膚がなった様。
イラワニャ……あたらないと、おセッカイをしないと。
イラウナ…あたらないように、そっとしておく、安定させ。
イランショワ……世話やきに迷惑、他人の口出し、不必要。
イランモンナネェ…必要ないものはない、世の中持ちつで。
イランモンニャ……無用なものには、片ずけておくと便利。
イラルリャ……入られるなら、入られない時は待つ心も。

イリメーガ……無用でしょう、いらないのでは、無駄な物。
イリメータオムータ…無用と思っていても、いつか必要な。
イリクンジョル……雑多になった場所、迷路のような状態。
イリモセンニ……無用なのに、必要ないのに、始末も必要。
イリモセンキ……無用であるが、さて捨てるとなれば。
イリュウチオムウ…入れようと思っている、入れておけば。
イリカカッチ……入りかかっている、入る予定だろう。
イリクウダ……入りこんだ場所、複雑な地形、難儀な場所。
イリカケチャ……入りかけては思案している、落ち着かぬ。

65

い　イリャイッタジ…使えば使うたので、必要と思うがそれも。
イリカクリャ……入りかけると、入ってよいものか思案も。
イリデン……入るのも、煎るのも、入って行くことも。
イルモンニャ……欲しいものには、入る者には、必要なら。
イルショワ…必要な世話は、用事のある世話は、世話好き。
イルンナラ……入るのなら、必要なら、欲しいものなら。
イルゴタリャ…いりますなら、必要なら、欲しいようなら。
イルカン……必要かも、居るかも、煎るかも、欲しいかも。
イルキーノ……必要ですから、欲しいので、いりますよ。
イルカンシレンガ…必要と思います、欲しいかも知れない。

イルイル……居ました、真剣欲しいので、必要ですので。
イル…居ます、いります、必要です。欲しいものですから。
イルキコス…必要ですからこそ、煎るから役立つ、欲しい。
イルジャロウ…いると思います、欲しいと、必要ですから。
イルンジャネェ…必要と思うが、欲しいと思う、居ますよ。
イレチャロウ…入れてあげよう、入れましょう、入れます。
イレクッチョル……ごまかして、悪質ないたずら、詐欺。
イレラレンチ……入れられません、入ったらいけない。
イレラリュウカ……入れられないです、入れられませんか。
イレサシー…入れさせて、入れてもいいでしょう、競込み。

イレダシュハヨウ……出し入れを敏速に、動作を早くする。
イレタナイイガ……入れたのはよいが、無理入れは結果が。
イレテンイイ……入れてもようが、いれるのは構わない。
イレチョキャ……入れておけば、格納する、納めておく。
イレクルキ……誤魔化すから、悪趣味の性格、詐欺。
イリソコネチ…入り間違えて、場所を間違えて、方向音痴。
イローチ……あたり回して、無理じいないたずら、あたる。
イロメキタッチ……気持ちが高ぶって、以上に興奮して。
イロワンウチニャ…あたらないうちには、そっとしておく。

29

い　イモジ…一般に腰巻ち言うが最近じゃもう珍しい存在。
　　昔ん武士ん裃に相当する　女性着物じゃつた。
江戸期間頃まじゃ肌着ん一つとしち利用。民間じゃ女児が１３歳になった時　母方から白や赤ん木綿布が贈られち　『ゆもじ祝い』『腰巻祝い』ん　行事がされよった。イモジ、おこし、腰巻、なんかん呼びかたがあっち男ん褌、へこ、に相対する下着になる。

イル…上や続く言葉なんかによっち　意味が変わっちくる方言じ　イリメー、イラルル、イッテン、イルル、イリカケタ、イルモンカ、イル、なんかは『入る』こちー関わるが

イリヨル、イッテン、イルルカ、イル、イルモンカ、イレ、なんかは『煎る』に関わる。

イル、イルカン、イルジャロウ、イルガエ、なんかわ『居る』に関わるごたる。

イロチョウグ…色絵の具、色のついたクレオン、色鉛筆。
イロメキヤガッチ……急にそわそわして、興奮気味に。
イロミュウアゲタ…血の気高ぶって、顔色が赤くなって。
イロウドチ……あたりたがって、相手を誘導して、世話。
イロクトイトナル…乾くと痛みが増す、干上がると痛み。
イロウタネキ……あたり回した側、おせっかいする側で。
イロカニャ…乾かないと、干上がらないと、乾燥すれば。
イロメガイイ……顔色がよい、血色がよくて、健康色。
イロチョキャヨロコブ…あたっていれば喜ぶ、愛撫歓喜。
イロイタキ……乾いたから、干上がったから、乾燥した。
イロイロアッチ……問題がありすぎて、生きていれば。

27

い　イロチャレ……あたってあげたら、あたってあげなさい。
イロイロユウテン……言うてみたとて、文句はあるもの。
イワンデン…言わなくて、言わぬが花もある。不言実行。
イワルルマイ……言われるままに、聞く勇気も必要。
イワンカ…言わないですか、発言しては、言うべき事は。
イワレニャ……言われないなら、言わないのがよい時も。
イワレチミリャ…言われて見て真実も、意見も聞くもの。
イワンマジモ……言わなくても、ひかえておくのも。
イワルルネキ…言われる側で、聞く勇気と意見は正しく。
イワスリャ……言わせておけば、意見を聞く事も大事。

イワセンゴツ……言わせないように、無駄口は信頼を。
イワンコッチャ…言わない方が得策、言い過ぎには用心。
イワルルウチガ……苦言も味方、言われるのも得になる。
イワルリャコス……言ってくれるから、危険寸前に防御。
イワルンナ……言われるのは、言ってくれるからこそ。
インダンカ……帰ったのか、帰ったようで、早めに帰る。
インジシモゥタ……帰ってしまった、遂に帰った、帰る。
インデンシカタネェ……帰っても仕方ない、帰る理由も。
インサタデケタ…印刷は出来たの、印刷完了、印刷終了。
インカンデン……印鑑でも、押印でも、書類の捺印。

インナンナ…入りなさんな、帰りなさんな、帰らないで。
インジョツチコス……帰ってこそ、かえったから無難に。
インダモンナオウナ……帰ったのなら追わなくても。
インダナソンスル……帰ったら損するのに、慌て損。
インゲットナ……嫌ですよ、いいえとんでもない、嫌い。
インヌンナカッテ……帰るのは勝手、気ままな性格。
インネタイワン……嫌とは言わない、嫌いとは言えない。
インノウアレモ…いりますかあれも、必要ですかあの物。
インメーチオモウ…帰りまいと思う、一緒に居ますから。

い　イローチシモゥタ…あたってもらった、相手してもらった。
イロドチサゲータ……入りたいと捜した、入り口を捜した。
イロタナネェド……あたったのはないよ、狙いは外れた。
イロリャヌキー……囲炉裏側温かい、囲炉裏は冬の天国。
イロバナシュ……艶かしい話が、情愛話に花が咲いちょる。
イロメキャシメタ…弾む状態なら心配なし、乗り気になる。
イロイロユウナ…口数が多いから、話し上手も困ったもの。
イロゴタアチシィ……仕事先してよ、肝心の仕事は優先に。
イロカンゴツ……干上がらないように、乾きすぎに用心を。

う　ウアミチャ……上を見ては、意見があっても目上の人には。
ウアズミ……澄ました上水、沈殿した上の部分の水など。
ウアニデン……荷物の上に追加する物、余分に運べる知恵。
ウアニガモウケ……余分に運べる考え、予定以上の収入に。
ウアシンド…散髪する、髪を上品にする。調髪してもらう。
ウアキャワリィ…法度な行いは禁止、目移りが思わぬ事に。
ウアソモミケセ…噂は早めにきちんと、火の気のない所に。
ウアチスワレ……上座にすわりなさい。上席に座って。
ウアッツラ……うわべだけの見せかけ、見かけはよいが。
ウアテカルクンダリ…上座から下手を見下す、常識はずれ。

ウアベンジョウ……うわべだけは、中身が主な人生でも。
ウアミュツコウチ…上目使いで合図する、緊急用事の連絡。
ウイテンショワネェ……浮いていても大丈夫、危険はない。
ウイチョリャ……浮いていれば、浮いていればこそ。
ウイーヤ…植えなさい、植えたがよいのでは、植える適期。
ウイーチュウタン……植えなさいと言うたの、植える連絡。
ウイチーチ…植えておけば、植えておいて、植えたがよい。
ウイチョンナ……浮いているのは、浮き浮きして大丈夫か。
ウイシチー…捨てなさい、すててもよいから、捨てて整理。
ウイミチツヅ……上向いてはけない、上では自分に被害。

う　ウイタンナトレ……浮いたは取る、ううういたのは駄目な種。
ウイチョツテン……浮いていても、浮いても役立つ事も。
ウイムキャメニスボ…上向くと目にゴミが入る、防塵予防。
ウイチミリャ……浮いていれば、浮いたのは不良種子かも。
ウイタナトラニャ…浮いた分は捨てるがよい、浮種は不良。
ウイテンシズデン……浮いても沈んでも、よくここまで。
ウイチョキャイイ……浮いていれば助かる、沈着な動作を。
ウイツギャモウケ……植え継ぎは儲けの分、余分に植えた。
ウイノセチコス…上に乗せた荷物は儲けの分、過分な収入。
ウイニャオトスナ…上の荷物が落ちないように、上荷注意。

ウイノッタカ……上に乗ったですか、しっかりつかまって。
ウウチキタ…追いかけて来た、遂に追いついた、追いかけ。
ウウテン……追っても、追い払っても、執拗についてくる。
ウウトキャ…追う時は、追いかける時は慎重に、追っ掛け。
ウウゴツ…大事に、予想以上に大きくなって、大丈夫かな。
ウウニー…追いかけるのに、追うのに、大きな荷物になる。
ウウチャラン…追うてあげない、追っ掛けない、追跡中止。
ウウバモン……大場物、大きすぎる荷物、見かけの大きな。
ウウモン…大物、大きな荷物、度胸のよう人間、つわもの。
ウウベコ……大きな褌、大きな男性の下着、庶民の大べこ。

方言のひろがり『い⇨ア』からはじまり　ここまじじ総計が６０６９語になりました。生活用語でんコゲナふうに　使いながらそん中身にゃ　人ん心ぅで一じにする　こまけぇ心くばりが言葉をよきぃ　広めちょるんかん知れん。文字が書けんでん情愛があったき　気持ちが心が通じおうた　そりゃあ宝物かん知れん方言。『う⇨ウ』まじ来たき　こん続きぁ又続編№１４に載せます。ご愛読誠にありがとうございます。ご愛読くださる皆様に支えられち　方言集も続いています。

あとがき

続編№１３号に盛り込んだ　内容には子供向けの『方言読み語り聞かせ』５編。『女性の底力』には若い人　お年寄りの人が登場しました。『宝の玉手箱』では　前半に昭和前半を後半には　ふるさとに伝わる有形無形の　文化財の紹介。

五助さんの『ちょつと一服』に　顔を出す面白話。方言単語のひろがり面は　『い…チ』から『マ』までを　ひろげてあります。途中に七瀬川の６番目の橋　その周辺をまとめた『六の瀬渡し場』を新しく　入れましたが目新しい素材はキラキラ輝いているようです。

肥後街道を下る『五助街道物語』は　第３回編で坂口石だたみ…湛水の間を　連れの旅人が五助との　珍道中ならぬ迷道中のようです。１６ページに四方山話が　セマクロウッテ賑やかい事ですが初めて知る　そんな話題もあるかも知れません。馬子唄もどこからか聞こえて　くるような　のぞかな街道の旅に……。

民話、伝承編は６つの話題を　面白おかしく　ご笑覧の程をその挙句に『ふるさとの味』　地場産物の『ニラ』料理が英知とアイデアで運ばれます。古くから強壮食品ともいわれて　新旧問わず親しまれています。おまけの『おとし団子』も　口水が垂れそうです。

しめくくりは『方言のひろがり』　『い…メ』から『ウ』までこれで散らばる方言単語は　６０６９語になりました。さて次回№１４号には　どんな新顔がお伺いしますか　お楽しみにお待ちくださいますように。素人集団頑張ります。これもご愛読くださる皆様の　お陰と感謝しています。

素人集団の会員すべての手づくり『方言集』続編№１３号　ご愛読誠にありがとうございました。お粗末な冊子ですが　会員が余暇を利用して収拾、編集、印刷、製本などすべて取り組む　方言集です。

今残さないと永久に消え　失われそうだからと挑戦して１８年２３冊が残り　お届け申しました。単語の語源やどこから来たのかなど　専門的な知識は皆無ですが　調査の執念は続く限りやりたいと　気合いを終結しています。将来この種の調査研究の　踏み台にでもなれば幸せと　心の情熱を燃やしています。

次号№１４号にも　故郷の伝承民話、子供の、女性の、あれこれを軸に方言でチリバメ　五助さんが頓知よく顔をひょっこり出して案内する　街道物語も４回目は　湛水から今市までの道中。おしゃべりが引き付ける　人の情愛は故郷だからでしょう。これからもご愛読いただければ　何よりの幸せと感謝申し上げます。

調査収拾編集印刷製本　スタッフ
小野寿裕、佐藤源治、那須政子、赤星ヨシミ。

大分市大字竹矢　野津原方言調査会
☎　５８８＝０５７２
☎　５８８＝００９２事務局

方言取組み調査
20周年記念発行
続No.13（通巻23号）

（付録）

「民話伝承」

月に昇った優しい娘…0
天狗と鬼の約束……1
水を恵んだ老僧……4
お接待の意義……6
犬の恩返し……7
故郷自慢の３つ……10
母親の夢とロマン　11
ガキ大将の夢とロマン　13
少女の夢とロマン　15
方言説明……17
父親の夢とロマン……18
あれこればなし……20

野洲郡方言調査会

●●●　月に昇った娘の優しさ　●●●

ピョンピョンまるで跳ねるごつ　小道を歩いていたら　天から下りて来たお姫さんが　声をかけました。『あら可愛いい花を持っていること』　タマガッタ娘も『あら　よかったらあげましょう』と　差し出しました。嬉しそうに受け取ると　唄が上手なようね　唄ってほしいな』　娘は言われたので唄いました。　あまり上手なので　今度は踊りも見たいと　言いました。

『下手だけど』　折角言うのにと足側の草を　髪に飾って踊りました。まるでウサギが跳ねてるようです。見惚れている内に時間が過ぎて　太陽が西に傾きかけました。『あら　もう帰らないと』　娘は友達になったのに　別れるのが悲しくなりました。『あの　どこから来たの』『私　天国からよ』　まさかと思って見つめました。そう言うとなにか　不思議な着物も着ていますし　上品な顔もしていました。

『でしたか　楽しかったので　お別れに踊ります』と　娘は前よりも　もっと草や花をつけて踊りました。走ったり跳ねたりに真剣になっていたので　ふと気がつくと　その姫が空に上がってゆくようです。その後を追うように走りながら　跳ねたり飛んだりしていると　小石につまずいて転びました。

空から見ていた天国の姫は　『大丈夫』　転んだ娘は動かなくなってしましました。天高く昇った天国の姫は　『可哀相にどうしょう』と　いつまでも見つめていました。がその姿がまるでウサギのように　飛んでいるようにも見えました。そうだ『私は天国に帰るので　あの娘は月に招くことにしよう』と天国で相談しました。優しい踊りの上手な唄のうまい　あの娘も月の世界に招かれて　移り済んで今は唄や　踊りの他にお餅もついています。

『天狗と鬼の約束』

大雨が降るタンビ山水が　オオゴト流れデチ　畑をアラスモンジャキ　里ん人たちはコマッチョツタ。天狗はそれを見ると　『なんとかデケメーカ』ち　いろいろ考えヨッタラ力持ちん鬼の事が　ヒョカット頭に浮かんだ。『ソゥジャ鬼ん力を借ろう』　ある日のこと鬼に話した。

『３日間に８８ん谷を作ったら　食い物に不自由サセンガカセイシチ　クレマイカ』　相談受けた鬼は考えヨッタガ『コリャマァ儲け仕事じゃ』ち　合点すると『約束スルデ』これじ　話がまとまったから　天狗も里の人たちに話した。里の人たちもおおよろこび　『コレジ鬼も　ワヤクハセンゴト　ナルジャロウ』　みんなが喜クウダ。

天気が続いた頃ジャツタ。鬼が『アシタカル　カカルキ』天狗に話すと次の朝　オケノニ谷を作りはじめた。元気ゆう作るのぉ見た里ん人たちは　『ヨカッタナァ』　一日も早ぅ出来上がるぬ　待ツチョツタ。ソシチ１日目は５０ん谷が出来た　モンジャキ天狗も『マアマアン出来』ジャチ安心した。次の日は　チット昨日ハリコミスゲタカ　チットバカシ仕事がユックリニナッタ。

ソレデン３０グレハ　出来たモンジャキ残りが８つん谷。天狗は『なんとか計画通り行けそう』　鬼も『ショワネエジャロウ　後８つは昼マデニャ　デクルジャロウ』　一安心したんか　ダリモアッタンカ　チョコットガ多ぅナッチ　酔っパロウチシモゥタ。真剣働いた２日間の　ダリガイッペンニ出たモンジャキ　横タクリナルト　大イビヒ　ゴゥゴウに。

隣近所んシガ　ヤカマシイグレな　大鼾かいたまま次ん朝

イツマデン起ケンジャツタ。『リャマァ久しぶり働いたキカマァ　寝チョルゴタルナ』　天狗がソリュウ聞くと　『イイキマメシチョキナ』　実はこうこう　しかしか』と　里人に説明しち聞かせた。『リャマァ　フンナ起コシメーエ』　鬼は　グッスリ寝ち　ヒョカット目が覚めたんが　晩がたじゃった。

寝ぼけた目じ見たもンジャキ　『アリャまぁ夜が明けん』ダッタヒョシに　そんままゴロリ。グウグウ　又寝こんだ。

里人たちが　『しょわねえんじゃろうか』　天狗は実は鬼に働いてもらう　仕組みの約束だから　３日間に出来ない時は　食べ物の約束は無効。谷はいくつかは出来たので　褒美はあげるが　働くことで皆んなが　楽しく暮らせる事を解って　ほしかった事などを説明した。で今度は夜中過ぎたら『これこれこのように』と　次の芝居を話した。

まだ起きない鬼に聞こえるように　鶏を集めバッチョロ笠を叩くと　鶏の鳴き声にタマガッタ鬼。天狗が枕許に立って『夜があけたど』　鬼は約束は果たせなかった　ケンド出来なかった事は認め　自分の行いは悔いたと言う。『修行にこれから出ます』　天狗の引き止めも聞かずに　帰って来たら頑張るから……。皆もんなも快くみおくった。

方言説明　タンビ…たびたび。モンジャキ…ものですから。デケメーカ…出来ないだろうか。ヨッタラ…していたら。ヒョカット…急に。サセンガ…させない。レマイカ…もらえない。コリャマァ…これはいい話。スルデ…します。ワヤク…悪戯。センゴツ…しないよう。ナルジャロウ…なるのでは。クウダ…こんだ。ジャツタ…でした。カカルキ…はじめる。オケノニ…起きてすぐ。ソシチ…そして。ジャツチ…ＯＫ。

チット…少し。ハリコミスゲタ…精出し過ぎた。ユックリナッタ…楽になったから。ソレデン…それでも。グレハ…くらいは。モンジャキ…ものですから。ショワネェジャロウ…大丈夫でしょう。マデニャ…までには。ジャロウでしょう。ダリモアッタンカ…疲れもあったようで。チョコット…少しが。モンジャキ…ものですから。タクリナルト…向きになると。シガ…人たちが。ヤカマシイ…うるさい。

イツマデン…いつまでも。ケンジャツタ…起きなかった。リャマァ…びっくり。ゴタルナ…ようですね。ソリュウ…それを。イイキ　マメシチョキナ…よいから　そっとしておいてあげよ。フウナ…それなら。メーエ…まい。ヒョカット…急に。モンジャキ…ものですから。ダッタヒョウシニ…疲れたために。

バッチョロガサ…竹の皮を利用して作った日よけ雨よけの笠。ケンド…ですが。

欲張った鬼の行いに　天狗も憎くはないのだが　試しに人の為になって認められる　そんな機会を作ったのです。しかし鬼も自分の　浅はかな行いを認めて　修行に出る心情は立派な事と　引き止めたのですが　決断して見送られる。

天狗も何かの時には使うようにと　大切な『天狗のウチワ』を　渡すのですが　それは貴方の大切な物と　断わって修行に出ます。そして何年か先に　里に帰ってくるが　里の人たちも快く迎え　工事途中の谷も立派に完成。今は大雨にも被害がないとか　元を正せば鬼が作った　８０あまりの谷があったからです。

『水を恵んだ老僧』

粉雪が舞う夕暮れじゃつた。みすぼらしい老僧が精根ついたゴタル　村外れん農家に辿りちーた。『せめて一夜泊めちほしい』ち　ボソボソ声でイイヨルゴタル。留守ん少女は何もナイケンド　せめて火だけでんち　手助けしち入っちモロウタ。そん少女も手ニャ　ヒビぅ作り炭焼き家族ん帰りん　留守番じゃが　鍋に炊かれチョルンは　トイモとアワん雑炊だけ。

老僧は目をツブシチ　動こうとんセンジャツタ。『せめてコレデン』　一碗をさしデータ。『私は泊めて　もらえるだけデン充分なんです』ち　言うのを無理に勧めた。押し頂だき涙を流しち　『今一番困っチョルナ』　問われた少女は　『せめて水がガイトアッタラ　もっと食べ物も取れるに　デン無理な事でしょう』と　下うつムイチシモゥタ。老僧は頷くと又じっと動かん　ゴツナッチシモゥタ。

夜がアケチミルト　死人に近かった老僧ん姿は　見当たらんじ火鉢ん中に　『せめてお礼に』ち　西の方を指す矢印が書かれチョツタ。少女は気にナッチ　西の方に行っち見ると　水んチョロチョロと音が聞こえよる。雪をバクッチなんと　サラサラ水が流れよった。タマガッタ少女が炭焼きん　山まじ走っちこん話しをすると　親たちも涙滲ませち　『お前んお接待したそん　お坊さんは仏様ん身代わりじゃろう』　炭焼きん途中じゃが帰ると　近所んシタチニモふれち　水ん湧く側に集まった。

それかるは水がチットズツデン　流るるモンジャキ米も　植えらるるゴツナッタソウナ。アン老僧にもてなした　ご褒美じゃつたんじゃろう。何百年も枯れるコターネェとか。ヒビギレゴンゲンち　笑いよった少女ん手も　美しゅなっちよかった。

方言説明

4ｐ　じゃつた…でした。ゴタル…ようです。泊めちほしい…泊めてください。イイヨルゴタル…言っているようです。ナイケンド…無いですが。でんち…でもと。手ニャ…手にわ。ヒビ…皮膚が乾燥して小さな割れ目。チョルン…ているのは。トイモ…甘藷。ツブシチ…閉じて。センジャツタ…しなかった。コレデン…これでも。データ…出した。チョルナ…いるのは。カイト…沢山。デン…でも。ムイチシモゥタ…むいてしまった。ゴツナッチシモウタ…ようになってしまった。

アケチミルト…明けて見ると。チョツタ…ようでした。ナッチ…なって。バクッチ…取り除いて。タマガッタ…吃驚した。まじ…まで。じゃが…でも。シタチニ…近所の人たちに。チットンズツデン…少しずつでも。モンジャキ…ものですから。ゴッナッタソウナ…ようになったようです。コターネェ…ことはない。ヒビキレゴンゲン…ひびがきれて見かけが悪い。

農家には水が生命線でもあって　畑に比べて仕事もたやすいし作物の　販売収入も大きく上回るので　いかに水が大切かが家の財政にも　左右していた時代。水が少しずつでも流れることじ　溜めて利用する方法を取り入れ　水を使わずに済む作物も作れる　有利な営農改革でもあった。

不自由な場所では遠くから　水路を作って誘導する井路の方法も　盛んになって水利用では　除草も楽に成果をあげる。水に腐ることで肥料分にもなる。など高度な方法はのちに　魚、鴨を利用した除草農業で　一石二鳥などの言葉も生まれた。水の有難さはこのように　農業文化にも広がっていった。

お接待にはどんな意味が

４月２１日は『お接待ん行事が　各地じあります。昔偉い坊さんの遺言を今も大切に　伝えた春と夏ん風物詩。お坊さんの名前は弘法大師と言い　地質や気象にも詳しく　若い時に中国に渡り《遣唐使⇨８０４》》長安の清竜寺で密教修行。８０６年に帰国真言宗を広め　８１６年高野山で寺を開き　多くの人たちん心のより所としました。

大師は人から習った　聞いた　貰った事は　全て多くん人に返してこそ　生きていた証じある。と世の中ん仕組み　生活のあれこれ　食ぶる事の感謝　人との巡り会わせ　自分も支えられちょる。生きているもんはあらゆる物と　生かされている幸せの賜物と　お返しする責任がある。ち諭されています。

なんぼ多くの財産が　金が　贅沢な物や資格肩書きがあってんそりゃ　ほん僅かん人生の宇宙かるん　借り物に過ぎんもん。人間がこん世かる去る時にゃ　そげなんは全て無意味。欲望ん固まりにしか過ぎん。かえって醜い争いん種になるもん。じゃき困った人に施し　お互いに譲り合う優しい心　支え合う連帯ん気持ちじこす　幸せな人生も送れるもんです。

４月２１日《旧暦３月２１日》は　命日にあたるき　この日にお接待をしち分かち合い　感謝する心のように　なったんです。春にゃ季節山菜利用ん『混ぜご飯』　盆の８月２１日は『ヤセウマ』ん　お接待に老人に連れのうた　孫たちが貰いにくる風情はのどか　大師もきっと笑顔じ『幸せなれ』と　ご加護しちくれよるじゃろう。ヤセウマは盆供えした　ものを先祖場所に帰る時にシバッテ　持ち替える紐にしたとか。
優しい言い伝えを継承したいもの。

△△△　犬の恩返し　△△△

山奥の離れた家じ　おじいさんが拾った犬を　飼いよった。トテン利口じ甘えんぼうジャュツタが　おじいさんの言うコタァ　ユウ聞いち毎日楽しゅ　暮らしヨッタ。犬は賢くぅじ恩はワスレンチ言う。人間も世話になった事は　ユウ覚えチヨッチいつかきっと　恩がえしスルンガ　いいでしょう。

春んある日のことジャツタ。畑ん畦ん草を焼くコチナッタ。ホンノ　チットジャキ　近所ん人たちに加勢シチ　モラウホズン　こたぁアルメェ。おじいさんナ自分一人ジ　スル事にしました。『今日は風もナカッタキ　ヨカッタ』。おじいさんナいつもんように　ねじ鉢巻きすると　枯れ草に火をツケマシタ。

犬も側ジ見ちょつたが　熱いモンジャき『キャン　キャン』と　泣きながらチット　さがっチ見ちょつた。燃え始めた草ン煙りが　回りに広がっチ　白い幕を広げたゴタル。火が燃えサカルト　空気が軽ぅなっち　風がソキー起こります。火の勢いがユウナッタキ　チット消さにゃナルメーち　おじいさんが動いたら　足が草にヒッカカッち　転んじシモウタ。

『コリャシモゥタ』　おじいさんナ慌てチ　起きあがろうとシタンジャガ　足がヨロヨロとシチ　起きあがれんごつなった。そしち野良着ん裾に　草ん火が燃えチータンです。おじいさんナアワテチ起き上ガロウチ　すりゃスルホズ　タテレンゴツナッチ　着物にチータ火は　広がりはじめちしもうた。『おじいさん　大丈夫』　犬がソゲナ想いじ　かけよりました。ジャガどうする事も　デケン　ハガユサ。

おじいさんな気が焦るばかり　犬は心配しよる　着物にチータ火もデーブ広がっち　畦ん火も燃えサカッチ　シモウタ。

と　そん犬が何思うたか　突然に側の井路に飛び込むと　ずぶ濡れに全身をシチ　急いじ　おじいさんの背中まじ来ると　着物にチータ火の上を転がりながら　火を消しはじめタンです。二度三度真剣にツージ　ズブ濡れん犬は走りまわる。

おじいさんは起き上がれんケンド　着物ん火は消えた事じエート安心シタンカ　気を失ノウチシモゥタ。懸命な犬ん活動じ　おじいさんな火傷も軽ウジ　火が消えたゴタルヨウ。燃え広がらんじ白い煙り　イヤンバイニ風も弱ぅじ　近所んシタチモ　『妙な煙りじゃのぅ』ん　話かる気がチータごたった。

駆けつけた近所んシタチガ　おじいさんぬ戸板じ運ぶ　ソリュ見た犬も安心したんか　グタット倒れちしもぅた。近所ん子供たちも　こん健気な姿に感心しち　火傷した犬も抱いチ家まで帰りました。一週間ほずしたら　おじいさんも犬も元気にナッチ　『自分の事よりも助けたいち思う』コンメー動物でん日頃ん恩返しをする　優しい心に皆んなは　泣かされたゴタッタ。大事にしちょつたんじゃろう。

おじいさんも一人じした　野焼きん反省と犬がコレホズマジも　恩を尽くした気持ちに　いつマデン大事にシチャラニャち　皆んなに話したそうな。そげな話しゅうする側じ　じっと聞いちょる犬の目も　とてん奇麗じゃたそうな。

※　方言説明　トテン…とても。ジャツタ…でした。コター　ことは。ユウ…よく。ヨッタ…暮らしていました。チョッチ…いて。スルンガ…するのが。コチナッタ…事になった。ホンノチットジャキ…すくない。モラウホズン…してもらうほどの。ナカッタキ…ないので。モンジャキ…ものですから。サカルト…勢いよく。ナルメーならないでしょう。シモウタ…しまった。コリャ…これは失敗。

ヨロヨロシチ…不安定。タテレンゴツナッタ…立てなくなった。チータ…付いた。ソゲナ…そんな。ジャガ…ですが。デケンハガユサ…できないくやしさ。シモゥタ…しまった。タン…たのです。ツージ…走って。ケンド…けれども。シタンカ…したのか。ノーチシモゥタ…全く解らない状態に。ゴタルヨウ…どうやら終わった。イヤンバイ…いい幸いに。シタチモ…人たちも。ソリュー…それを。グタツト…ぐんにゃりと。ナッチ…なって。コンメー…ちいさい。ゴタッタ…同調する。コレホズマジ…これほどまでに。マデン…までも。シチャラニャ…してあげないと。

火遊びは非常に危険で　特に昼間は明るいので　火が見えにくい事もあって　大きな災害事故にも　広がるものです。絶対に『火遊びはしないように』　動物…人間も同じ動物なのです。長い間家で飼う事で　心が通じ合うものですから　大事にしてあげる事も大切。躾も大事です。と共に相手の心も大事にする事が　人間も大事にして貰うものです。

野焼き…春先に枯れ草を焼く　古くからの風物詩ですが　風のある時は禁止が原則です。又近所の人たちと連絡して　非常の対応も大事でした。共同作業が当たり前です。冬の害虫防除ゃ若い草の芽を　出させる効果もあります。山焼きなどは地域が一体となって　春先に行い春の農作業に移る区切りとなっていました。最近は社会環境も変わって作業する人たちの減少で　深刻になっていますが　古くから継承されている　自然との関わりは大事にして　人間社会の決まりに感謝しながら　自然を守る事が生きている　人間の勤めと思います。

動物との共存《人間も動物》には　気くばりも大切です。人間も自然の中で生かされて　生命をつないでいるからです。人間の勝手気ままは禁物です。

『故郷の過ぎたもの３つ』

丸山八幡にゃ拝殿に竜の　彫刻が取りつけちゃるが　夜な夜な抜け出ち手洗い鉢ん　水ぅ飲みよったそうな。そん話を聞いた近くん信者が　そん竜ん尾を切り落としたら　それかるは水飲みに抜け出らんごつなった。彫刻はそげな姿じ残されちょる。

参勤交代ん頃に『祈とう所』としち　建てられた別ん寺にゃ素晴らしい『つり鐘』があっち　大きさ形そん音色が秀でち　見るし聞く人ん目を耳を　心までん和ませちくれよった。じゃがあん戦争じ供出されちしもうた。行き先も解らんまま今いずこか。知る人たちには忘却ん想い　大なるもんがあろごたる。

別ん寺院の先代住職は戦前布教ん　第一人者としち国内は勿論海外にも　下命受け特に北京にも　１ヶ月あまり出向しち　そん任にあたったそうな。仏の心を伝える人間の技は　伝来ん印度かる中国経由しただけに　聞く人たちん悟りも早かったごたる。

★　方言説明　にゃ…には。ちゃるが…られているているが。そん…その。それかるは…それからは。ごつなった…ようになった。そげな…そのような。ちょる…ている。あっち…あって。じゃが…ですが。しもぅた…しまった。ごたる…ようです。そうな…ようです。

●●　方言調査に取り組んで　２０年を迎えました。皆さんの心の理解支援と　多くの愛読者に親しんで頂く　支えによって今年は　発足２０周年　方言集も２３冊の発行も出来ました。この『民話、伝承』は　そんな思い出に残る　方言で優しく理解出来る　短編冊子とて編集。ご利用くだされば何よりも幸せです。

２０周年特別編集冊子です。

母親の夢とロマン

味噌豆は子に食わせよ…盆前になると百姓家じゃ　味噌ん仕込みん豆炊きがはじまる。煙りが上がるんを見ると　『あっこも味噌豆煮よるど』　年寄りん目はサジーき　自分方が始めんと何か　負けたごたる。『味噌豆は子に食わせよ』ち　昔かる言うごつ遠方におる子供たちにも食わせてぇんが人情。

年１回ん豆煮じゃき無理もねぇ　暑い盛りん行事じゃが　じゃきこす暑い頃にチョコットデン　休みが取るりゃヨコワセテェんが親ん気持ち　ち言うもん。ゆっくり休ませてぇ　『まめ』にもさせてぇ　奉公にどま出した子どもにゃ　何年ぶりかん再会じゃつちあるんがこん『味噌豆炊き』。

豆にゃ栄養もあっち消化もいい　第一煮えち柔らこぅなった豆そん食感はそん時に出会うちこす　味わえるもんでんある。１年ほずした頃にゃ風味のいい　母親ん真心んこもった味噌が　ふんわか食卓ぅ飾っちくるるが。暑い盛りん煮豆にゃ　言葉に綴れん旨さが隠されちょるき不思議でんある。

竹ん皮弁当ん風味…竹ん皮に包まれた三角ん　オムスビ弁当をひょいと開くと風味んいい　匂いが何か胸ん奥まじ　届くごたる。素朴な暮らしん中かる考えた　オムスビじゃろうが　真夏でん竹ん皮が新しいもんじゃき　スユル心配もねぇ。殺菌力があっち風も通す　知恵者は旅人ん弁当にゃ　欠かせられん存在。

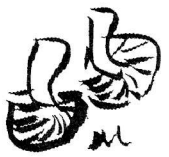
麦飯、粟飯、銀飯なら尚のこと　輝く三角。助け合う支え合うの気持ちが　しゃんと握り込まれちょる。じゃき『おむすび』ち　言うが結び合う事じ　元気に無事にと念ずる　気持ちが込められてんおるからじゃろう。遠出ん時にゃ梅干しを入れ　長持ちさせる知恵も　結びこんじゃる情愛。

こげんこともあった。学校ん遠足に弁当もっち　楽しいんじゃが悲しいかな　麦飯竹ん皮弁当じゃつた。皆んなと並んで食べたらヒョイトそれが気になっち　ジワット開いた……ところが何と味噌漬んこげ茶色ん　汁がグアユウ回りを染めち　外目にゃ麦飯た気がつかんごたる。子供心にも家の事ぅ思うと　ほっと一息。

帰って母親には言えないき　ババサンに話した。涙にじませちち『セツカッタジャロウ　でんな貧乏は好きじ　シヨルンジャネェ』『ワカッチョルデ　味噌漬ん味が染みくうだんが　とてんウマカッタき』『……』　家族がわかり合う　竹ん皮弁当は　遠足ん仲間に入っち　花天狗んごたったわな。

★　方言説明　サジー…気配りが早い。チョコットデン…少しでも。ヨコワセテェ…休ませてあげたい。まめ…元気で達者な。奉公にどま…住み込みで働きに行く人たち。ふんわか…楽しく浮き浮き。竹の皮…新しく伸びた竹が成長して　節の竹皮をおとすのを　拾って利用する。スユル…腐敗する。しゃんと…しっかり固く。こげん…こんな。ヒヨィト…もしかして。ジワット…徐々に。グアユウ…よい程度に。ババサン…祖母。セツカッタジャロー…悔しく悲しかったのでは。シヨルジャネェ…しているのではない。ワカッチョルデ…解っています。だんが…ものが。とてん…とても。ウマカッタ…おいしかった。

このように農村では古くから　いろんな物を利用して　生活に使う知恵が広がっています。竹の利用は非常に多く　殺菌作用ではフツ、カンカラ、トーキビ、なんかもあって利用します。藁の利用も家庭の衣食住全般にあり　自然との共存は欠かせないもの。然し人間社会が進歩発展すると　道理が通らぬように　恩恵を受けていた物まで　疎外するような傾向は　世間を狭くして　心も貧しくなりそうです。



がき大将の夢とロマン

『今日は川祭りど』　上級生が出会うと言うのも　忘れちょつたり　皆んなの楽しい行事に　間に合わんじゃムゲネェき　そげな思いやりん　気持ちがあったからじゃろう。

親孝行ん息子が　寝ついちょる母親かる　『熱が下がらんき湧水が飲みてぇ』と　せがまれたもんじ　今日は川に入ったらいけない　そげな決まりをつい　忘れち川に入って渡りはじめた。あと少しで渡りきる時じゃつた。白装束ん川の神様ん　お叱りを受けた。母に飲ませたい気持ちじ　命乞いすると急いで湧水汲みに。

約束したごつ母が飲んで　喜ぶ顔を見ると川にもどり　ひれ伏してお詫びをしながら　『母も喜びましたので　私はいかような罰も受けます』と　母の顔と川の神様の顔が　流れる水の中に浮かんでは消え　消えては浮かんで見えた。神様もその親孝行と　約束を守った子供の真心に　心うたれて『毎年この日に御神酒を供える事』が　守れるなら今回は許すと　言うと姿がかき消すように消えた。

その話を聞いた　がき大将も庄屋さんに話した。『約束を守れるならこれからは　川祭りをして感謝せねば』と　孝行息子のおる自分の地域が素晴らしい事を　とても喜んでくれた。

それからは旧の７月１５日には子供たちが　御神酒を供えて川祭りをする事になったそうな。湧水を飲んだお母さんも　元気になって仕事が出来るようになった。子供たちが供えた御神酒を　家家に配るのも川の恵みに　感謝する真心の現れかも知れんが　人は全てのものによって　生かされているもの。感謝する事は優しい　気持ちの現れでもある。川祭りんお神酒を　配っち来たぬ見ると　庄屋さんも子供がすくすく　育つちょる姿に今年も　美しい水がみんなに無病息災を　きっと授けちくるるじゃろうち。

『やんがんな　いつ見ても格好がいいのぅ』　学校かる帰るとツレノウチ　薪もん取りに山に行く。冬は外じ遊ぶより山は暖うじ　風呂たきも出来るき　大きな子供が世話をしながらヒトカルイヅツ　かるぅて帰ってくる。親も安心する習わしがちゃんと　受け継がれちょつた。１０人ぐれん団体。

おおかた出来たか見ち歩く　大きな子はまだ出来ん子の分も加勢しち　帰り支度も出来上がった。皆んなじ行くき親も心配ねぇ　そげな日課でん助け合う　仕事も覚え要領もゆうなる。品のいい風呂焚きが　親ん想像もつかんごつ　見事な薪もんが野仕事から帰った　親の目に写るんも嬉しいもん。

『いつも世話になるのぅ』　がき大将も他所の親から　礼を言わるると恥ずかし嬉し。集団じ自然に覚えた　加勢する習慣な大きくなってん　役にたつもんじ進んで　手をだす優しい心ん持ち主になっちょる。自分もコンメー頃にゃ　世話になり教わっち太った。いまソン恩返しでんあるごたる。

こんめー短こうなった鉛筆に　竹を具合うきってスグルとまぁ結構使えるもん。『うまい具合にやっちょるのぅ』　友達ぬ見るとこんだ自分なりん工面じ　スゲタシしちみる。こりゃいいわい　自分の気づいた考えちーた　そりゃもう天下取ったこたる喜びになっちょる。

杉の実鉄砲作ったど　見せぶらかすき　『俺がんな猫ん玉ん鉄砲じゃき』　同じ竹を使うでん玉が違うと　名前も変わる。有るものじ見たもんじ　頭に浮かんだ物を作る。遊び道具なんかが時間を生かしちくるる。『や　ゴム銃か』　木の枝利用んゴムんちからの鉄砲も現れた。

子供ん世界にはいつも　夢があっち飽かせんもんじゃ。元気じ何かしよるそん回りじ。

少女時代の夢とロマン

夏が来ると夕涼みん季節になります。夕暮れから『イデンハタ』にゃ　ピカ　ピカと蛍が火をトボス。『ホタル籠』に捕まえてイルルと　麦からじ作った籠かる　可愛いい蛍ん灯がピカ　ピカと柔らかな光が消えたり　ついたりする。白紙に包んじ窓際に　つるした蛍の点滅する明かりは　雪明かりとは違った　美しさが感じられる。

『ホ　ホ　蛍来い　あっちの水は苦いど　こっちの水は甘いど』

そげな唄が聞こえたんか　こっちに飛んで来るごたる。自分の前に来てくれそうな　動きを見守り光りを　追いながら　『こっちこっちよ　蛍来い』　まるで乱れ飛ぶような　蛍　スイスイと。

……

盆の墓参りの日にゃ　早く風呂に入っち　浴衣に着替える。そげな習わしがあっち　それを守って来た　家の人たちに　汗を流しながら　『なで自分はと』　ふと思ってみます。先祖の精霊を迎え送る大切な日だから　と言います。人それぞれにある　のだから。とも言います。

盆には『ヤセウマ』を　炊いて供えます。米が大事な物でもあり農家は　経済の事と生活とが　うまく組み合わされち　イノチキも安定する　古くからん知恵もあった。じゃき仏様が帰るそん日にゃ　迎えにゃ『ダンゴ、ヤセウマ』じ　迎える。家にゃ酒餅　ウドンも用意しちゃる。口当たりのよい　夏らしい物　『ほっとする』と先祖たちも　落ち着くらしい。

陽が長くて暑い時期　なるたけ口当たりのいい　涼しくなるごたる物。夕風に汗が飛んで　久しぶりんわが家。皆んなが元気なのんが　どんくれぇ嬉しいか。俵置きに積み上げられた　米俵を横目じ見ち　『けっくしゃあるわい』　ニコット笑った先祖様。ダッタき横になろうかのぅ。セド風が精いっぱい吹き込むんも　嬉しい。

天国に帰る時にゃ　『ヤセウマ』みやげち言う。ヤセウマは保存が効く上　乾燥すると強くなるき　お供えを『シバッチ』さぐる時にゃ　重宝するきと言われる。盆にゃこげなふうに小麦粉かゆう使わるるんも　米を大事にする心ん　現われがそきーあるんじゃろう。

……

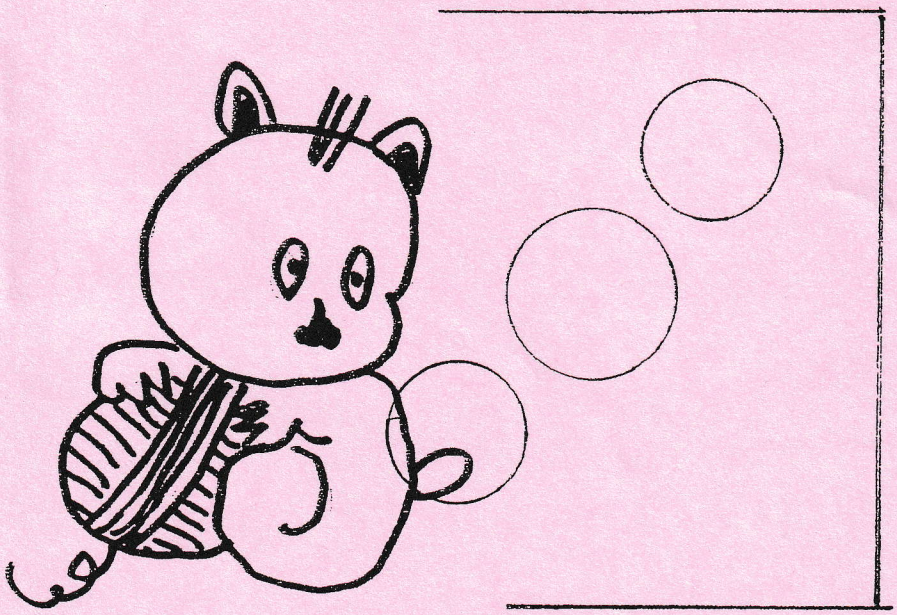
近くじ『ヒトギマキ』が　あるんと。けんど父親がおらんき行かれない。無理にお願いしてん　断わられるように　おつきあいの大切さが　決められていた。『仕方ないから』と　半ば諦めちょったが　夕方早めに父親が帰った。やっぱ知っていたんじゃろう　親の気持ちに反対して　内緒で行かずによかったと　ほっとするのと　嬉しさがいちどきに。

『ちゃんと化粧しち　もらわにゃど』　嬉しい気持ちがもうワクワク。『ヒトギ拾いには　化粧してもらうように』　それは不思議な事じゃが　『家を建てる人に　礼儀をつくす』との意味があるからのよう。真新しい家の　ヒトギ餅まき　じゃき皆んなん　心も気持ちも服装も　美しいことこそが　お祝する気持ちん現れでしょう。

『ヒトギ』　つまり　『火を飛ばす』　火が遠い　そげな意味もこめて　手がけた大工棟梁が　晴姿を施主を代行しての火災防止　無病息災　この家繁盛の　願いをこめた　祭りでんあるのでしょう。そしち賑やかに　餅を頂く声が賑やかなほど　火の災いも飛ばされて　しまうんでしょう。真新しい家に　着飾った人たちが　賑やかにバンザイ　バンザイの声で縁起の　よい餅を受け取る。

いっぱい受け取った　人たちの笑顔と歓声を　いつまでも五色の吹き流しと共に　お祝の人たちを　送っているよう。

女性の底力



●●● 方言単語の説明 ●●●

がき大将　ちょつたり…いたりして。ムゲネェキ…可哀相だから。じゃろう…でしょう。ごつ…ように。おる…居る。くるるじゃろうち…くれる事でしょう。やんがんな…お前のは。ツレノゥチ…連れだって。ヒトカルイヅツ…背負える範囲に。ゆうなる…よくなる。なるのぅ…なります。なってん…なっても。なっちょる…っています。コンメー…小さい。ソン…その。スグルと…支えにすれば。ごたる…ような。見せぶらかす…見せて得意になって。

★　杉の実をつめて空気圧によって飛ばす鉄砲。杉の実鉄砲。
蛇のひげの実をつめ空気圧で飛ばす。　猫ん玉鉄砲。
紙を濡らして丸め空気圧でとばす。　紙ん玉鉄砲。

このように身近い場所にある物を　英知とアイデアで玩具にして　遊んだ時代の物で　作り方も自然と身について　更に知恵とアイデアが加わると　新しい玩具に発展した。

少女時代　イデンハタ…井路の周辺。トボス…灯す。ビカ…瞬間の光。ついたり…明るくなって。たんか…たのか。ごたるようで。そげな…そんな。のだから…そんなふうに。ヤセウマ…小麦粉で作った食べ物。イノチキ…生活。じゃき…ですから。横目じ見ち…そっと見て。けつくしゃ…予想以上に。ダッタ…疲れた。セド…隙間な場所。シバッチ…束ね。こげな…このような。あるんじゃろう…あるのでしょう。じゃろう…でしょう。いちどきに…いっぺんに。ちゃんと…きちんと。そしち…そして。

少女の夢の世界には　仄かな楽しさが成長とともに　変化して行くのはそれだけ　大人になって行く過程でも　あるのだが。

父親の夢とロマン

子供が成長して行くと　親離れん時期に入っちくる。甘やかしは厳禁じゃがそん『子育て躾』は　ケツクシャ難しいもんでん。『柱松ぅ作るき教えて』『いいど　もうお前どうんじょうじ出来りゃせんか』『でん　習うち作ると　やっぱ品がいいき』『お前ぁ上手じゃのぅ　オダテチ』　言わるりゃ悪い気はせん。

盆の送り火を皆んなん　気持ちを合わせち作りゃ　家ごとじ作るよりゃ　手間も省けち見比べんでんいい。竹を割っちジョウゴ作っち小麦からじ　編み上ぐりゃもぅ出来たようなもん。オカクズ入れち上に上蓋すりゃ　建て前じゃのぅ。年寄りが見ちょる子供は覚えも早ぇき　チョイチョイチョイと　完成した。

『竹が残ったき雪足教えて』『何や　竹が多いち思いよったらお前どう　ワナを仕掛けたんか』　『そげんこたーねえで』　得意顔じ　がき大将が安心したんか。いい後取りが出来たようなもんじゃ。年寄りんしも嬉しいごたる。地域んこげな共同作業がくりひろげられちこす　発展もして行くもんじゃ。

年末になるとこんだ『門松づくり』も　年寄りぅうまい具合にオダテチ　オダテられちょるち　解っちょつてんやっぱ　年寄りにしちみると嬉しいもん。『まぁ俺どうも出番があるんど』　顔見合わせち白い歯を　笑い顔かる腹一杯覗かせた。子供たちもそげな年寄りがいつまでん　サカシュシチ欲しかった。

『松は一年中青々しち気品がある』『竹にゃ雪にシオッテンも折れんじ　重みが取れると元に跳戻る』『梅は寒中にも花を咲かせち香ぐわしい　心優しい春を知らせちくるる』　そげな手近く見られるものが　正月には落ち着きの心情を　そっと教えちもくれるもんじゃ。

『門松飾りもケックシャゆう　出来たど　お宮のも作るんじゃろう』『そうで　やつぱこげー作りきりでーたんじゃき』『そうど　来年な自分どんじょうじ　作らにゃの』　『いんげやつぱ加勢しち　もらいてーな』『もうよかろうが』　残った竹を集めち　クビリハジメタ。

『コリャ　どうやれ　こげこげしち竹縄にすりゃ』　年寄りが手際ゆう　プチプチと折ると見事な　『たけなわ』が出来た。そん竹縄じクビル　ヒッパルトぎゆぅとシメアゲタ。見ちょた　がき大将は　『それも教えて』『こりゃ危ねぇき　気をつけにゃの』

2　3回習うと子供は　感がいいし覚えも早ぇ。怪我せんごつ気をつくりゃもう　覚えたじゃねぇか。『お前どう　ふんと覚ゆるんが早えのう　もう来年かるは　俺どうん仕事がのうなるのう』『しょわねえき　また何か捜しちょくわな』『なんやお前ゃ　ふんと末頼もしいのぅ』　年寄りが涙拭きよった。

正月飾りをさげち焼く時に　作るんが牛馬を追う時に使う『鞭焼き行事』　女竹のウラサキを　焼く火にかざしち黒ぅなつたぬ　田植え時期に使う。毎日水の中ん仕事に牛馬も　人間もダッチシマウガ　そん時ん気合いいれに叩く竹。鞭は決して憎いのではない　リズムかも知れない。

年寄りに習うと子供の記憶は早い　悪い事も覚ゆるけんどいい事も年寄りから　教わり体験しち覚ゆるんも　素直じある心んゆとりがありゃこすか。自然の営みん中にさらり　継承されながら親かる子に　受け継がるる生活環境は　素朴な行事や習慣によっても　美しく次世代にリレーされよる。夢世界に。がき大将もやがて後輩に　教えながら成長しち故郷ん　後継者となるんもすぐん事　でんあるが見ちょつてん嬉しいもん。

△△△　方言単語説明　△△△

父親ん　ケックシャ…結構。オダテチ…調子に乗せて。ジョウゴ…筒状で下が狭まる容器。オカクズ…鉋くず《鋸で引いて出た糟。

★　門松の松…年中青々として大地に　しっかり根を張り風にも負けず水不足にも　耐えしのぐ。
門松の竹…風に従いしなやかな優しさ　雪の重みにも我慢するが　時期を見定めて撥ね除ける。
門松の梅…一番早く咲き心和ませ香り漂わせ　実は食用に健康の糧に保存食にも。

やっぱ…やはり。サカシュシチ…元気でいて。シオッテン…弱くなって見かけ悪くても。フツ…よもぎ。カンカラ…サルトリイバラ。クビリハジメタ…束ねはじめた。せんごつ…しないように。しょわねぇか…心配ないから。ふきよった…吹いていた。ウラサキ…先端はしっこ。ダッチシモッタ…疲れてしまった。憎いんじゃねぇ…憎いのではない。みちょつて…見ていて。

『ひずかったのぅ　う蒸し直したカンカラ餅ぅ食わんか』『食う食う』　年寄りがムゲネーチ思うたんか　奥じ蒸し直したんぬ　皿に乗せち来た。米粉餅じゃき美味さもあるが　カンカラん独特な香りがプーンと　餅と一緒に運びくうだ。正月後じゃき餅ん焼いたんなら　ともかく蒸し餅ん味も格別にもなる。

１０日正月《鏡開き》１５日正月《飾り外し》２０日正月は正月が　忙しゅうじ里に行けん　人たちんゆっくり休み。そげな風習が人ん心くばりじ　決められちょるき　そん日はケンタイ《思い切り》行ける公認の休み。じゃきこす苦労も我慢出来足腰か痛ぅでん頑張れるる。

発足２０年を迎えて

多くの皆様のご支援や　資料のご協力などによる　素人が取り組んでいる　野津原方言調査会も　ご愛読くださるご縁の皆様に　毎年励まされながら　振り返ると２０年　２３冊の冊子も残すことが出来ました。皆様に変わっての記録発行と　今日まで続いた事に　自負もしています。

今だから残せる限界の時に　取り組む無謀な企画は　常識では考えられない綱渡りでした。が先人が生活用語として暮らしに生かした方言文化は　辛うじて消えず失わずに　輝いているように　嬉しく感謝しています。限られた会員が余暇に取り組んだ　方言集はこれから　きっと役立つと信じています。

家庭の協力が手伝ってくれていましたが　体調の不具合はそれも無理で　毎日が機械的に過ぎていたような　時でした。会員から『格段の厳しい寒さの年明け　奥様の介護も大変ご苦労な事と存じます。が信じられる夫に毎日　甘えの出来る奥様はきっと　苦痛はあったとしても《しあわせな毎日》と　心では感謝していると思います』と　結んでいました。

この言葉をいただいたお蔭で　又明日からの生涯が生まれました。素晴らしい会員との出会い巡り合わせに　感謝している大寒の日です。方言調査の継続が自分の　人生の一つ一つの支えになり　心落ち着かせる『一会』であったと　思っています。

多くのご支援ご協力　資料の提供など　これまで巡り会った皆様の　お名前を別葉にご紹介申し上げ　お礼と致します。ありがとうございました。

会長　小野寿祐

発足２０年に愛読者からのメッセージの一部です。

心待ちの方言集が出来た由　今回もよろしくお願いします。月日の早さに驚きます。　　大分　筒井さまより

戦時中疎開した第二の故郷　その方言集には哀愁も満喫できて。本の到着を楽しみにしています。忘れかけた苦労の日がそっと語ってくれ　感じ入ります。　呉　川西さまより

立派な冊子ゆっくり楽しみに　読ませて頂きます。２０年もご好誼にも親近感が　湧きます。　上浦　松本さまより

野津原方言集ご連絡いつも　ありがとうございます。宜しくお願い申します。楽しみにしています。継続する熱意がきっと　受けられているのです。　　埼玉　細田さまより

時折初版をだしては　あの頃を回想しています。継続を念じご精進お祈りしています。２０年のこ苦労はきっと　報いられるものです。　　千葉　田北さまより

長い手数をかけた努力に　頭が下がる想いです。私たちも今郷土史の研究を続けていますが　悪戦苦闘です。お互いに今残せる事を記録として。　　杵築　西さまより

野津原方言集もだいぶ理解が　出来るようにました。文章力や優しい語りかけに　感動しています。五助さんの飄々とした姿　素朴で人間性があって。　　大分　後藤さまより

懐かしい故郷言葉を辿って行くと　貧しくとも心の豊かだった　あの頃が忍ばれます。続きを待っています。故郷は離れてこそ有難さが解るものです。　　埼玉　高柳さまより

事務協力いただいた皆様

宮本武子、松尾療子、小出富美子、緒方三枝子、那須貴光。
佐藤延登。

調査収拾発行の途中で　他界された会員の皆さん　熱心な活動による即戦力として　惜しまれます。

甲斐英行、利光節子、佐藤吉晴。

使わせていただいた参考資料　お聞きした歴史、民話伝承、多様な時間に　いつもきさくに　教えてくださった　古くからの生活用語　故郷の無形文化財。今残せたから　これからこの種の調査　勉強に役立つとすれば　この上ない幸せです。残った会員はこれからも　続く限り継承して　後に続く皆様のお役になればと　続編№１３号《通算２３冊目》も発行いたしました。

会員が全て調査収拾　編集、印刷、製本、と手造の粗末な冊子ですが　ご愛読に感謝申し上げます。

現在の取り組み調査　収拾会員はこれからも　頑張って発行を続けますので　引き続きご支援　宜しくお願い申しあげます。

平成２３年　吉日

野津原方言調査会

スタッフ　　会長　小野寿祐

、那須政子、赤星ヨシミ、佐藤源治。

２０周年特Ｐ

20

お礼のご挨拶を　この欄を利用して申しあげます。多くの皆様の　ご支援ご協力によって　平成４年に取り組み以来２０年間の　暖かいご支持によって　今日を迎える事が出来ました。素人集団の調査収拾　全て手づくりの冊子ですがご愛読いただく　皆様が毎年発行しているような　大切な宝物であると　自負しています。

この間のご支援　ご協力の皆様のご紹介です。順不同また既に　他界された方方の　ご冥福も合わせ　ご祈念申します。

松本英明、有光孝信、田口勲、後藤恒夫、岡本政雄、森下清、
吉岡輝雄、川西哲男、井下キヨ、安田ハルエ、三浦アサエ、
那須量、首藤チエ、三浦一郎、橋本杉平、橋本小次郎、秦清、
川西忠実、飯倉静、佐藤良一、加藤正人、三ヶ尻政雄、工藤馨、
一の瀬豊、米野豊、姫野順子、佐藤憲博、佐藤敬介。小野肇、
田崎奈良熊、河村アヤ、七瀬活水、岡松直、菊屋奈良義、
渡辺之雄、那須茂都女、波多野権喜、立川清夫、内藤忠人、
熊谷義人、甲斐栄馬、はたのしょういち、佐藤まや、安田弘、
小野正己、工藤保、丸小野進、佐藤厚士、秋吉サツキ、上村仁、
森崎フキ、横山スミ子、河野英子、斎藤君江、松本義人、
安達延子、下村アヤメ、河野千図子、吉岡禅哲、御手洗吾一郎、
寺司勝次郎、酒井治郎、佐藤武正、秦野千里、幸野広、高橋直記
後藤秋生、三浦敏男、後藤ヨカ、宇留島孔明、豊東サツキ、
松本智裕、甲斐隆司、立川寛一、工藤志津雄、赤星節生、秦利彦
波多野テル子、河野和夫、一万田充重、後藤熊五郎、高崎幹雄、
杉崎高喜、加村和真、秋吉和行、佐藤喜久代、住田政利、
和田章彦、岸和田泉、小野昂、高橋一幸。
野津原町教育委員会、中央公民館、社会教育課、中部校挿絵集団
第百生命フレンド集団、日本財団、ベスト電気宗方店、法心寺。
直入町⇨上浦町⇨佐賀関町⇨大分市鶴崎の老人クラブ有志。、